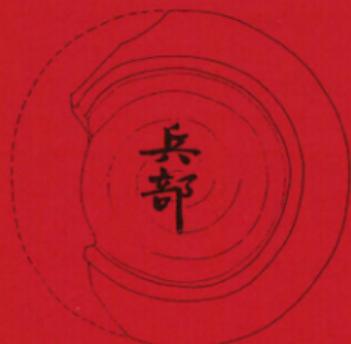


1990年度

平城宮跡発掘調査部  
発掘調査概報



1991

奈良国立文化財研究所

正誤表

P.112右下 図67キャプション  
S B 10 → S B 07に訂正して下さい。

## 凡　　例

1. 本書は、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が、1990年度に実施した平城宮跡および平城京内遺跡の発掘調査の概要報告である。各調査報告の執筆は、各現場の発掘担当者などが行なった。また、前年度までの調査で出土した長屋王邸出土の木器については、整理が完了したものについて、本書に概要を収録した。写真撮影は佃幹雄と牛嶋茂が行なった。
2. 第212次調査、第219次調査、第221次調査については本書に概要を収録したが、別途報告書を刊行する予定で、詳細はそれによられたい。
3. 第216次調査のプラントオパール分析は宮崎大学藤原宏志氏、第212次調査の脂肪酸分析は帯広畜産大学中野益男氏に依頼し、原稿をいただいた。
4. 発掘遺構図に付した座標値は、平城宮内遺構、平城京内遺構ともに国土方眼第VI座標系による座標値である。高さはすべて海拔高で示す。
5. 遺構図には、遺構ごとに一連の遺構番号を付け、番号の前に、SA（築地・塀）、SB（建物）、SC（廊）、SD（溝）、SF（道路）、SK（土坑）、SS（足場穴）、SX（その他）などの分類記号を付した。なお遺構番号のなかには仮番号で示したものも含んでいる。
6. 平城宮出土軒瓦・土器の編年は次のように表わす（カッコ内は西暦による略年代）。平城京内についてもこれを準用した。

軒瓦；平城宮出土軒瓦編年第I期（708～721）、第II期（721～745）  
第III期（745～757）、第IV期（757～770）、第V期（770～784）  
土器；平城宮土器I（710）、II（725）、III（750）、IV（765）、V（780）、  
VI（800）、VII（825；平城上皇期）

なお、本文中の軒瓦編年の細分などについては別途刊行予定の『平城宮発掘調査報告』XIIの軒瓦編年に基づくものである。
7. 本文未収録調査については、巻末「その他の発掘調査一覧」を参照されたい。
8. 本書の編集は、部長町田章の指導のもとに、玉田芳英が担当した。

## 目 次

<b>I 平城宮の調査</b>	
1 兵部省の調査(1)	第205次 ..... 3
2 兵部省の調査(2)	第214次 ..... 16
3 壬生門北方の調査	第216次 ..... 28
4 式部省の調査	第220次 ..... 36
5 第一次大極殿地図の調査	第217次 ..... 44
6 宮北面大垣の調査	第215-6次 ..... 59
7 東院地区東辺の調査	第215-7次 ..... 60
8 内裏北方官衙・大講職地区的調査	第215-13次 ..... 62
<b>II 平城京・京内寺院の調査</b>	
1 左京一条三坊二坪の調査	第215-5次 ..... 68
2 左京一条四坊三坪の調査	第215-8次 ..... 70
3 左京二条一坊六坪の調査	第215-1次 ..... 74
4 左京二条二坊四坪の調査	第215-16次 ..... 81
5 左京二条二坊九坪の調査	第215-3次 ..... 92
6 西一坊大路の調査	第215-4次 ..... 94
7 薬師寺講堂・北面回廊の調査	第218次 ..... 97
8 西隆寺旧境内の調査(1)	第212次 ..... 106
9 西隆寺旧境内の調査(2)	第219次 ..... 111
10 西隆寺旧境内の調査(3)	第221次 ..... 120
11 法華寺境内の調査	第215-15次 ..... 126
12 長屋王邸および二条大路出土の木製品	..... 131
<b>III 出土試料の理化学的分析</b>	
1 第216次調査におけるプラント・オパール分析について	..... 140
2 西隆寺跡から出土した土器に残存する脂肪酸分析	..... 143
<b>写 真</b>	
1 第214次	兵部省・朝集殿院間の掘立柱建物
2 第216次	兵部省東門と宮内道路
3 第205次	兵部省西南部全景
4 第205次	下層掘立柱塗SA1765
5 第205次	兵部省西第二堂
6 第220次	式部省西第二堂
7 第218次	薬師寺講堂と北面回廊
8 第219次	西隆寺 扉板を転用した井戸

その他の発掘調査一覧

# I 平城宮の調査

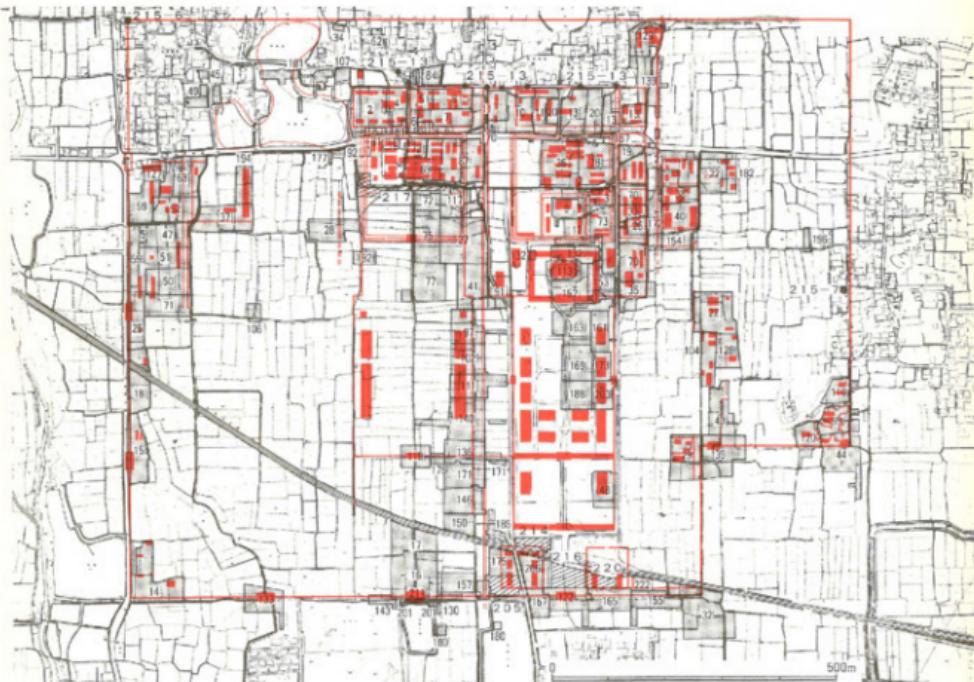


図1 1990年度平城宮内発掘調査位置図 (1 : 10000)

表1 1990年度 平城宮跡発掘調査地一覧

調査次数	調査地区	地区名	面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	調査担当者	備考	掲載頁
205	兵部省	6AAY 6ABL	1,700	4. 1 ~ 7.31	渡辺 晃宏 松本 修自		3
214	兵部省	6AAX 6AAY	850	4.17 ~ 7.21	渡辺 晃宏		16
216	壬生門北方	6AAY	2,500	10. 4 ~ 2. 26	玉田 芳英 寺崎 保広 鶴野 和己		28
217	第一次大極殿地区	6ABD 6ABP 6ABQ	2,985	7. 5 ~ 12. 12	森木 晋		44
220	式部省	6AAY	1,500	1. 8 ~ 4. 4	寺崎 保広		36
215-6	平城宮北面大垣	6ADA	85	8. 9 ~ 8. 18	毛利光俊彦	西口盛朗宅	59
215-7	東院地区東辺	6ALD	42	8. 21 ~ 8. 25	本中 真	松本富蔵宅	60
215-9	平城宮北方遺跡	6ASB	7	9. 10 ~ 9. 11	島田 敏男	西蓮寺	
215-10	平城宮北方遺跡	6ASA	12	9. 18 ~ 9. 21	島田 敏男	教行寺	
215-11	平城宮北方遺跡	6ASA	12	9. 25 ~ 9. 26	本中 真	西口精彦宅	
215-13	内裏北方官衙・ 大膳職地区	6AAO 6ABA 6ABB 6ABN 6ABO 6ACA	118	10. 17 ~ 1. 25	小沢 肇 森 公章 小池伸彦 浅川滋男	佐紀町下水道	62
215-17	平城宮北方遺跡	6ASC	15	1. 9	巽 淳一郎	山口正治宅	

## 1 はじめに

いわゆる第二次朝堂院地区の朝集殿院の南側、壬生門内の東西に対称に配された官衙のうち、西側の官衙については、これまでの数次にわたる調査によって、律令制八省の一つの兵部省であることが判明し、その構造も明らかになってきた。

これまでの調査の概略を述べると、まず1985年の第167次調査で兵部省を囲む築地の南東隅部分を検出し、ここに役所の区画があることが判明した。ついで1987年の第175次調査では、西面築地と西門、礎石建物3棟（北西建物・西第一堂・西第二堂北妻）、及び役所を南北に区画する東西塀を、また1989年の第206次調査では、東面築地と東門、礎石建物3棟（北方建物・東第一堂・東第二堂）などを検出した。

これらの成果により、区画の北辺に東西棟3棟を配し、これとは区画塀で区切られた南側に、中央の広場を挟んで東西に2棟ずつの南北棟が並ぶという左右対称の南に開いたコの字形の配置をとること、しかも建物が全て礎石建ちという極めて格式の高い一郭を構成すること、また、区画の東西規模は約74.5mで、250



図2 第205・214・216・220次調査位置図

小尺の寸法で計画されたことなど、省クラスの役所としては初めてその全貌が明らかになりつつある。

今回の調査区は、兵部省の区画を継続する道路の西側、第175次調査区の南側にあたり、西第二堂を中心とする兵部省南西部、及び兵部省とSD3715（いわゆる第一次朝堂院地区といわゆる第二次朝堂院地区の間を南流する中央大溝）とに挟まれた地域の利用状況の解明をめざしたものである。北側は第175次調査区と、また西側は第157次調査東区とそれぞれ一部重複する。調査は1990年1月8日に開始し、7月31日に終了した。

## 2 基本層序及び整地

調査区の基本的な層序は、上から表土及び整備盛土10~40cm、旧水田耕作土10~25cm、床土5~15cm、遺物包含層（茶褐色ないし黄灰砂質粘土）5~10cmと続き、ついで旧水田耕作土の表面から30~50cmで遺構検出面である奈良時代の整地層ないし古墳時代の遺物包含層に達する。

調査区内の西から五分の二ほどでは、旧水田耕作土の表面から40~50cmほどで古墳時代の遺物包含層である暗灰褐砂質粘土層、さらに20~30cmほどで灰褐砂の地山に達する。地山は西端のSD3715の際が最も高く、東に向かって緩やかに傾斜するが、兵部省西面築地西側のY=-18435ライン付近から急激に落ち込んでおり、調査区の東五分の三では、暗灰粘土の地山まで旧水田耕作土の表面から100~120cmある。兵部省の南西部はもとは低湿地状になっていたものと考えられる。

奈良時代の整地層は、概ね三期に分けられる。第一次整地は、前述の低湿地帯を埋める整地である。灰白色の粘質土の混じった暗灰粘質土（下層）と暗灰褐粘質土（上層）の二層があり、いずれの層も若干の瓦を含む。この二層の整地は一連の仕事と考えられ、第175次調査の所見の第一次整地がこの整地にあたる。

第二次整地は、第一次整地によってほぼ平らになった上に施した灰褐砂質土による整地で、20~30cmの厚さがある。第175次調査の所見の第二次整地がこれにあたり、今回の調査区内では兵部省区画外を含めてほぼ全面に整地が認められた。なお、第一次整地と第二次整地の時期差の有無については、明確な知見は得られ

なかったが、第一次整地層の上面から掘形を掘って柱を建てる区画擣の工法（後述）から考えると、第一次整地と第二次整地は一連のものである可能性が高い。兵部省は、区画内西部の低湿地帯をまず粘質の上で埋めた後、さらに区画外をも含めて全面に砂質の土で整地した上で造営されたのである。

第三次整地は、兵部省区画内のみにみられる灰色砂質土による整地で、後述のように築地に片庇廊を設ける際に、区画内全面を整地し直したときのものと考えられる。厚さは5～10cmであるが、区画内西半部ではあまり残りがよくない。

### 3 遺構

検出した遺構は、兵部省建物建設以前のもの（下層遺構）としては、南面大垣に先行する平城宮南面の区画施設と考えられるSA1765とその南北両雨落溝、中央大溝SD3715の東側の南北廊とその東雨落溝、兵部省下層の南北溝3条があり、兵部省に伴うもの（上層遺構）としては、南面築地とその南北両雨落溝、南面築地下の暗渠2箇所、西面築地とその東西両雨落溝、西面築地基底部の堰板を止める添柱痕跡、兵部省西第二堂とその東西向雨落溝、南面築地片庇廊とその雨落溝、西面築地片庇廊とその雨落溝、兵部省中央広場内の土坑などがある。以下、時期ごとに順次概要を述べる。

#### A 奈良時代前期、兵部省建物建設以前

SA1765 宮南面大垣の北約16mの位置にある掘立柱東西擣。第16・122・157・167・206次調査で既に検出し、朱雀門の東から壬生門の西まで続くことが判明しているものの一部で、今回新たに7間分確認した。南北両雨落溝とともに、調査区西半部の兵部省区域外で、整地土（第二次整地土）を一部除去して、古墳時代の遺物包含層である暗灰褐色砂質粘土層の上面で検出した。また、調査区東端でも柱穴1個を確認している。掘形は東西150cm、南北90～130cmの長方形で、現状の深さは80～120cmあり、柱抜取痕跡が認められる。柱間は約2.85m（9尺5寸）あり、第157次調査所見の9尺よりは広い。調査区東端で検出した柱穴も考慮すると、柱間は平均2.88mとなる。

SD13940 SA1765の柱筋から北約190cmの位置にある幅90～100cm、深さ30

～40cmの素掘りの溝である。既に第157次調査東区で検出しているもの（SD11702）の続きで、SA1765の北雨落溝と考えられる。調査区東端では兵部省造営工事によって削平されたためか、SD13945とともに確認できなかった。

SD13945 SA1765の柱筋から南約190cmの位置にある幅90cm、深さ30～40cmの素掘りの溝で、SA1765の南雨落溝と考えられる。第157次調査では確認できなかったが、第16・122次調査で宮内道路SF1761の北側溝としてその両端を検出した溝（SD1764）と一連のもので、SA1765に対応して朱雀門の東から壬生門の西まで続くことがほぼ確実になった。兵部省南面築地SA12400は、ほぼSD13945の直上に造営されている。

SS13950・13955 下層東西塀SA1765の柱間中央部の北（SS13950）及び南（SS13955）に柱筋から220～240cmを隔てて並ぶ足場穴列で、SD13940及びSD13945の底で検出した。第157次調査で検出したSS11730と一連のものである。同調査区では、溝が削平されていたため、足場穴のみ検出できたのであろう。調査区東端でも、南北それぞれ1個ずつの柱穴を確認した。

なお、本年度の第216次調査において、東西塀SA1765・北雨落溝SD13940・南雨落溝SD13945が朱雀門の東から壬生門の西まで続くだけでなく、壬生門の東から新たに同様の南北両雨落溝を伴った東西塀SA14400が始まる事を確認している（本概報28～35頁参照）。

SC11700 第157次調査東区において、中央大溝SD3715の東岸に10尺等間の掘立柱南北塀SA11700を検出していたが、今回その北延長部4間分、及びこの東10尺の位置にあり柱筋を揃える10尺等間の南北塀を新たに検出した。これは南北150cm、東西120cm、現状での深さ100～120cmに及ぶ掘形をもち、柱痕跡はなく、明確な抜取穴も認められないなど、既検出のSA11700の柱穴とよく似た特徴をもつ。また、南端の柱穴はSA1765の柱穴と切り合いがあり、SA1765よりも新しいことがわかる。これはSA11700とSA1765の切り合い関係とも一致する。このような所見の類似や位置関係からみて、今回検出した南北塀は、SA11700とともに梁間10尺の单廊を形作っていたと考えられるので、SC11700と

する。

第157次補足調査の所見では、SA11700は南面大垣SA1200建設の際に取り壊されたと考えられており、今回単廊であることが判明したSC11700もその性格はなお不明である。なお、中央大溝SD3715はその東岸のみを検出し、主として下層の黒灰粘土層から多数の瓦が出土した。

SD13985 SC11700の東側柱筋の東約3m（10尺）の位置にある素掘りの南北溝。幅80～100cm、深さ10～20cm。SC11700の東雨落溝であろう。

SD12998 第175次調査で検出した兵部省建物建設以前の奈良時代の素掘りの南北溝で、今回その延長部分を二箇所で確認した。後の兵部省西第二堂SB12980の西側柱の位置を南流し、兵部省の区画を越えてさらに南流する。幅150cm、深さ30cmで、第一次整地層の上面から掘り込んでいる。第一次整地と第二次整地は、前述のように一連のものである可能性が高いので、SD12998は後述のSD13900・13905とともに、兵部省建設工事に伴う排水用の溝と考えられる。

SD13900 兵部省建物建設以前の奈良時代の素掘りの南北溝で、三箇所で確認した。後の兵部省西第二堂SB12980の東側柱筋からわずかに東に寄った位置を南流する。幅30～60cm、深さ20cmで、第一次整地層の上面から掘り込んでいる。もともと後の兵部省の区画を越えてさらに南流していたが、兵部省建物建設時に、西第二堂の東雨落溝SD12995の排水路として利用され、兵部省南面築地下には暗渠SX13850が設けられた。

SD13905 後の兵部省西面築地SA13030直下やや西よりの、地山が西から東に急激に下がる部分で検出した奈良時代の南北溝。第一次整地層の途中から掘り込んでいる。幅170cm、深さ70cmあり、木屑や檜皮を含んでいた。調査区の南端と北端ではその行方を確認できなかったので、土坑の可能性もある。

SX13937 片庇廊SC13915のすぐ東側で、第一次整地層上面で検出した、10尺の間隔で南北に並ぶ柱穴。南のものは柱根が残る。上層建物との明確な位置の対応関係はみられない。建物の一部と考えられ、第一次整地層の面に下層遺構が存在する可能性を示唆するが、建物としてまとまる遺構は検出できなかった。

## B 奈良時代後期（1）

SA 12400 兵部省南面築地。第122・167・206次調査で検出したものの西延長部分にあたる。残存基底幅は2.4m、積土が40cmほど残る。堰板抜取痕跡から築地本体の幅は1.5m（5尺）に復原できる。従って、第206次調査において東面築地SA13720基底部で検出した柱列、及び西面築地SA13030基底部で今回検出した後述のSS13890・13895は、添柱の痕跡だったことになる。なお、後に片庇廊SC13910が付設される。

SD 13840 南面築地SA12400の南雨落溝。幅100～120cm、深さ20～30cm。築地心からの距離は190～200cm、西に行くに従って、次第に不明瞭になる。

SD 13855 南面築地SA12400の北雨落溝のうち、西第一堂と西第二堂の東雨落溝SD12995以東の部分。西流してSD12995に注ぐ。築地心から1.7～1.8m（6尺）北の位置にある。幅40cm、深さ20cm。後に片庇廊SC13910付設に伴う第三次整地によって埋め立てられ、SD13865に付け替えられる。

SD 13860 南面築地SA12400の北雨落溝のうち、SD12995以西の部分。北側は凝灰岩で護岸している。西第二堂の西雨落溝SD13870と東雨落溝SD12995

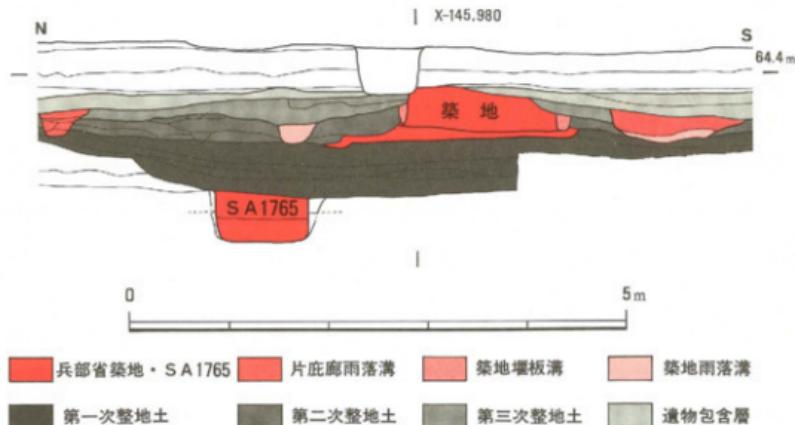


図3 SA1765と兵部省遺構の関係（東壁断面）

を結ぶ。築地心からの距離は、SD13855と同じ1.7~1.8mであるが、幅は70~80cmと広く、深さも20~30cmある。後の片庇廊の付設に伴い、西面築地東側の排水をも集めることになったためであろう。

SA13030 兵部省西面築地。第175次調査で検出したものの南延長部分にあたる。残存基底幅は1.8m、積土が15cmほど残る。後に片庇廊SC13915（西門以南）・13925（西門以北）が付設される。

SS13890・13895 兵部省西面築地SA13030基底部上で検出した添柱列。築地の東側（SS13890）と西側（SS13895）に1.9~2.4mの柱間で並ぶ。対になるものの距離は内法で1.5mあり、これが築地本体の幅となる。

SD13875 西面築地SA13030の東雨落溝。築地心からの距離は1.7~1.8m（6尺）、幅50cm、深さ10cmで、一部途切れる箇所がある。両側に幅30cm、深さ15cmの溝SD13928・13929を伴うが、これはSD13875を護岸した石の抜取穴の痕跡か。南面築地SA12400を木樋を伴う暗渠SX13880で抜ける。後に片庇廊SC13915・13925付設に伴う第三次整地によって埋め立てられ、SD13010に付け替えられた。

SD13025 西面築地SA13030の西雨落溝。築地心からの距離は1.7~1.8m（6尺）、幅90cm、深さ20cm。

SB12980 兵部省西第一堂。第175次調査で検出した西第一堂SB12990と柱筋を揃えて建つ南北棟礎石建物で、周囲に溝が巡る。北妻は既に同調査で確認している。桁行5間、総長20.7m、梁間2間、総長6m、桁行は14尺等間、梁間は10尺等間に復原できる（なお、第175次調査で9尺に復原している西第一堂SB12990の梁間は、今回の成果から10尺に復原でき、東第一堂SB13750と同規模であったと考えられる）。第一堂との間隔は11.4m（38尺）を測る。基壇の規模は、現状で南北23.1m、東西9mで、茶灰褐砂質土の基壇土が約10cm残存する。基壇の東西に縁石の抜取跡（東側SX13858・西側SX13859）があり、50cm程度の玉石を一段ないし二段積んで化粧をした基壇であったことが知られる。礎石は全て原位置から動かされ、土坑に落とし込まれているが、根石が原位置に若干

残るものが多い。礎石据付掘形は、一辺1~1.2mの方形で、現存深さは約30cmである。

なお、東側柱の南から3つめの礎石据付掘形から、平城宮式鬼瓦II A<sub>2</sub>が出土した。昨年度の第206次調査でも、兵部省東第二堂の礎石据付掘形から平城宮式鬼瓦II A<sub>2</sub>（図15）や軒平瓦6663Cが出土しており、兵部省の礎石建物の建設が天平よりも前には遅らないことが確実になった。

SD12995 西第一堂・第二堂の東雨落溝を連ねて南流し、築地下の暗渠SX13850へと導く幅50cmの玉石組の南北溝。東側石の残りはよい。南部は下層の南北溝SD13900をそのまま利用して排水している。

SD13870 西第一堂・第二堂の西雨落溝を連ねて南面築地際まで南流し、凝灰岩で護岸した東西溝SD13860に接続、さらに東流してSD12995に注ぎ込む。東雨落溝とは異なり、玉石組の痕跡はない。なお、西第二堂北西隅より北では、削平により、はっきりしない。

SA13920 西第二堂北妻と西面築地を結ぶ掘立柱  
東西屏。4間分確認した。柱間は西から2.55m、3m、2.7m、3mで、8.5~10尺に相当する。東第二堂の北妻と東面築地を結ぶ掘立柱東西屏SA13737と左右対称の位置関係にあるが、屏口の痕跡等は確認できなかった。西から2番めの柱穴は柱根を残し、その所見によれば、まず第一次整地層の面から掘形を掘って柱を立て、次に柱の回りに根固めの土盛りを行ない、その後で第二次整地を行なうという工程をとったことがわかった。これは一連の造営工事に伴うものと考えられるが、SA13920自体がもともと下層遺構に伴うものであった可能性は残る。兵部省内の区画屏は基本的には同じ工法による。

SX13850 西第二堂の東雨落溝SD12995から南面築地SA12400の南側へ排水するための暗渠。下層南北溝SD13900の流路をそのまま利用している。木樋の痕跡を残す。

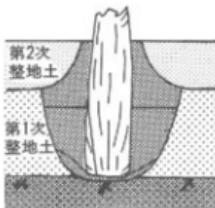


図4 SA13920柱穴模式図

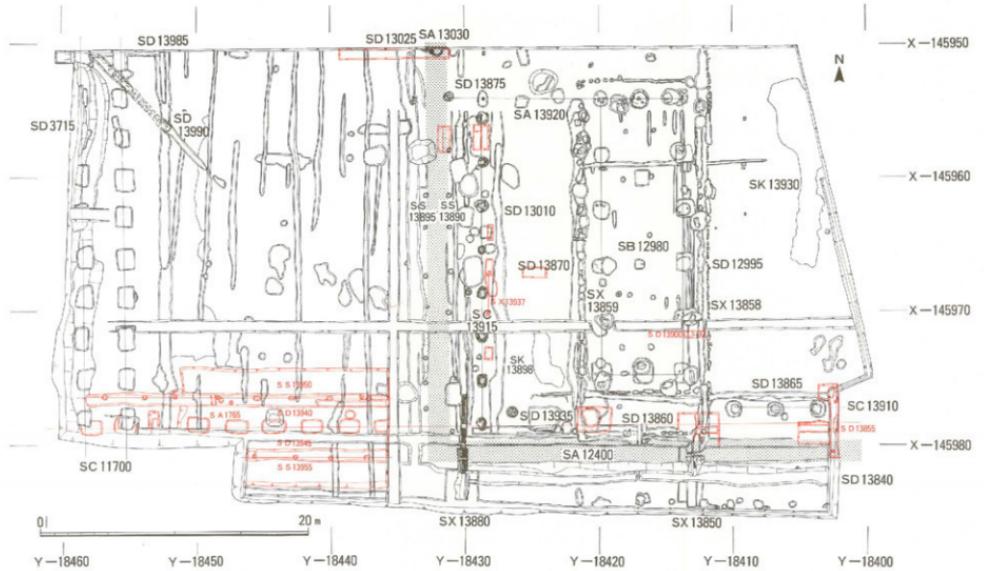


図5 第205次調査遺構図 (1 : 300)

SX13880 西面築地の東雨落溝SD13875から南面築地SA12400の南側へ排水するための暗渠。幅25cm、長さ5.7mに及ぶ一木をくりぬいた木樋が置かれていた。深さは8~9cmある。片庇廊SC13915・13925建設に伴って、第三次整地土で埋められた。

SK13930 西第一堂から西第二堂にかけての東側の広場部分に掘られた土坑で、大量の瓦、及び凝灰岩が投棄されていた。第二次整地土の面から掘られており、第三次整地を行なって片庇廊を付設する際の造営工事に伴うものか。

### C 奈良時代後期（2）

基本的な建物配置は変わらないが、築地に片庇廊を付設するのに伴い、新たな整地を行ない（第三次整地）、溝の付け替え等を行なう（図6参照。兵部省南東部分の溝の変遷も、兵部省東西中軸線を挟んで左右対称になるが、基本的な構造は同じ）。東門を八脚門に建て替えるのもこの時であろう。

SC13910 兵部省南面築地SA12400に設けられた片庇廊のうち、南門（未確認）以西の部分。当初の南面築地雨落溝SD13855を第三次整地で埋めて基壇を造成し、礎石を据えている。今回原位置で礎石を3個検出した。一辺60cmほどの上面の平らな花崗岩を用いている。第206次調査の所見からみて道路下にあと2個礎石があると考えられ、南門の取り付きを除いて全部で4間か。柱間は10尺等

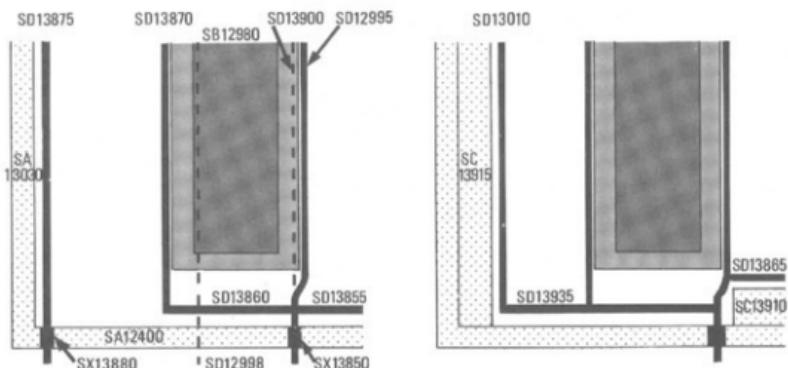


図6 兵部省南西隅の溝の変遷

間、築地心からの出は3.2m（11尺）である。礎石据付掘形は現状で10cm程度と浅く、根石も用いていない。北雨落溝SD13865の位置からみて軒の出は4尺か。兵部省と千牛門を挟んで対称の位置にある式部省では、南面の片庇廊は南門の東西各5間で、第二堂の南側まで延びるが、兵部省の場合、第二堂の広場側の雨落溝がそのまま南流するので、5間とは考えにくい。

SD13865 片庇廊SC13910の北雨落溝。幅40cm、深さ20cm。南面築地北雨落溝SD13855を第三次整地によって埋めた後、その北8尺の位置に新たに掘削された。

SC13915 兵部省西面築地に設けられた片庇廊のうち、西門SB13040以南の部分。当初の西面築地雨落溝SD13875を第三次整地で埋めて基壇を造成し、礎石を据えている。全部で7間分確認した。南から2、3、4、6番めについては礎石を原位置で検出した。他の4個も根石がかなり残存する。柱間は11尺等間、築地心からの出も11尺である。礎石据付掘形は現状で深さ15cm程度と浅い。

SD13010 片庇廊SC13915の東雨落溝。幅90cm、深さ20cm。西面築地東雨落溝SD13875を第三次整地によって埋めた後、その東8尺の位置に新たに掘削された。これに伴い、SD13875が接続していた暗渠SX13880も埋められ、SD13010の排水は南面築地内側にSD13935を掘削して東流させ、SD13860・SD12995・SX13850を経て、築地外へ送るようになった（図6）。

SD13935 南面築地SA12400の北雨落溝のうち、SD13870以西の部分。西面築地片庇廊付設に伴って新たに設けられた雨落溝SD13010の排水路として掘られた素掘りの東西溝。東流してSD13870と合流して、SD13860を経てSD12995に注ぐ。

#### D その他の遺構

SD13990 調査区北西隅で検出した斜行溝で、大量の瓦やバラスで埋められていた。層位からみて平安時代以降のものであろう。

#### 4 遺物

調査区全域、特に兵部省区画内の整地土から、瓦が大量に出土した。特に第二

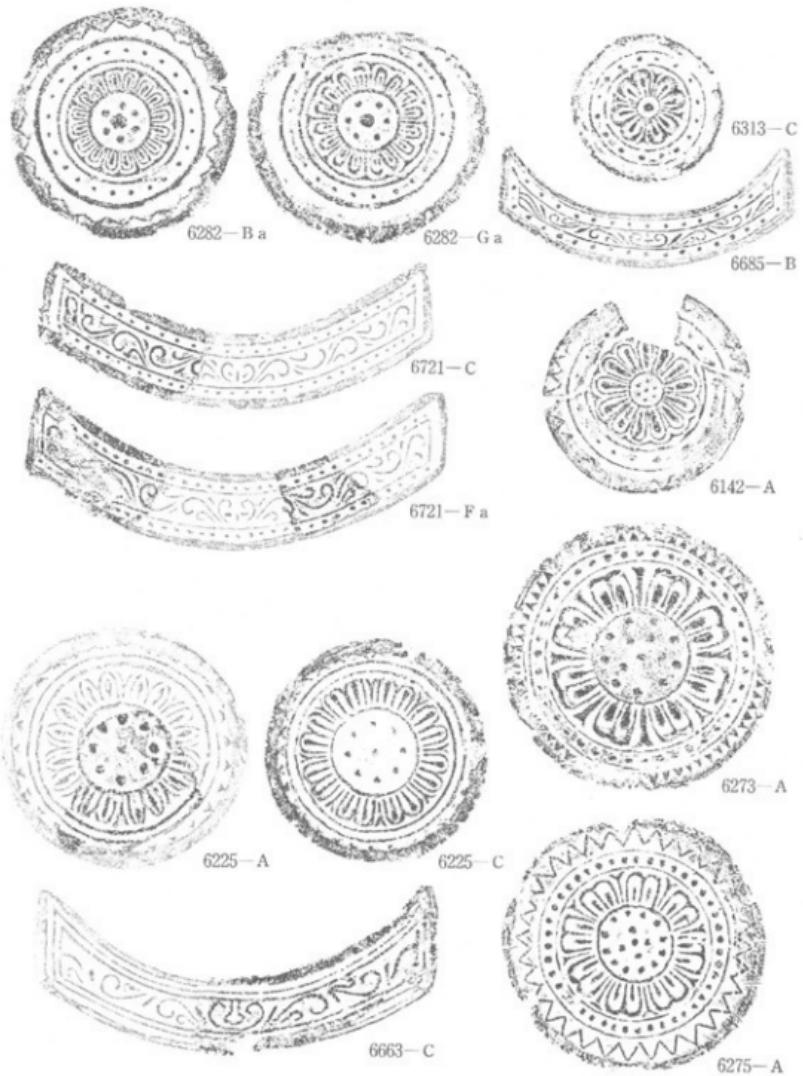


圖7 第205・214次調查出土軒瓦 (1 : 4)

表2 第205次調査出土軒瓦集計表

軒 丸 瓦				軒 平 瓦				道具瓦			
型式	種	点数	型式	種	点数	型式	種	点数	型式	種	点数
6142	A	5	6282	G	7	6641	E	3	型式不明	2	鬼瓦
6225	A	1	不明	2		F	1				
	C	7	6284	C	3	6643	C	3			
6273	A	1	6291	A	1	6663	C	4			
	B	3	6303	B	1	不明	2				
	不明	2	6304	A	1	6664	C	1			
6274	B	1		B	1	F	1				
6275	A	2	6307	A	1	6668	A	1			
	I	1	6308	A	1	6681	A	1			
	J	1	6311	B	2	C	1				
6279	A	3	6313	A	4	6685	A	1			
6281	A	2		C	1	6721	F	3			
6282	D	1	型式不明		9	不明	1				
軒 丸 瓦 計				軒 平 瓦 計				25	道具丸 計		

次整地土からの出土が多い。軒瓦の出土は、SD3715出土のものを除いても100m<sup>2</sup>あたり4.4点で、兵部省の調査の中では最も多い（北西部の第175次調査：100m<sup>2</sup>あたり4.0点、東半部の第206次調査：100m<sup>2</sup>あたり3.6点）。出土の傾向は従来の所見とほぼ同じで、6282G-6721Fと6225C-6663Cを兵部省所用軒瓦とするこれまでの見解は、概ね妥当といえよう。ただ、6225C-6663CはSD3715に多く、兵部省区画内に限れば今回はさほど多くはない。これは北側の第175次調査の所見とも近く、東側の第206次調査の範囲とは若干異なる傾向を読みとることも可能であろう。なお、前述のように鬼瓦も出土しており、平城宮式鬼瓦II A<sup>2</sup>が含まれる（第206次調査では鬼瓦5点の他、隅木蓋瓦も2点出土している）。

土器・木製品の出土は少ないが、第一次整地層には兵部省造営時のものと思われる木屑が含まれていた。また、下層南北溝SD13905からは檜皮も出土した。包含層からは、ふいごの羽口、釘、鉛錠などの他、宋錢（祥符元年）1枚が出土した。

## 5 まとめ

今回の調査の結果、兵部省南西部の様相、及びその西側の状況が明らかになった。得られた成果を改めてまとめておこう。

- ①兵部省造営に伴う大規模な整地の状況が明らかになった。東半部の厚い箇所では整地は1mにも及ぶ。当初の造営に伴う整地は二層あり、まず、調査区

東半部の低湿地を粘質の土で埋めた後（第一次整地）、この地域全体を瓦を多く含む灰褐色砂質土で整地している（第二次整地）。これらは一連の工程に伴うものと考えられる。

②兵部省造営に伴うと考えられる遺構を検出した。第175次調査で既にSB13057を検出している第一次整地層上面で、2条の南北溝SD12998・SD13900、及び建物の一部の可能性のある遺構SX13937を確認した。また、第一次整地層の途中から掘り込まれた南北溝SD13905を検出した。第一次整地と第二次整地は一連のものと考えられるので、これらは兵部省建物建設工事に伴う排水溝や雑舎である可能性が強い。

③上層の兵部省の礎石建物に匹敵するような下層の遺構は確認できず、奈良時代前半の兵部省が、この地にはなかった可能性がさらに強まった。

④兵部省の西第二堂を検出し、東第二堂と同規模であることが判明した。年代も従来の知見と同じく、奈良時代後半、平城遷都後とおさえられる。

⑤兵部省築地本体の幅が5尺であることが判明した。築地基底部に並ぶ小穴列は、築地積土の堰板を止める添柱であることがわかった。

⑥築地片庭廊の付設と、これに伴う排水路付け替えの状況が明らかになった。片庭廊付設に際しては、区画内全面に灰色砂質土で新たな整地を行なっている（第三次整地）。

⑦兵部省西側のSD3715までの地域は、奈良時代を通じて役所の区画としては利用されていないことがわかった。

⑧南面大垣に先行すると考えられる掘立柱東西塀SA1765は、南北に雨落溝を伴い、朱雀門の東から、壬生門の西まで続くことが判明した。

⑨SD3715際の南北塀SA11700は、単廊であった可能性が高いことがわかった。但し、その性格は依然として不明である。

なお、兵部省の調査全体の成果と今後の課題については、2 兵部省の調査（2）第214次調査の項（本概報16～27頁）で述べる。（渡辺晃宏）

### 1 はじめに

この調査は、兵部省の調査としては最後のもので、その北東隅部分を検出して兵部省の区画の南北規模を確定することを主な目的とし、合わせて兵部省と朝集殿院とに挟まれた、東西に細長い通路状の地域の利用の仕方の解明をめざしたものである。

これまでの兵部省の調査では、北面築地は確認できず、しかも西面築地延長ラインのかかる近鉄線北側の第185次調査でも北西隅部分を検出できなかつたので、兵部省西面築地はちょうど近鉄線の線路下で東に曲がると推定していた。この北面築地の東端の確認が、近鉄線の線路の北側の本調査区で期待された訳である（これまでの兵部省の調査の概要、及び調査位置などについては、兵部省の調査（1）第205次調査の項、3～15頁参照）。

調査区は北と西を道路、南を近鉄線に囲まれた東西長約60mに及ぶ細長い形をしており、東端は第206次調査区東端ラインの北延長線上に設定した。なお、調査区内東部には、1922年10月（大正11）の史蹟指定に伴う「史蹟平城宮跡」と刻む1924年建設の石碑が建っており、安全を配慮して石碑の周囲は残して調査した。また、兵部省北面築地確認のため、一部近鉄線線路際まで拡張した。調査は、1990年4月17日に開始し、7月21日に終了した。調査面積は約850m<sup>2</sup>である。

### 2 基本層序および整地

調査区の基本的な層序は、上から整備置土20～30cm、旧水田耕作土10～30cm、床上5～20cm、包含層の灰褐粘質土層約5～20cmと続き、ついで現地表面から50～70cmで遺構検出面である整地層ないし古墳時代の遺物包含層に至る。

奈良時代の整地層は兵部省東面築地付近以西、すなわち調査区の西側四分の三に広がり、概ね二層に分かれる。第一次整地層は、兵部省の内外にわたるが、自然流路SD14163付近を境にして土質が異なり、これより東では茶灰褐粘質土層で20～30cm、これより西では、橙茶褐粘土層で5～20cm程度の厚さがある。いず

れも古墳時代の遺物包含層である暗灰褐砂質粘土層の上に積んでいる。

第二次整地層は、灰褐砂質土ないし灰褐砂質粘土層で、15~25cmあり、兵部省東面築地東雨落溝付近まで兵部省の内外にわたって広がる。ほとんどの遺構はこの層の上面から掘り込んでいる。なお、この調査区における第一次・第二次整地は、第205次調査の所見の第一次・第二次整地にそれぞれ相当し、各々一連の整地であったと考えられる。

整地層の下には、古墳時代の遺物包含層である暗灰褐砂質粘土層が10~30cmあり、ついで現地表面から約100~120cmで、暗青灰砂ないし粘土の地山に達する。

### 3 遺 構

検出した主な遺構は、兵部省北面築地と北雨落溝、同東面築地と東雨落溝、築地添柱列、兵部省の北側に東西に並び、四周に雨落溝の巡る2棟の東西棟建物、これより新しい長大な東西棟建物、調査区南西隅で確認した建物の他、溝15条、自然流路3条、塹2条、土坑などである。これらは概ね4時期に分けられる。

#### A期 古墳時代

調査区西端で、第二次整地層上で検出した斜行溝SD14163は、遺構検出面では30cm程度の幅であるが、断面観察の結果、下層に2時期以上にわたる幅2~3mの自然流路SD14165を確認した。このうち最古のもの（SD14165A）は古墳時代の遺物包含層の面から削り込んでおり、遺物はほとんどないが、古墳時代の自然流路と考えられる。また、第二次整地層から削り込んだ溝もあり（SD14165B）、古墳時代以来、氾濫と埋立を繰り返していたのであろう。西隣の第185次調査区で確認した自然流路SD13110に関係するものか。

#### B期 奈良時代初期

SB14120 調査区南西隅で確認した掘立柱建物。第一次整地層の上面で検出したので、C期の遺構より古く、奈良時代初期のものと判断している。建物の北東隅部分の柱穴4個を確認したにとどまり、さらに調査区の西ないし南に延びる。柱穴は一辺60cm程度の隅丸方形で、深さは50~70cm、柱は全て抜き取られている。東西方向の柱間は11尺、南北方向の柱間は8尺である。建物の構造は不明。

### C期 奈良時代前期

SB14100 桁行5間、総長13.5m、梁間2間、総長5.4m、桁行・梁間方向とも9尺等間の東西棟掘立柱建物。SB14105とともに、兵部省と一連の整地土（第二次整地土）の上に建てられている。北側柱の東から3つめの柱穴は、新しい土坑によって破壊されている。柱穴は概ね60～70cm四方の隅丸方形で、深さは現状で60cm程度を測り、柱は全て抜き取られている。SB14100の周囲では、SD14136（東側）・SD14137（南側）・SD14138（北側）・SD14139（西側）などの溝を検出しており、柱筋から約90cm（3尺）を隔てて雨落溝が巡っていたと考えられる。このうち妻側の溝はともにそのまま南流し、兵部省北面築地北雨落溝SD14085に注いでいたようである。

SB14105 桁行5間、総長13.5m、梁間2間、総長5.4m、桁行・梁間方向とも9尺等間の東西棟掘立柱建物。SB14100と全く同じ平面プランを持ち、柱筋を揃えて建つ。東妻とSB14100西妻との距離は約12m（40尺）。柱穴は概ね60～70cm四方の隅丸方形で、深さは現状で60～80cm程度を測り、柱はいずれも抜き取られている。SB14100と異なり、SB14105の柱抜取穴には焼土が入っており、両者は共存した建物でありながら、廃絶（解体）の理由が違うことを現わしている。SB14105が火災に会ったため、ともに撤去されることになったのであろう。

SB14105の周囲でも、SD14159（東側）・SD14160（南側）・SD14161（北側）・SD14162（西側）などの溝を検出しており、SB14100と同様に柱筋から約90cm（3尺）を隔てて雨落溝が巡り、やはり妻側の溝がそのまま南流し、SD14085に注いでいたようである。

ところで、SB14100とSB14105は、柱筋を揃えて建ち平面プランも全く同じであるなど、一連の建物と考えられるが、建物の配置の面でも一貫した計画性が窺える。すなわち、東側は兵部省東面築地ラインに、また西側は朝集殿院西面築地ラインにそれぞれ規制されて建てられているようである。SB14100東妻は兵部省東面築地ライン（壬生門心の延長ラインから西へ130尺の位置）から西へ20尺の距離にあり、SB14105の西妻は朝集殿院西面築地ラインから同じく20尺

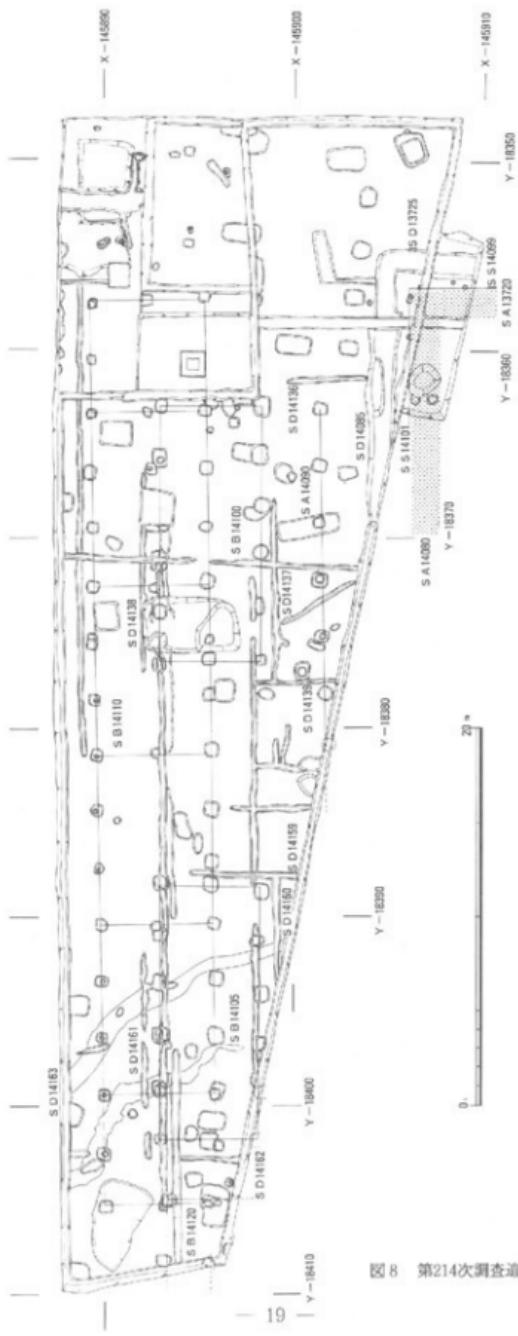


図8 第214次調査遺構図 (1 : 300)

の距離にある。すなわち、この空間に SB 14100 と SB 14105 を東西均等に配置していることがわかる。

なお、両建物心と兵部省北面築地心との距離は11.1m (37.5尺)、また朝集殿院南面築

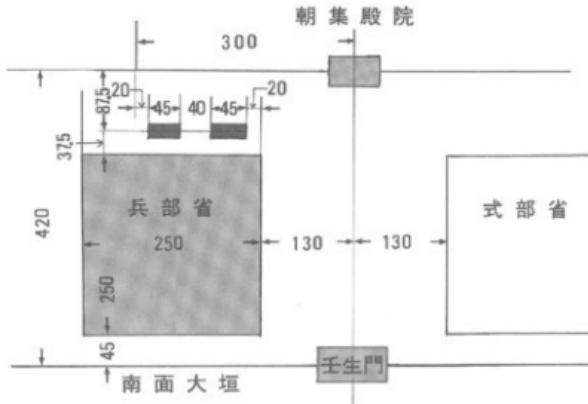


図9 SB14100・14105配置図(単位: 尺)

地との距離は87.5尺となる（朝集殿院南面築地は未確認で、朝堂院南面築地と平城宮南面大垣との距離を二分する位置に想定した場合の数字である）ので、この北側にもう一列の東西棟建物が存在する余地はある。

一方、SB14105の西の兵部省北側に、同じ間隔で同規模の東西棟を想定することは難しい。なぜならその西妻と兵部省西面築地ラインとの距離が15尺となり、兵部省北面における建物配置が左右対称ではなくなる。また、その西妻は第185次調査区にかかるはずであるが、朝集殿院西側にも役所の区画が存在したことが明らかになってはいるものの、朝集殿院南面築地の延長上に区画界があり、朝集殿院南面築地より南には、めだった建物は検出していないからである。兵部省北面に3棟の東西棟が存在した可能性は小さいといってよかろう。この地域は兵部省の裏側ではあるが、朝集殿院の前面でもあることをも考慮すべきだろう。

SB14100とSB14105の年代については、兵部省との併存の有無が問題となる。SB14105の柱抜取穴から平城宮瓦編年II期後半の瓦 (6721C)、及び平城宮土器III後半の土師器杯A・皿・碗Aが出土しており、また後述の小型瓦6313Cを葺いた檜皮葺き壇棟の建物とも考え得るので、兵部省造営以前に遡る可能性は否定できない。しかし、兵部省と一連の整地土の上に立地すること、兵部省の東

限にも規制された計画的な建物配置をとることなどから考えると、当初の造営は兵部省と一連とみるべき要素も強い。両説併記して後考をまちたい。ただ、兵部省と併存したとしても、SB14100・14105はのちにSB14110に建て替えられたと考えられるので、併存期間はあまり長くなかろう。

#### D 奈良時代後期

SA14080 兵部省北面築地SA14080と東面築地SA13720を南拡張区で検出した。築地本体の積土は全く残っていないかったが、築地の北雨落溝SD14085と東雨落溝SD13725、及び築地外側に等間隔で並ぶ添柱列SS14101・14099を検出したことから、兵部省北東コーナーの位置を推定することができた（X = -145,906.7、Y = -18,357.4：築地心の交点）。その結果、兵部省の南北規模は約74.0mで、東西規模と同じく250小尺で計画されたことがわかった。すなわち、東西が若干長め、南北が若干短めではあるが、兵部省は一辺250小尺の正方形のプランを持つとみてよからう。八省クラスの役所としては、全体のプランが解明できた最初の例となる。

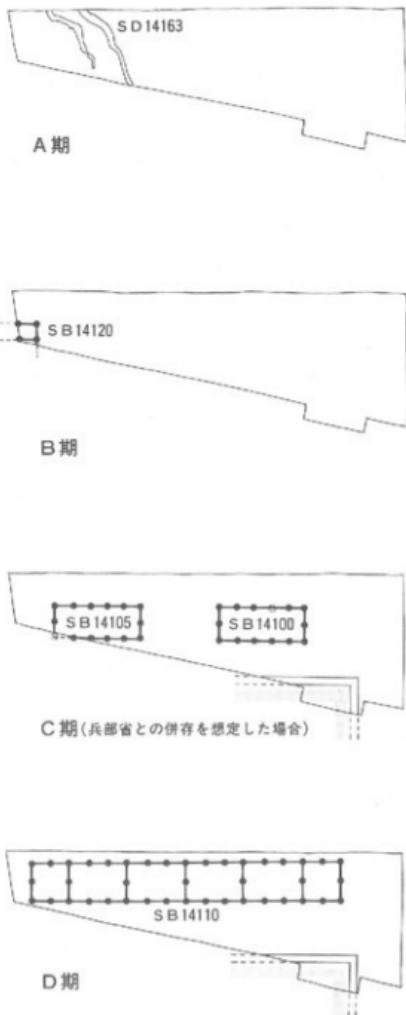


図10 第214次調査遺構変遷図

SD14085 兵部省北面築地の北雨落溝。幅1～1.5m、深さは30cm程度を測る。

調査区内で約15m分検出した。溝上部には黄褐バラス土の20～25cmに及ぶ厚い堆積が認められたが、これは築地崩壊土で人為的に埋め立てたものようである。

SD13725 兵部省東面築地の東雨落溝。幅1～1.3m、深さは30cm程度を測る。

調査区内で約5m分検出した。

SB14110 桁行16間、総長48m、梁間2間、総長6m、桁行・梁間方向とも10尺等間の長大な東西棟掘立柱建物。東西棟建物SB14100、SB14105の廃絶後に建てたもの。東妻は兵部省東面築地に、また西妻は朝集殿院西面築地にそれぞれ規制された位置に建つが（東妻は兵部省東面築地心ラインの位置、西妻は朝集殿院西面築地心ラインの東10尺の位置）、東で北に約1°振れている。間仕切り柱の柱穴を5個検出しており、東西両端のみ2間ずつ、中央は3間ごとに区切って利用していたことがわかる。柱穴は40～50cm程度の方形で、現存の深さも40cm程度と比較的小さい。南側柱筋の柱穴は北側柱筋のそれよりも若干大きい。柱穴に柱根を残すものはないが、径10～15cm程度の柱痕跡を残すものが多い。掘形から6313C（平城宮瓦編年II期前半）、6225A（II期後半からIII期前半）、6282Ba・6296A（III期前半）などの軒瓦が出土しており、SB14100・14105廃絶後、これに替わる建物として建てられたと考えられるが、儀式等に伴う輿合風の仮設的な建物の可能性もある。

SA14090 SB14110の南側柱筋から20尺南の位置に柱筋を揃えて建つ掘立柱東西塀。SB14110と同様に東で北に約1°振れている。SB14110東妻から3本めの柱位置から西へ6間分検出したが、さらに西へ延びるようである。SB14110に伴う目隠し塀か。

その他の遺構 調査区北東隅で検出した時期不明の土坑、これを切る平城宮軒瓦編年II期の瓦を含む南北溝（調査区南部での行方は不明）、小型瓦6313Cが出土した性格不明の数条の東西溝（SB14110より新しい）、時期不明の長方形の土坑状の穴など、線路沿いに立てた看板の基礎の掘形かと考えられる方形の新しい土坑を多数検出した。

#### 4 遺 物

包含層・整地層及び奈良時代の土坑から比較的まとまった量の瓦が出土した。軒瓦の出土は100m<sup>2</sup>あたり8.1点で、兵部省区画内の2倍に及ぶ。兵部省の所用軒瓦6282G-6721Fもあるが数は少ない。また、朝堂院所用軒瓦6225A-6663Cもみられる。このような事実から判断すると、今回の調査区の瓦は兵部省本体の瓦との共通性はあまりなく、むしろ北側の朝集殿院との関係が考えられよう。殊に小型瓦6313Cがまとまって出土しているのが目を引く。これは内裏を中心とする檜皮葺き建物や築地の棟瓦として用いたと考えている瓦である。この瓦を葺いていた建物を調査区内に求めれば、SB14100とSB14105であろう。なお、朝集殿院南面築地に由来する可能性も充分にある。

土器の出土は少ないが、SB14105の抜取穴や柱痕跡からは、土師器や須恵器がまとまって出土した。また、包含層からふいごの羽口の破片が出土した。木製品の出土はない。

この他、調査区東部の弥生・古墳時代の遺物包含層からは、サヌカイトの剥片などが10点あまり出土した。

#### 5まとめ

今回の調査で得られた成果を改めてまとめておこう。

①兵部省と朝集殿院に挟まれた地域が、兵部省及びその西側と一緒に工程で整地されていることが明らかになった。

表3 第214次調査出土軒瓦集計表

軒 丸 瓦						軒 平 瓦						
型式	種	点数	型式	種	点数	型式	種	点数	型式	種	点数	
6225	A	9	6296	A	1	6641	C	1	6685	B	5	
6275	A	1	6304	C	1	E	2	6682	A	1		
6279	A	1	6311	A	2	6643	C	1	6691	A	1	
6282	B	1		B	1	6663	C	3	6721	C	9	
	D	1	6313	C	14	6664	F	1		F	1	
	G	4		不明	1	6666	A	1		Ha	1	
不明	1	型式不明			3	6668	A	1				
軒 丸 瓦 計						41	軒 平 瓦 計					
											28	

②兵部省の北東隅部分を確認し、その南北規模が東西規模と同じ250小尺と判明した。従って、兵部省は正方形のプランで計画されたことがわかる。各面の築地ラインの国土座標のめやすは、東面築地： $Y = -18,357.4$ 、西面築地： $Y = -18,432.0$ 、南面築地： $X = -145,980.7$ 、北面築地： $X = -145,906.7$ である。

③これまで兵部省北面築地と朝集殿院南面築地に挟まれた通路状の箇所と考えてきていた地域で、二期間にわたる建物の存在を確認した。しかもそれらは、北の朝集殿院と南の兵部省に密接に関連する計画的な配置をとることが明らかになった。但し、SB14100・14105については、兵部省との併存の有無やその性格の解明は今後の課題である。

④朝集殿院南側において、兵部省建設に先行する可能性のある遺構の存在が明らかになった。

## 6 兵部省の調査のおわりに

第214次調査に至る3年度4次にわたる調査によって、兵部省の調査は現状で発掘可能な範囲については全て終了した。八省クラスの役所の全体像が把握できたのはこれが初めてで、その意義は大きい。しかしながら、南門や北方建物など、道路や線路の下にあって調査不可能な部分があるため、その全貌の解明には至らなかった。今後、兵部省と壬生門を挟んで対称の位置にある式部省の調査（現在進行中）。その成果の一部は、本概報36～43頁参照）の成果との比較検討が必要である。その意味では、兵部省全体としての総合的な考察は、なお今後の整理・研究に委ねる部分が大きいが、現時点で考えられるいくつかの課題について触れ、調査のまとめにかえたい。

### ① 兵部省の全体的な造営計画

まず、兵部省区画の平城宮内における位置について。朝集殿院南面築地を、朝堂院南面築地と平城宮南面大垣との距離を二分する位置に考えた場合、朝集殿院南面築地と南面大垣の距離は420小尺（350大尺。以下、単に尺とあれば小尺を指す）となる。兵部省は、南面大垣心の北45尺、壬生門心（いわゆる第二次朝堂院東西中軸線）の西130尺の位置を南東隅とし、一辺250尺（築地心々距離）の

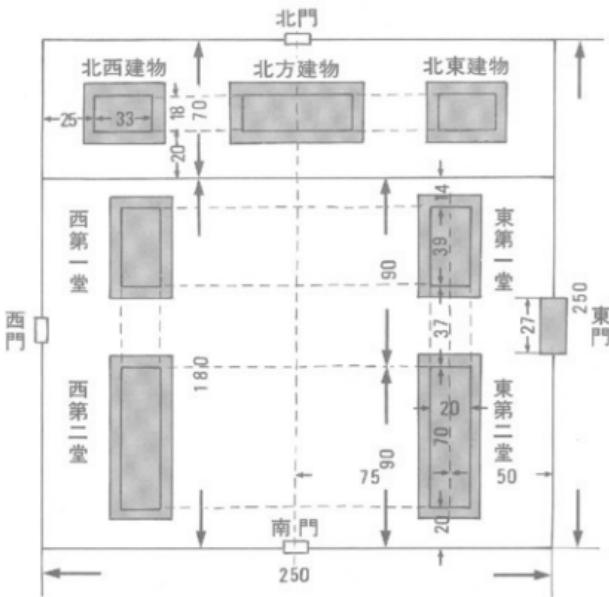


図11 兵部省遺構配置図（単位：小尺、基壇の出は各5尺を想定）

正方形として配置されている。

次に区画内の建物の配置について。南から180尺の位置に区画塀を設けて大きく二つに仕切る。このうち南側区画には、中央の広場の東西に柱筋を揃えた2棟の礎石建ち南北棟を、兵部省東西中軸線を挟んで左右対

称に配する。第二堂の北妻は、南側の区画を南北にほぼ二等分する位置にあたる。築地心から建物の棟通りまでの距離は50尺である。

第一堂は、区画塀の南14尺の位置に北妻をもち、南北39尺、東西20尺の規模を有する。基壇の出はそれぞれ5尺である。

第二堂は、南北70尺、東西20尺の規模を有する。南面築地心からの距離は20尺、基壇の出はそれぞれ5尺である。第一堂基壇南端と第二堂基壇北端の距離は27尺となる。

東門（三間門）は、第一堂基壇南端と第二堂基壇北端に南北の妻をほぼ揃えている。

北側の区画には、3棟の礎石建ちの東西棟を配する。北西建物の知見によれば、東西両端の建物は、築地心から25尺の位置に築地側の妻を、また区画塀の北20尺

の位置に南側柱筋をもち、東西33尺、南北18尺の規模を有する。中央の建物については、調査区の関係で正確な規模及び位置関係は未確定である。

以上、完数値に収まりきらない箇所もあり、ことに北側区画の3棟については、今後の式部省の調査をまって改めて結論付けるべき課題となろう。

### ② 奈良時代前半の兵部省の問題

兵部省区画内の第一次整地層の上面に何らかの遺構が存在する可能性が出てきた（SX13937）ものの、礎石建物に先行する明確な遺構は検出できなかった。奈良時代前半の兵部省の所在はいまだ不明とせざるを得ない。ただ、今回の調査区南西隅で、正確な平面プランはわからないものの、SB14120を検出し、兵部省の北側、朝集殿院の南側にも、兵部省に先行する何らかの機能を持つ一郭が存在した可能性が出てきた。これらが奈良時代前半の兵部省に直接結びつくのか否か、そして奈良時代前半の兵部省が宮内のどこに存在したかの問題をも含め、その性格についてはなお検討を要しよう。

### ③ 兵部省区画の性格の問題

換言すれば、これまでに解明された築地に囲まれた区画が兵部省の全てかという問題である。すなわち、これまでの調査で明らかになった兵部省の築地に囲まれた一郭の建物配置をみると、中央に広場を設けた左右対称のコの字形の配置をとり、兵部省の実務を執ったような空間とは考えにくく、これは儀式の空間であると考えた方がよいのではなかろうか。兵部省の実務空間はどこにあったのか。

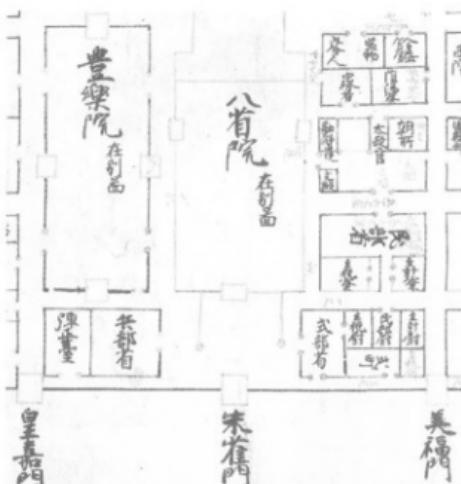


図12 兵部省・式部省付近古図（隔明文庫本宮城図）

兵部省と同様に左右対称のプランが想定される式部省の場合、平安宮の例から推すと、平城宮でも式部省本体の東側に実務空間があった可能性がある。平城宮の場合、式部省は兵部省と同規模であることがほぼ判明し、式部省本体の東にはさらに敷地が広がっている。かつてこの地域の南側の調査で、大量の削屑を含む式部省の考課木簡が出土し、これまでには、この地域から壬生門東側の一帯を式部省の敷地と推定してきた。この推定の当否は今後の発掘調査の成果を待たなければならぬが、考課木簡の削屑が生まれるのは、少なくとも儀式の空間からではなく、式部省の実務を執り行なった空間からであろうから、式部省本体の東側にさらに式部省の実務空間が広がっていたと考えれば、なぜこの地域から大量の考課木簡が出土したのかを、より整合的に説明できることになろう。

これに対し、兵部省の場合は西側には30m（100尺）を隔てて中央大溝SD3715が南流し、また今年度の第205次調査によても兵部省の西側には建物は確認されなかつた。平安宮の場合にも、兵部省の実務空間は見あたらない（兵部省の西側にはすぐ彈正台が置かれている）。一方、裏松固禅は、兵部省の北西・北東両隅は「雜舎」の区画と考証している（『大内裏図考証』）。平城宮の兵部省の場合、この場所には礎石建物（北西建物・北東建物）があるが、実務空間とは考えにくい。平安宮の「雜舎」に相当する施設は兵部省区画の北方にあったと考えられ、今回朝集殿院との間で存在を確認した二時期の建物がこれにあたるかどうか、兵部省と併存しない可能性もあり、また区画の閉塞施設も確認できていないので即断はできないが、兵部省の厨等の雜舎群、すなわち実務空間である可能性は考えられよう。

かつて兵部省の南側の二条大路北側溝SD1250から、「兵部厨」と墨書のある土器が出土している。兵部省の厨がこの近辺にあったのは確実で、第185次調査で兵部省建設以前に遡る官衙遺構の存在がわかった朝集殿院西側をも含めて、今後兵部省の実務空間、及び奈良時代の前半の兵部省の所在を検討していく必要があろう。

（渡辺晃宏）

### 3 壬生門北方の調査 第216次

#### 1 はじめに

1987年以来、継続的に発掘調査を行なってきた兵部省の調査は、第214次調査をもって一応の終了をした。今後は、式部省と推定している官衙に調査を進めていく予定である。今回の調査は、その前段階として、壬生門北方の兵部省と式部省推定地の間の地域の利用状況の解明を目的として行なった。調査期間は1990年10月4日～1991年2月26日で、面積は約2500m<sup>2</sup>である。調査地は、北を近鉄線路、西を第206次調査区、南を第122次調査区、東を第220次調査区に囲まれる。

これまでの関連する調査の結果を簡単にまとめると、以下の通りである。

1980年の第122次調査では、壬生門から北へ延びる宮内道路の東西側溝を検出した。側溝は掘り直しがあり、道路幅を広げていることを確認した。

第206次調査では、礎石建ちの八脚門となる兵部省の東門を検出し、壬生門からの宮内道路に向いた方向を正面としていたことが注目された。

また、平城宮の大垣に開く宮城門に入ったすぐ内側の地域については、1964年の第16・17次調査で朱雀門の北方を調査しており、礫敷の広場と宮内道路であることが判明している。

壬生門北方についても、朱雀門北方と同様に広場的な機能をもつ宮内道路であることが予想されたが、調査の結果、仮設的な建物や儀式に関連すると思われる遺構を検出し、朱雀門内とは異なった利用を行なっていたことが明らかとなった。さらに、南面大垣に先行する掘立柱塀を検出し、平城宮造営時の様相に新たな知見を得るとともに、古墳時代の掘立柱建物や弥生時代の遺物も出土し、平城宮造営以前の状況を知る手がかりも得られた。

なお、調査区北壁の土層断面で水田の畦とみられる幅10cmほどの高まりを検出し、その周辺の土壤試料を宮崎大学農学部、藤原宏志氏に依頼してプラント・オバール分析を行なった。その結果については、Ⅲ-1（本書140～142頁）に別項として掲載したので、詳細はそちらを参照されたい。

## 2 検出した遺構

調査区の基本的な層序は、上から整備に伴う盛土、旧耕土、床土、暗褐色の砂質土、黄褐色の砂質土、黄褐色の粘質土である。このうち、暗褐色砂質土は奈良時代の遺物包含層、黄褐色砂質土は奈良時代の整地土、黄褐色粘質土は古墳時代、弥生時代の遺物包含層である。遺構は、黄褐色砂質土、および黄褐色粘質土の上面で検出した。検出した遺構は、掘立柱建物10棟以上、掘立柱塀3条、凝灰岩切石列1条、宮内道路3条、および多数の溝、土坑、柱穴などである。これらは、大きく平城宮造営以前と平城宮の時期に分けることができる。ここではおもに平城宮の時期の遺構について述べる。

**宮内道路SF14350** 壬生門から北に延び、朝堂院南門へと続く南北道路。A・Bの二時期がある。SF14350AはSD9474・9482を両側溝とし、幅は側溝心々で約25m。SD9474・9482は、調査区北方のSD14351・14352にそれぞれ連なると考えられる。SF14350Bは、調査区南半ではSD9477・9485を両側溝とし、幅を約33mに広げる。一方、SD14351・14352は同位置で掘りなおしており、後述するSF14360・14370の北ではSF14350Aの道路幅と変わらない。

**宮内道路SF14360** 兵部省東門SB13730に通じる東西道路。A・Bの二時期がある。SF14360AはSD14363・14364を南北両側溝とし、幅は約4m。兵部省東門SB13730は棟門（SB13730A）から八脚門（SB13730B）への建てかえがあり、SD14363・14364はSB13730Bの東雨落溝を越えてSB13730Aの東雨落溝まで続くので、SB13730Aに伴う道路と考えられる。SF14360BはSD14361・14362を両側溝とし、幅は約11m。八脚門SB13730Bの時期のものである。SD14361はSD14351Bと逆L字形に連なる。

**宮内道路SF14370** 式部省西門SB14550に通じる東西道路。SF14360と同様、A・Bの二時期がある。SF14370AはSD14373・14374、SF14370BはSD14371・14372を南北両側溝とする。

**SA1765** 調査区南端で検出した掘立柱塀で、柱間寸法は約2.85m（9尺5寸）。壬生門の東西中軸線より約8m西方の位置から西へ続く。南面大垣の心から北へ

約16mの位置にあり、幅約0.8m、深さ約0.2mの溝SD13940と、第122次調査で検出したSD9470が南北の雨落溝となる。この塀は、第16次調査、第157次調査、第205・206次調査でも検出しており、朱雀門から壬生門まで続くことが確定した。なお、SD9470は從来南面大垣北の宮内道路北側溝であるという所見であったが、SD13940との関係から、SA1765の雨落ち溝とすべきである。

**SA14400** 壬生門の東西中軸線に対して、SA1765と対称の位置にある。東西溝SD9480・14401を雨落溝とする。柱間寸法は約2.7m（9尺）であるが、場所によって差があり一定しない。第220次調査区では下層の調査が終了していないので未検出であるが、さらに東方に続くと推定できる。なお、SA1765・14400ともに壬生門側の両端の柱穴の柱掘形が他に比較して深く、約2.4mを測る。

**SA14500** SA1765・14400の北約16mにある。柱間は9間で、柱間寸法は約3.6m（12尺）。塀の長さは壬生門基壇の東西幅とはほぼ等しい。

**SB14380・14381** 調査区北西部で検出した掘立柱東西棟建物。同規模の建物2棟が南北に16尺の間隔で並ぶ。柱間は桁行が8間であるが、梁間は両妻で違いがあり、東妻が3間、西妻が2間となる。東妻に入口があったとみられる。柱間寸法は桁行が10尺、梁間は西妻で8尺である。2棟の建物は西妻をSA14382でつなぐ。柱穴が小さく、仮設的な建物と考えられる。建て替えの痕跡はない。なお、SB14381の西妻に取り付き、北へ延びる塀SA14383があるので、今回の調査区内では未検出であるが、北方にもう1棟存在する可能性がある。

**SB14390・14391** 調査区北東部で検出した掘立柱東西棟建物。一部は調査区外に延びるが、SF14350の中軸線に対してSB14380・14381と対称の位置にあり、それと同規模の建物2棟が南北に並ぶものと推定できる。妻柱は検出できなかったが、SX14460・14461によって破壊されていると思われ、西妻はSB14380の東妻同様、梁間が2間であろう。

**SX14444** 一辺約50cmの正方形の凝灰岩の切石を10尺等間で東西に並べ、その間にやや小ぶりの切石を3個ほど並べる。SB14390の南側柱とほぼ位置を同じくし、SB14390より新しい。SF14350の中軸線から約16m東方から始まり、

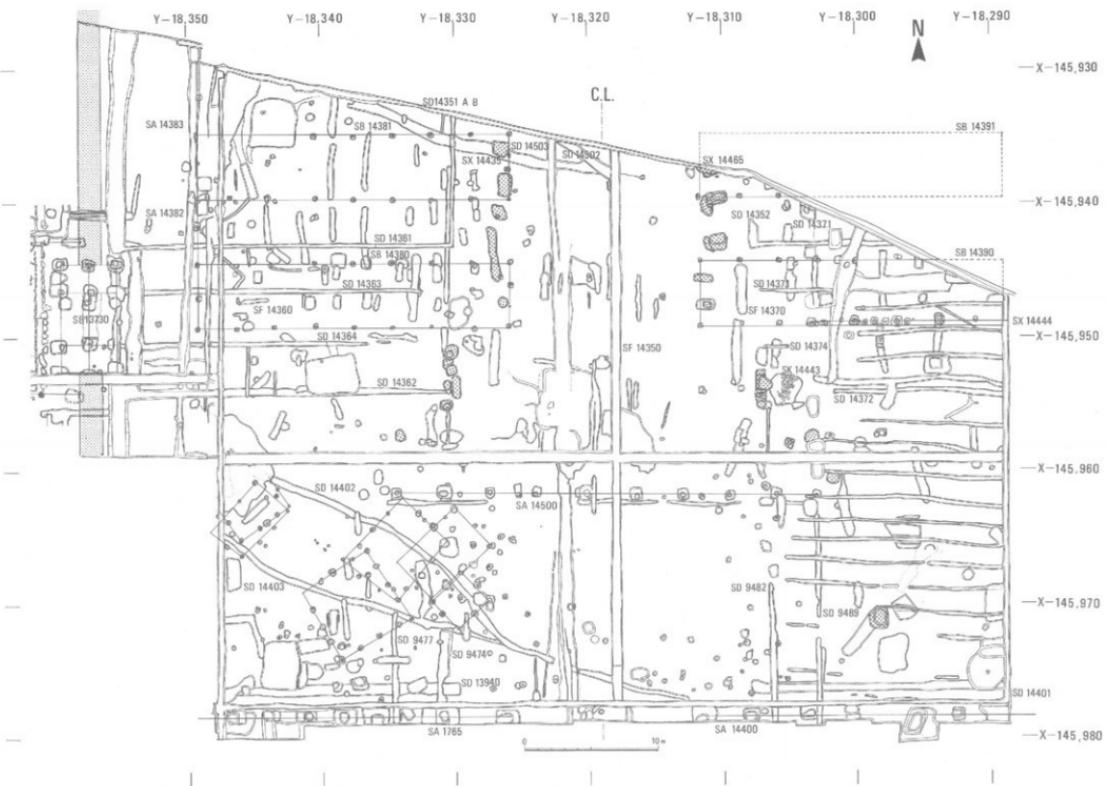


図13 第216次調査遺構図 (1 : 300)

第220次調査区の、式部省西門SB14550まで続く。式部省西門の南北中軸線とほぼ一致し、舗装的な施設と考えられるが、具体的な性格は今後の課題である。調査区の西半、兵部省側には対応するものはない。

SK 14443 SF14350とSF14370の交差点にある土坑。内部に凝灰岩の切り石が多数入っていた。平城宮廃絶時に、SX14444の敷石などを捨てたのであろう。

SX 14420～14435・14450～14465 建物や塀にはまとまらず、中軸線に対して東西対称の配置となる柱穴を多数検出した。対になる柱穴相互の間隔は、壬生門に近いものは広く、遠いものは狭い。儀式の際の旗竿用の柱穴とみられ、柱穴相互に切り合いがあることから、何度かにわたる儀式があったことが推定できる。

SD 14402・14403・14502・14503 奈良時代以前の斜行溝。いずれも、北西から南東に向かって流れる。SD14402から6世紀中頃の土師器、須恵器が出土した。

SB 14384～14389 調査区の南西部で検出した奈良時代以前の掘立柱建物。方位は、北で西に30°～45°ふれる。同一場所で建て替えがある。柱穴には黒色の埋土がつまり、古墳時代のものとみられる。

遺構の変遷 検出した遺構は、重複関係などから大きくA期～D期の4時期に分けられる。

A期 平城宮造営以前。斜行溝や、古墳時代の掘立柱建物などがある。

B期 平城宮造営時。SA1765・14400・14500と、それに伴う雨落溝がある。SA1765・14400は南面大垣に先行する、平城宮の南端を閉塞する仮設的な塀と考えられる。壬生門の北にあたる部分は通路としてあいており、SA14500が目隠し塀となる。

C期 奈良時代前半。SA1765・14400・14500を撤去する。壬生門から朝集殿院に通じる宮内道路SF14350が南北に通る。仮設的な掘立柱東西建物SB14380・14381・14390・14391は、この時期のものであろう。

D期 奈良時代後半。兵部省の東門に通じる宮内道路SF14360、式部省の西門へ通じる宮内道路SF14370をつくる。宮内道路SF14350の側溝をSD9477・9485につけ替え、道路幅を広げる。

### 3 出土遺物

調査区の全域から瓦、鬼瓦、土器、石器などの多くの遺物が出土した。

**瓦等類** 軒瓦は、藤原宮式をはじめ、奈良時代を通じた時期のものが出土している。鬼瓦は半城宮瓦編年II期を中心としたもので、IA、IIA・B、IVA式や無文のものが出土した。昨年度の第206次調査で出土したものも含めて、図15に示す。IIA<sub>2</sub>は兵部省の礎石建物の礎石据付掘形から出土したものである。

**土 器** 瓦に比べて量が少なく、奈良時代後半のものが主体である。また、弥生時代、古墳時代の土器も少量出土している。

**石 器** 弥生時代の石器、剥片がある(図14)。1・2はサヌカイト製の石鎌。3は磨製石劍。刃部の破片で、スレート製。4は石包丁で、三分の一ほどを欠失する。直線刃で、スレート製。

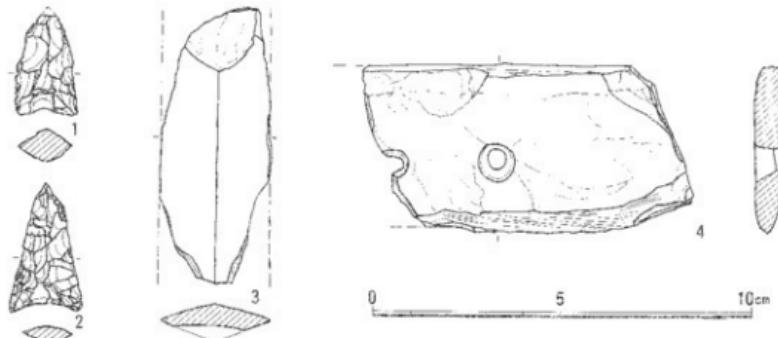


図14 第216・220次調査出土石器 (2 : 3)

表4 第216次調査出土瓦集計表

軒 瓦		鬼 瓦		土 器		石 器		造 瓦	
型式	種 占 数	型 式	種 占 数	型 式	種 占 数	型 式	種 占 数	瓦 種 占 数	瓦 種 占 数
6012	B 1	6 2 8 2	G 3	6572	C 1	6 6 8 5	E 2	鬼瓦	7
6132	A 2		I 1	6663	C 6		C 4	道具瓦計	7
	A 3		A 8		不動 3		D 1	文子瓦	
6225	C 2	6 2 8 4	C 3		B 1	6 7 2 1	F 3	刻印瓦	3
	L 1		不明 3		C 1 1		G 1	文字瓦計	3
不明	1	6 2 9 4	A :	6664	F 1	5 7 2 6	E 1	丸瓦	
	D 1	6 3 5 8	C 1		H 2	6 7 3 2	C 1	面積 kg	416.98
6275	J 1	6 3 1 3	C 1		I 3	6 8 0 1	A 2	面 数	3819
	不明 1	6 3 1 3	C 1		E 1	面式不明		平 瓦	
6279	A 2	6 3 1 3	C 1	6681	不動 1			重 kg	1352.85
6282	B 1	6 3 1 3	C 1	6682	A 1	山型以降	1	件 数	15863
軒 瓦		鬼 瓦		土 器		石 器		造 瓦	
九 九 五 計		4 7		軒 瓦		平 瓦		5 9	



I A (216次)



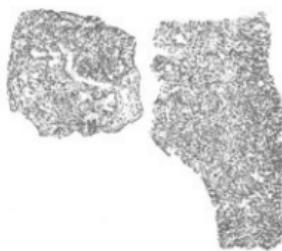
II B1 (206次)



II A 2 (206次)



IV A (216次)



無文鬼瓦 (216次)

图15 第206·216次调查出土鬼瓦 (1 : 6)

#### 4 まとめ

今回の調査の成果をまとめると、以下の通りである。

(1)壬生門北方の利用状況が明らかとなった。奈良時代を通じて、基本的に広場的な機能をもつ宮内道路であるが、東西棟建物SB14380・14381・14390・14391があり、朱雀門北の広場とは利用形態が若干異なっていたことがわかる。

これらの建物は仮設的なもので、なんらかの儀式の際に建てたと思われるが、文献には記録がなく、どの様な儀式であったかは特定できない。

(2)建物にはまとまらず、SF14350の中軸線に対して東西対称の位置にある柱穴を多数検出した。儀式の際の旗竿用の柱穴とも考えられ、広場の利用状況を推定する上で貴重な知見となる。

文献史料には、壬生門の北で行なわれた儀式を具体的に記すものはない。朝堂院南方という共通性から、平安宮朱雀門の北での儀式を平城宮壬生門の北に読みかえると、『延喜式』に国家的儀式の際には会昌門、応天門、朱雀門の外側に衛門府が東西に立ち並び、その際各種の幡竿を立てたことが記してある。今回検出した柱穴は、こうした際のものとするのも一案である。

(3)SA1765が朱雀門から壬生門まで続くことが確定した。これは、総延長が約235mに及び、平城宮の南面を区画する。また、壬生門をはさんでSA14400がさらに東方に延びることが確認できた。これによって、SA1765・14400が平城宮造営時の、南面大垣に先行する閉塞施設であったというこれまでの想定がより確証をもつこととなる。また、日隠しの塀SA14500があることも判明し、新たな知見を得ることができた。

(4)平城宮造営以前の、古墳時代、弥生時代の遺跡があることが判明した。古墳時代の遺跡は、周辺の第48次調査（東朝集殿）、第205・206次調査（兵部省）などでも確認しており、それと一連のものである。

弥生時代の遺跡は、第14次調査において平城宮の西南隅でも確認しているが、今回の調査では石包丁が出土した。プラント・オパール分析の結果からも、遺構としては未確認であるが、周辺に水田がある可能性が高い。

SA1765・14400について 今年度の調査で、平城宮南面大垣周辺地区の、朱雀門から壬生門までの範囲は一応終了した。数次にわたる調査の結果、大垣の造営に関する重要な知見が得られたので、ここでまとめておきたい。

関連する調査は、西から第16・17次（朱雀門）、130・157次、205・206次（兵部省）、122次（壬生門）、165・155・32次調査である。南面大垣については、一部に改修の跡が認められるものの、下層には北面大垣のような先行する掘立柱塀は存在しないことが明らかとなっている。一方、造営の時期については、壬生門東方の第155次調査で靈龜3年（717）～神龜5年（728）の紀年をもつ木簡を含む溝SD11640の上に大垣の築成土を積むことを確認しており、少なくともこの地点では南面大垣の造営が遅れることが判明している（『昭和59年度平城概報』）。

第157次補足調査では、SA1765より新しい南北塀SA11700（第205次調査の結果により、単廊SC11700であることが判明した）の柱穴上に南面大垣の犬走りの地業を行なっていることを確認し（『昭和62年度平城概報』）、SA1765は南面大垣に先行することが明らかとなった。また、第205次調査区東壁の土層観察の結果、SA1765の柱穴上に兵部省の第一次整地土が覆っていることを確認し（本書8頁図2）、SA1765は平城宮造営当初のものであることが推定されるのである。

一方、平城宮の西面についてみると、馬寮地区の調査で西面大垣SA1600の内側約16mに、掘立柱塀SA3680・3590を検出している。これは、馬寮の配置計画の方眼とは一致せず、層位的所見からも西面大垣に先行するものと推定している（『平城宮発掘調査報告』XII）。SA3680・3590は佐伯門の東方で途切れ、これは壬生門北方におけるSA1765・14400と同じ状況である。こうしてみると、平城宮の東面については未確認であるが、平城宮造営にあたって、最初に大垣に先行する仮設的な掘立柱塀をつくり、北面は大垣と同位置、西面、南面は約16m内側に設定したことが推定できる。ただし、朱雀門以西では、南面大垣の北方にSA1765と対応する掘立柱塀を検出してはいない。しかし、SA1765上には整地土が覆っていることを考慮すると、今後の調査によって、大垣の内側に同様の掘立柱塀を検出することが期待される。

（玉田芳英）

## 1 はじめに

平城宮南辺部の発掘は第214次調査で兵部省の調査を終え、引き続き東方へ対象をひろげている。第220次調査は工生門をはさんで兵部省と対称の位置にあたる式部省推定地の西南部を対象とし、その解明を目的とした。1991年1月8日から開始し、断ち割り調査を残し、4月4日に終了した。面積は約1500m<sup>2</sup>である。

調査地を式部省と推定する根拠は次のとおりである。

- ①平安宮についての「大内裏図」には朝堂院の南に式部省・兵部省が対称に画かれている。平城宮には二箇所に朝堂院があるが、いわゆる第一次朝堂院の南にはこれに相当する官衙跡が認められない。一方、第二次朝堂院の南には東西対称に同規模の官衙があったことが一部確認されており、平安宮の配置はこれを受け継いだ可能性が高い。
- ②兵部省と推定した官衙の周辺から「兵部」「兵部厨」「兵厨」といった墨書き器がまとまって出土し（第122次調査）、また本調査区東方の溝SD4100・11640からは式部省に關わる大量の考課木簡が出土しており（第32次補足調査・第155次調査）、遺物の上からも先の推定を裏付ける。

次に、1989年度までの兵部省の成果を簡単にまとめると次のようになる。

- ①四周を築地塀がめぐり、規模は築地心々で約75m（250尺）四方となる。
- ②築地塀は、当初は築地のみで、後に内側に礎石を置いて片庇廊とする。
- ③内部にはいずれも礎石建物が建ち、北に東西棟が3棟、南に南北棟が東西2棟ずつ計4棟が配され、中央は広場となる。
- ④時期については、建物の礎石掘付掘形と、整地上中から第Ⅲ期の軒瓦が出土したことから、奈良時代中期以降と推定できるが、なお検討を要する。

既に第165次調査において本調査区南で官衙の南辺築地を検出し、東西の規模が兵部省とほぼ同じであることが判明している。また、式部・兵部という官衙の性格の類似という点からみても、両者を比較検討しながら調査を進めた。

## 2 遺構

調査区は近鉄線の軌道の南で、西は第216次、南は第165次調査区に接し、東は引きづき第222次調査を行なっている。

基本的な層序は上から旧耕土（25cm）、床土（10cm）、灰黄粘質土（10cm）、黄褐粘質土（25cm）となる。下の二層は整地上で、主な遺構は灰黄粘質土の面で検出した。以下、各遺構の説明を行なう。なお、主な遺構はA・Bの二時期に大別できるが、時期別の変遷については後述する。

SB14550 発掘区西北で検出した門で二時期ある。A期には棟門程度の小規模な門で、B期に礎石建ちの八脚門となる。

A期の門の痕跡は確認できないが、兵部省東門を参考にして南北溝SD14554をA期の門の西側の溝と判断した。SD14554は幅約50cmの素掘りの溝である。B期にはこれを埋め立てて門の基壇を築いた。基壇上はわずかしか残っていないが、周匝を石組溝（SD14551・14549・14553）が巡り、東西の石組溝の心々間で7.2m（24尺）を測る。礎石の据え付け掘形は6個確認した。門はなお北に続くが、近鉄線に遮られて確認できない。しかし、兵部省東門との位置関係から見て、桁行3間、中央間3.9m（13尺）、両脇間2.1m（7尺）、梁間2間、柱間2.1m（7尺）の八脚門に復原できる。この場合、軒の出は東西・南北ともに5尺となる。

SA12002 門から南へのび、式部省の西を限る築地塀で、二時期ある。A期には築地のみであったが、B期に築地心から東3.6mの位置に礎石建ちの柱を立て、廊SC14558を付ける。廊の柱間は10尺で、礎石は全て抜き取られている。門より南に8個の抜取り穴を確認した。兵部省を参考にすれば南にもう1間のびる可能性もあるが、削平されている。築地積土は部分的に数cm程残っているだけであるが、東西両側溝からみて幅1.8m（6尺）と推定でき、第165次調査で検出した式部省南門SB12003の南北中心線から築地の内側までが約36m（120尺）となる。

SD9486・14555・12084 いずれも築地塀SA12002に沿って流れる南北溝。SD9486は築地西雨落溝で、溝幅約2～3m、遺構面よりの深さ約50cmである。埋土は上下二層に大別でき、二層の塙からは瓦がまとまって出土した。築地塀の

東の溝SD14555はA期の築地の雨落溝で、溝幅約50cm、深さは10cmである。築地壇の下でSD9486とSD14555を結ぶ暗渠が2箇所ある（SX14556・14557）。北側の暗渠SX14556には埠が入っており、南の暗渠SX14557は半瓦の凹面を幾重にも組み合わせて導水路としている。いずれも急傾斜で西雨落溝SD9486に流れ込む。築地壇の廊SC14558の東にある溝SD12084はSD14555を付け替えたB期のもので、溝幅約80cm、深さは15cmである。

SD14374・14372 門の西にある2条の東西溝（SD14374・14372）は、宮内道路SF14370の側溝で、兵部省東門前で確認した道路SF14360の側溝と対称の位置にある。このうちSD14374はA期の門に、SD14372はB期の八脚門に伴う道路の南側溝と判断している。溝幅はともに50cmで、深さは現状で約10cmと浅い。

SX14444 第216次調査で検出した凝灰岩切石列の続きで4個分検出し、東端は門の前の石組溝SD14551に接している。東端の石のみが120cm×60cmと大きく、他は一辺60cm前後である。第216次調査検出分と合わせて東西18mにわたって14個の石が残っている。上部に構造物は考え難く、舗道である可能性が高い。

SB14560 発掘区中央部にある南北棟礎石建物で、式部省の西第二堂にあたる。築地壇SA12002の心から15m（50尺）東に建物の心がくる。小石を含む黄褐色の基壇土が10～25cm残っている。基壇の範囲は東西8m、南北23mで、その周りは溝がめぐる。北と東は石組の溝（SD14564・14565）で、人頭大の自然石を使って底石・側石としているが、側石は大半が抜き取られている。西は素掘りの溝（SD12082）であるが、2箇所に丸瓦が凹面を上にして据えてあるので、元来は丸瓦を利用した溝であった可能性がある。SB14560の礎石は残らず、根石と礎石抜き取り穴から、桁行5間、柱間4.2m（14尺）で、梁間2間、柱間2.7m（9尺）の規模に復原できる。東西の軒の出は1.8m（6尺）である。建物中央にも礎石抜き取り穴があり、床張りであることがわかる。

SD14563 門SB14550の周囲及び西第二堂の周囲を巡る溝は連続しており、両者をつなぐのがSD14563で、石組溝はSD14564を経て西第二堂東のSD14565へ、さらに南端でSD14566へと続く。

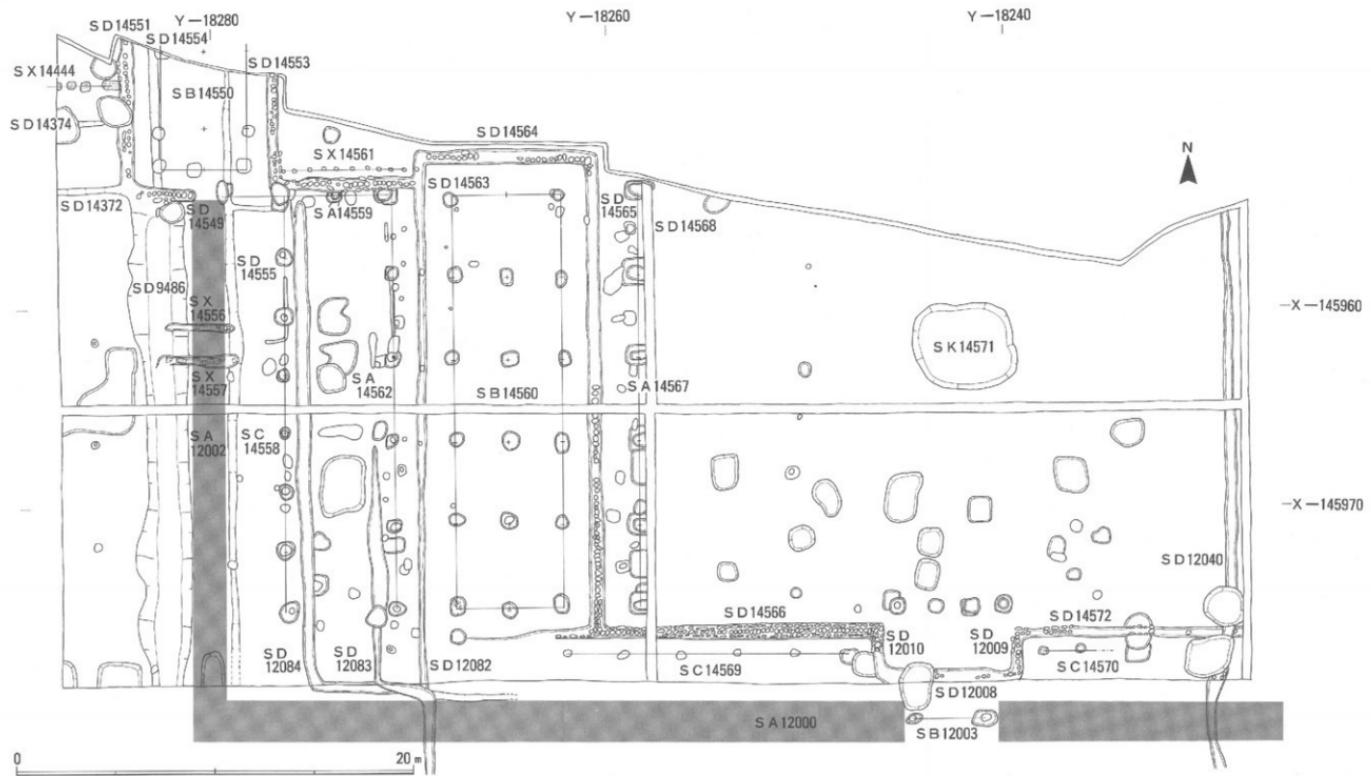


図16 第220次調査遺構図 (1 : 200)

SA 14559 築地塀SA12002と礎石建物SB14560とをつなぐ掘立柱塀である。西端はSA12002に接し、そこから3間分東へのびる。柱間は10尺等間である。SB14560の北側柱列と柱筋を揃えている。

SX14561 石組溝SD14563の北にある凝灰岩切石列で、一辺20cmほどの方形の凝灰岩が60cm間隔で10個、東西に並ぶ。用途は不明である。

SA 14562・14567 磂石建物SB14560の東と西にある南北方向の掘立柱塀である。SA14562はSB14560の西側柱から3m(10尺)西、SA14567は東側柱から3.6m(12尺)東にあり、ともにSB14560と柱位置を揃え、柱間14尺で南北5間分ある。SA14562の西には南北溝SD12083、SA14567の東には土層観察用の畦に重なるがSD14568があり、それぞれ掘立柱塀に伴うものであろう。2条の南北塀の性格は、SB14560の東西をふさぐ目隠し塀なのか、あるいは東西に付く庇となるのか、さらには下層の遺構なのか等、なお検討を要する。

SC14569 式部省南面築地の内側の廊のうち、南門より西の部分。5個の礎石が残り、柱間は3m(10尺)。さらに東に1個の礎石抜取り穴があり、計5間となる。南門をはさんで東の廊SC14570は、礎石抜取り穴を西端から2個検出したものの、それより東は削平が著しく、確認できなかった。西面築地の廊SC14558と同じくB期のものと判断した。

SD 14566 SC14569の北雨落溝で、SD14565と連続する石組溝である。側石・底石とともに残りが良く、側石間の内法は30cmを測る。西端はSC14569の西端と揃い、礎石建物SB14560の東南隅から西には延びない。東は南門SB12003の所で南折し、更に東ではSD14572となる。

SD12040 発掘区東端の溝で、南は南面築地をこえて南流する。溝幅50cm、深さ15cmで、瓦が大量に入っている。溝の位置は南門の中心をはさんで、SD14568と対称となり、式部省東第二堂の西に想定される南北塀の西の溝となるのであろう。

SK 14571 調査区東半にはSK14571をはじめ、近世以降の土坑がいくつかある。大小さまざまであるが、中にはバラスないしは瓦片が大量に含まれており、水田耕作等の際にこの周辺から集めて廃棄したものと推定できる。

以上を時期別にまとめると、次のような。

A 期 西門SB14550が棟門の時期で、築地塀SA12002も廊も伴わない。礎石建物SB14560が建つ。

B 期 西門SB14550の規模を拡大し、あわせて西面築地SA14002の内側に廊SC14558を、南面築地の内側にSC14569・14570を設ける。SB14560は存続し、門の周囲、礎石建物の周囲などを石組の排水溝が巡る。

ただし、現段階では遺構に関して未解決の問題として次の諸点がある。

①A期に先行する遺構の有無 南面大垣の内側約16mの位置を東西に走り、遷都当初のものである可能性が高い掘立柱塀（SA1765・14400）が、壬生門より東にも連続することが第216次調査で明らかとなった。この塀を東に延長すると、本調査区の南端ないしわずかに南にあたり、その有無の確認が必要となる。

②掘立柱塀SA14559の時期 SA14559の西端は築地塀SA12002に接するが、SA12002に伴う溝SD14555を切っている状況である。一方、SA14559東端の柱穴は南北塀SA14562と切り合い、ともにB期の石組溝SD14563に切られ

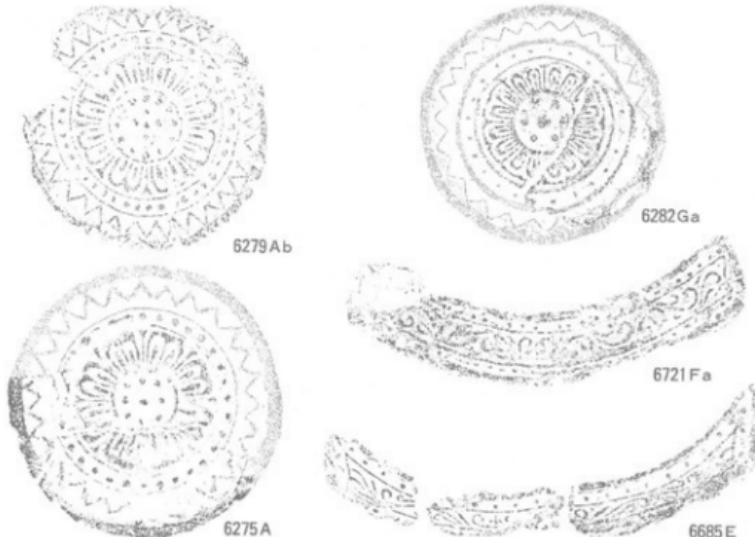


図17 第220次調査出土軒瓦（1：4）

ている。したがって、SA14559、14562の新旧関係の確認とともに、それらをどの時期に置くのか。具体的にはA、B期の間にもう一時期設定すべきなのかについても、断ち割り調査の結果を待ちたい。

### 3 遺 物

軒瓦の出土点数は表5の通りである。全体的に軒平瓦に比べて軒丸瓦の点数が際だって多い。中でも藤原宮式の軒瓦が30点と半数近くを占める。その他、量的にやや多い軒瓦の組み合わせは6282G-6721Fで、これは兵部省で見られた組み合わせと同じである。

なお、西面築地の西南落溝SD9486から大量の瓦が出た。完形品の割合が低く、自然落下ではなく投棄されたものと判断されるが、軒瓦をほとんど含まず、丸・平瓦のみで構成されている。これは築地塀の屋根に軒瓦を用いなかったことを示すのかも知れない。

上器の出土は瓦に比べて少ないが、硯が比較的多い。また墨書き土器の中に「式」と記すものが1点ある。

表5 第220次調査出土瓦集計表

軒 丸 瓦			軒 平 瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6132	A	1	6275	H	1
6225	A	3	6279	A	5
不明		1	6282	G	7
6233	B	6		H	1
6273	A	3	6284	A	5
	B	1	6313	F	3
6274	A	2		I	2
6275	A	10	型式不明の藤原宮式	I	6685
	B	2			E
	D	4			5
				6691	A
				6721	F
				6739	C
					1
軒 丸 瓦 合計 64点			軒 平 瓦 合計 18点		
道具瓦など			平 瓦		
刺印瓦	3点	重量 1,212.83 kg	重量 4,690.01 kg		
隅切平瓦	1点	点数 10,854点	点数 51,570点		

## 4 成果と課題

### (1) 兵部省との比較

当初の予想をある程度裏付けるように、兵部省と式部省との共通点と若干の相違点が見いだせた。以下、それらについてまとめてみる。

**両者の位置関係と全体の規模** 壬生門の中軸線から38.6m西に兵部省東面築地の心が位置し、同じく38.6m東に式部省西面築地がくる。つまり、両者は壬生門中軸線をはさんで東西130尺づつ、260尺を隔てている。兵部省の規模は東西築地心々で74.5m、南北築地心々が73.9mを測り、250尺四方で計画されたことが判明している。一方、式部省の東西幅は、正確な数値は東面築地の調査をまたねばならないが、約74mとすることができ、やはり250尺と推定できる。

**建物配置と規模** 兵部省東門と式部省西門は壬生門をはさんで対称の位置にあり、規模も一致する。兵部省東第二堂は、建物の南北中軸線が東面築地から15.2m西に、北側柱が南面築地から26.8m北に位置する。式部省西第二堂は、西面築地から14.8m東に建物の南北中軸が、南面築地から26.6m北に北側柱がくる。若干の誤差はあるものの、それぞれ50尺と90尺という完数値が得られ、同一の配置計画をしていたと言ってよい。ただし、建物の規模は兵部省が桁行5間（柱間寸法14尺）、梁間2間（同10尺）なのに對し、式部省のそれは梁間の柱間寸法が9尺と短く、若干異なる。また式部省は床束がある構造をとるが、兵部省にはない。

**遠構変遷** 式部省は平面検出の段階の知見ではあるが、西門がおそらく棟門から八脚門へ、築地屏から内側に柱を立てた片庇廊へ、といった建て替えの仕方にも兵部省と共通性が見いだされ、両省は一連の改作であった可能性もある。

以上のように、官衙全体の規模、建物の配置と規模、建て替え等々、兵部省と式部省の共通点が顕著に見られる。これは両省が官衙の性格として類似し、宮の中でも一対に配置されていることをより具体的に裏付けるとともに、二つの省のみならず、他の八省の中心部分も基本的には同様であったことを推測させるものといえる。一方、部分的には相違点もある。とくに第二堂の構造が異なっており、これは両省の建物の使われ方の違いを反映するのかも知れない。

ちなみに平安時代の式部省内の政務を示す史料を見ると、床張りであったことを示す記述がある。『弘仁式』『延喜式』の式部省の考問引唱の項に「省掌、曹司庁並びに省掌の座の東に床疊を鋪設す」とあるのがそれで、勤務評定の文書についての質疑応答が行なわれる考問の場が省内の建物である曹司庁や省掌の座であり、そこに床疊を設けるとは床張りであったことを示している。もっとも、これを奈良時代にまで及ぼしてよいのかどうか、兵部省でも行なわれたであろう考問引唱の際の鋪設が異なっていたのかどうかなど不明の点も多く、参考にとどめる。

### (2) 式部省全体の年代

昨年度までの調査で、兵部省の遺構の年代が奈良時代当初まで遡らない可能性が指摘されたが、遺構変遷の類似から、式部省も同様に考えるべきなのであろうか。第二次朝堂院の前面に遷都当初遺構が存在しなかったとすると、当初の式部省がどこにあったのかが問題となる。一方、本発掘区の東南に接する第155次調査では神亀5年（728）の年紀の式部省関係木簡が出土し、付近に奈良時代初期から式部省の一部があったことを示す有力な資料もある。したがって、兵部省も含めた二省の年代は、遺物、遺構の両点について再検討を要する課題といえよう。

### (3) 周辺地域との関係

今回の調査は式部省全体からみれば西南の一部を発掘したに過ぎない。ここでの知見と兵部省での知見とをあわせて考えることによって、式部省の全体の構成が予想しうるようになったのは大きな成果であるが、なお細部での違いもあり、近鉄線の北側も含めて発掘が完了した段階で、全体像があきらかとなろう。

次に平安宮の『大内裏図』によれば、式部省の東には「式部厨」（あるいは「式町」）が画かれている（26頁図12参照）。今回の調査で検出した遺構は前者にあたり、発掘区の東には式部省の実務を行なう「式部厨」にあたる一画があると予想される。前述の大量の式部省関係木簡も今回の発掘区からではなく、東の地域から捨てられたものと考えられる。現在調査中の第222次調査の成果を待ち、今回の遺構と合わせて検討すれば、中心施設とそれに伴う実務的な施設とによって構成されていた、古代国家の一つの省の全容が明らかになろう。（寺崎保広）

## 5 第一次大極殿地区の調査 第217次

### 1 はじめに

調査は、第一次大極殿地区の整備のために、平城宮跡資料館北から東へ延び、第一次大極殿地区を東西に横断する旧構内道路を撤去するのに伴い、同地区の東西両面の築地回廊および大極殿前面の広場北端部の解明を目指したものである。旧構内道路部分を含む、幅8~10m、東西171mの調査区を設定し、東西両端部には築地回廊の解明のために西端で南北41m、東西28m、東端で南北8m、東西9mの拡張区を設けた。面積は約2985m<sup>2</sup>である。なお本調査は、1990年7月から9月に西端部を第217次西調査（面積1440m<sup>2</sup>）として、また10月から12月に東に続く部分を第217次東調査（面積1545m<sup>2</sup>）として、それぞれ調査を行なった。

### 2 調査前の地形と基本層序

調査区は平城宮跡東北から南へ延びる小丘陵の南端に位置し、西は御前池・佐紀池を結ぶ谷筋で、東は本地区と内裏・第二次大極殿地区との間を走る浅い谷地形で画される。発掘区内の旧地形は北から南へ緩く傾斜するが、旧構内道路をはさんで、その北の部分は南より2m程の比高差で高くなっている。また傾斜も大きい。また西端では谷筋により、1~3m程の段差があり、段上には南北に土壠状の高まりが走り、西面築地の痕跡とみられてきた。道路北の段は大極殿地区的壇の名残であり、遺構の残りもよい。それに対し、南及び西端は田水出が一段低く、遺構の削平ははなはだしく、残りは悪い。なお旧構内道路の北側に沿って用水路が西流し、調査区西端で谷筋縁辺部に沿って北流している。

層序は、第一次大極殿地区内でも旧構内道路の北と南で、それに西端の第一次大極殿地区外で大きく異なっている。西調査区では、いずれの箇所でも遺構面は地山の上に積まれた1m以上に及ぶ厚い整地層の上にある。旧構内道路北では、耕土の下の厚さ約50~60cmの床土の下に、奈良時代の遺構面がある。現地表面からの深さは約60~70cm。ただし西端の土壠状の高まりはすべて後世の盛土であり、水田開発時に東の遺構面のある整地層を削平し、水田脇に積んだものとみられる。

西調査区の道路の南の区域のうち、東半部では耕土・床土の下に、瓦器を含む遺物包含層が5~10cm堆積し、この下に奈良時代の遺構面がある。現地表面からの深さは約30~60cmである。西半部ではこの瓦器を含む包含層がなく、床土の下はすぐ遺構面となる。

調査区西端の第一次大極殿西面回廊外では、耕土・床土の下に10cm程の整地土とみられる茶灰褐色土があり、その下に遺構面がある。なお道路以北には宮跡整備とともに新しい盛土が耕土の上にあるため、現地表面から遺構面までの深さは、北では約80cm、南では約60cmである。

### 3 これまでの知見

第一次大極殿地区は、既に第27・41・69・72・75・77・87・117次調査により東半分の様相が明らかになっており、その成果は『平城宮発掘調査報告』XIにまとめられている。さらに西面築地回廊部分についても、今回より100mほど南で1988年度に第192次調査を実施している。

これらの調査によって、本地区東半部では大きくは3時期の変遷が確認されており、その概要は次のとおりである。

#### ◎第Ⅰ期〔平城遷都から天平勝宝5年（753）墳まで〕

本地区は南北約318m、東西約177mを占め、その北三分の一が一段高い壇となり、その南に礫敷の広場が広がる。壇の前面は高さ2m以上の堆積の擁壁となり、東端に広場に降りていく斜道が設けられている。Ⅰ期はさらに4期の小時期に分けられる。

#### ○第Ⅰ-1期〔和銅創建時〕

周開を築地回廊で囲む。回廊の基壇幅は10.8m、側柱の柱間寸法は桁行4.58m（15.5尺）、梁間3.54m（12尺）である。壇上には巨大な正殿と後殿とが建つ。前者は桁行9間（45.1m）・梁間4間（20.7m）の四面庇付き建物で、恭仁京遷都時に恭仁宮に移された大極殿にあたる。

#### ○第Ⅰ-2期〔神亀～天平12年（740）頃〕

南面築地回廊の南門の脇に樓を増築する。

### ○第Ⅰ－3期〔恭仁京時代〕

大極殿がなくなり、壇上には後殿だけが残る。東面および西面築地回廊を撤去し、南北塀（柱間寸法4.58m=15.5尺）に変える。

### ○第Ⅰ－4期〔天平17年（745）平城遷都後～天平勝宝5年（753）頃〕

第Ⅰ－1期の基壇を踏襲して、東面および西面築地回廊を再建する。柱間寸法は、桁行3.95～4.0m（13.2尺）、梁間3.6m（12尺）である。

### ○第Ⅱ期〔天平勝宝5年頃から延暦3年（784）長岡遷都まで〕

本地区は、大幅な改作を行なう。南面・北面築地回廊を内側に寄せ、南北の長さは186mになる。塙積擁壁は取り払い、壇は南に18.3m拡張し、南面を塙積擁壁から石積擁壁に変更する。壇上には桁行9間の東西棟建物3棟を南北に並べる正殿をはじめ、多数の建物が建ち並ぶ。この地区は当時「西宮」と呼ばれたとみられる。

### ○第Ⅲ期〔大同4年（809）以降〕

平城上皇が再興した時期にあたる。基本的に第Ⅱ期の占地を引き継ぐが、築地回廊は回廊部分を撤去して築地とする。壇上には正殿・後殿・脇殿等が建ち、建物の間を塀や溝で区切る。平城上皇期（大同4年～天長元年・824）とそれ以降の2期に区分できる。

#### 4 検出した主な遺構

上述したこれまでの知見によれば、今回の調査区は東西両面の築地回廊と東西両中央門、第Ⅰ期の広場の一部、第Ⅱ期の石積擁壁部、壇上から下の広場に降りていく東西の斜道付近にあたる。検出した主な遺構は、第一次大極殿地区の東西両面築地回廊、門2棟、塀4条、掘立柱建物5棟、溝8条、土坑12基、それに鍛冶工房遺構などである。以下、これらを上記の3時期に分けて説明する。

### ○第Ⅰ期

#### 西面築地回廊SC13400

第192次調査で確認した西面築地回廊SC13400の北延長部に当たる。当初の基壇の痕跡は遺存するが、上面は削平され側柱の礎石据え付け痕跡は失われてい

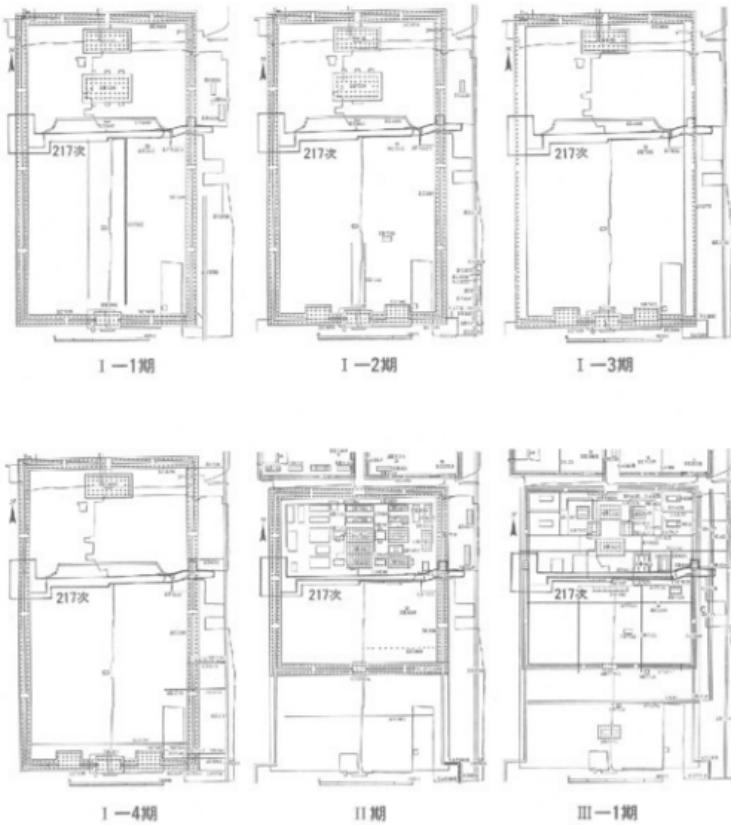


図18 第一次大極殿地区造構変遷図

る。幅約13mの掘込み地業が、最大で深さ65cm残る。掘込み地業は、礫混じり砂質土と粘質土を交互に7層前後積んだ、厚さ約1m前後の整地層の上面から掘り込む。そして3層前後の砂質土ないし粘質土で埋めた後、その上に築地回廊基壇を形成する。その後、郭内については再び約30cmの厚さの整地土を敷く。そのため上層の整地土上面では掘込み地業の痕跡は見えない。

### 東面築地回廊SC5500

当初の側柱の礎石据え付け痕跡は削平により見つかっていない。東面築地回廊部は西面とは異なり、地山画が高く、しかも礎を含んで硬いために築地構築の際に掘込み地業は行なわず、地山を削り出している。

### 西面塙SA13404

第192次調査で確認した第Ⅰ～3期の掘立柱南北塙SA13404の北延長部にある遺構で、今回は8間分検出した。東半部の知見で第Ⅰ～1期の築地回廊の外側の側柱列に重なる位置に作られたことが知られる。今回の調査においても、第Ⅰ期当初の築地回廊の側柱位置は不明のままだが、後述するように、第Ⅰ期を踏襲した第Ⅱ期の築地回廊の西側柱筋は、SA13404の柱筋と一致することが判明したので、これまでの知見を再確認できた。柱間寸法は4.6m。礎盤として塙や安山岩を用いる。

### 東面塙SA3777

第Ⅰ～3期の東面掘立柱南北塙について、旧調査区で柱穴を再検出した。旧道路下には柱穴が2個予想されるが、上部の遺構の残りがよいため無理に検出することはさけた。

### 塙積擁壁の抜取り痕跡SX14278・西側斜道SF14255A・広場SH6603A

西面塙SA13404の東約26.5mの所に、最も残りの良いところで上下三段重なり、南北に連なる塙列、およびその北に続く幅約30cm、深さ5cm程の南北溝状遺構SX14278を延長16.6m分検出した。塙の抜取り痕跡である。これは、塙積擁壁SX6600の西への延長部に当たり、西側斜道SF14255Aの東壁を飾っていた塙の跡である。築地回廊の掘込み地業の東端から東へ16.5mの位置にあり、その間がほぼ斜道SF14255Aに当たるが、斜道自体は削平により残っていない。塙の積み方は、長方形塙の長さ約30cmの長側面を外に向かって、平積みにしてある。長辺を各段半分ずつずらし、目地は工字形を呈する。また上方に行くにしたがい西に傾斜しており、斜道の東壁が垂直でなく、傾斜を持っていたことがうかがえる。これより東及び南が広場SH6603Aになり、細かい礎を敷いていた状態がみられる。

### 東側斜道SF9232A・塙積擁壁SX6600

東側斜道SF9232Aの西壁を飾っていた塙の一部とその抜取り痕跡の溝状遺構は、第117次調査の際に、調査区を旧構内道路下に拡張することによって調査している。今回は旧調査区で再検出したほか、ごくわずか拡張した部分で、少量の土器類とともに遊離した状態の塙を検出した。

### 南北溝SD14270

西面築地回廊の西は旧水田面が一段低くなっていたが、その南端で幅2.5～3mの溝SD14270を検出した。これは第192次調査で検出したSD13402の北延長部と見られるが、深さ30cm程度しか残っていない、かつ調査区南端から長さ約9m分しか確認できない。この溝は、第一次大極殿地区の東外郭部の南北溝SD3765と対称の位置にあたる。出土した瓦は平城宮軒瓦編年のⅠ期からⅢ期前半にわたり、この溝は第Ⅱ期の造営時に埋められた可能性がある。なおこの溝の北端から17m程北から発掘区北端にかけて、南北約14mにわたり西への落込みSX14333がある。西端は発掘区外に出るため確認できないが、最も広いところで幅約1m分検出した。これの性格は今後の課題である。

### 土坑SK14301・14316・14322

第Ⅰ～Ⅲ期の築地回廊解体時に、瓦や築地回廊の化粧に用いた凝灰岩の切り石等の廃材を捨てたとみられる土坑が、西面築地回廊の両側に計3基ある。埋土にはいずれも大量の瓦を含む。ただしSK14301・14316については、出土した軒瓦の時期が平城宮軒瓦編年のⅠ期前半に属するため、この時期の土坑と推定したが、あるいは後述する第Ⅲ期の土坑SK14260と同時期である可能性も残る。

### ◎第Ⅱ期

#### 西面築地回廊SC14280・東雨落溝SD14290

2列の側柱列が、北の一段高い地区に東は5個、4間分、西は削平により1個だけ残存する。西側柱の位置は第Ⅰ～Ⅲ期の西面塙SA13404の柱筋と一致する。これが当初の築地回廊SC13400の基壇を再利用し、第Ⅰ～Ⅲ期に再建された築地回廊SC14280の側柱である。柱間寸法は、桁行が3.9m、梁間が築地本体を

はさんで2間で7.2mとなる。東面築地回廊SC8360では、桁行の柱間寸法は3.95～4.0mの等間であったが、これよりやや短い。東側柱列の東、心心距離2.6mの所に幅50cmの礫敷きの帯状遺構があり、途中で途切れながら約10m続く。これは東雨落溝SD14290の底がかろうじて残ったものとみられる。

また調査区北端で、東西側柱列にはさまれた中央部に、幅約1.5m、高さ約20cmの高まりが南北に5m程続くが、断面土層観察の結果、5～10cmの厚さの粘質土層を版築状に積んでいることを確認したので、築地本体の基底部が遺存したものとみられる。その中心から東雨落溝SD14290の西端までの距離を西に折り返すと、築地回廊の基壇幅は11.6m程に復原できる。西側柱列の西方、心心距離で1.8mの所に南北に小穴が約2mの間隔で並ぶ。これらは西側柱の正面及び中間の位置にあたる。一方東側柱の東方3mおよび2mの所にも3.9mないし4m間隔で小穴が南北に並ぶ。これらは、回廊の建築、および解体時の足場穴列SS14315・14289・14294とみられる。

#### 東面築地回廊SC8360

今回新たに、側柱の礎石据え付け痕跡を2カ所で検出したほか、旧調査区で4カ所を再検出した。

#### 西側斜道SF14255B・東側斜道SF9232B・広場SH6603B

埴積擁壁を持つ斜道では塙が抜き取られるが、斜道自体は踏襲され、土坡のような状況であったとみられる（SF14255B・SF9232B）。広場が南に向かって傾斜しているため、最も低くなる斜道の南端部では、西側、東側とともに擁壁の塙が抜きとられず残存する。なお、西側では3段残る塙のうち最上段のものは風化が著しい。これは、斜道の埴積擁壁を壊したあとも塙の一部が地上に露出していたためであろう。

この時期の広場SH6603Bについては、かつての東半部の調査では第Ⅰ期の礫敷きの上に黄褐色粘質土を主とする厚さ10cm前後の整地土を置き、さらにその上に礫を敷きつめた痕跡が認められたが、今回の調査区では削平が著しいこともあり、確認できなかった。

### 石積擁壁SX9230

この時期には広場正面の埠積擁壁SX6600が壊され、壇を前面に広げ石積擁壁SX9230になる。第117次調査では東端部の8m分が検出済みであったが、今回新たに基底部の石およびその抜き取り穴29m分を検出した。これで全長132mの約30%にあたる分を検出できることになる。調査区の西は後世の削平が著しいため、残りの部分は残存していなかった。残存部分を見る限り擁壁は直線状である。

### 石敷SX14340

石積擁壁の東西中央部で、長径30cm程度の安山岩とチャートを、上面が平らになるように据えた石敷SX14340を検出した。検出した石は7個で、範囲は南北3m、東西1mである。東側は水路によって削平されており、第一次大極殿地区の中軸線で折り返すと東西幅は3.6m程度に復原できる。石敷の北端から石積擁壁SX9230のラインまでは4m離れている。検出面がやや浅いなどの疑問点もあるが、壇のちょうど中央にあたるので、階段などに伴う造構の可能性がある。

### ◎第Ⅲ期

#### 西面築地SA14330・門SB14300・土坑SK14260

西面築地回廊SC14280は、築地SA14330になる。新しく築地を書き直した痕跡はないので築地回廊の回廊部のみを撤去し、築地部を再利用したのであろう。そして西面中央門SB14300を作る。桁行3間、梁間2間。桁行柱間寸法は中央が3.9m(13尺)、両端間が2.4m(8尺)、梁間柱間寸法は2.7m(9尺)等間である。

また、築地西側では発掘区南端に南北9.5m以上、幅約4mの土坑SK14260がある。埋土中には多量の瓦を含み、その中には平城宮軒瓦編年Ⅰ期前半からⅣ期前半までの軒瓦があるので、第Ⅱ期末の回廊部の撤去時の廃材を、第Ⅲ期の造営工事に際して土坑を掘り、捨てたものであろう。

#### 東面築地SA3800・門SB8310

東面築地回廊SC8360も、築地SA3800だけになり、西門と対称の位置に東門SB8310を作る。この門は南妻柱列を除き、第87次南調査で検出済みである。桁行3間、梁間2間、桁行の柱間は中央が3.9m(13尺)、両端が2.4m(8尺)、

梁間は2.7m（9尺）等間である。門の南側で築地寄柱の礎石と考えられる凝灰岩切石を2つ検出した。礎石の間隔は石の外で1.6mであり、これが築地基底部の幅とみられる。

築地の西雨落溝SD8226は、底を浅くしながら門SB8310の南まで続いている。旧道路下では、遺構の残りがよく、凝灰岩切石・安山岩で両側を護岸し、さらにそれらの石の上に二重ないし三重に瓦を重ねていた。

東西両築地間距離は、東西両門の心で177.2mとなる。

#### 南北塙SA8238・南北溝SD8237・8239

南北塙SA8238は東面築地SA3800の心から東17.8m（60尺）に位置する。今回新たに柱穴2個を検出した。また、この塙の東西雨落溝と考えられているSD8237・8239も検出している。

#### 通路SF14342

石積擁壁から南に延びる溝を2条検出した。これらは、本地区の中央軸に対して対称の位置にある。東側の溝（SD7133、第72次南調査で検出済み）は残りが悪い。西側の溝SD14341は、底に敷き並べていた凝灰岩の切石を2m分検出した。これらの溝の間は通路SF14342と考えられ、その幅は48.4mである。

#### 北庇建物SB14200・東西溝SD14241・土坑SK14240

西側斜道SF14255Aの擁壁の、塙の抜取り痕跡SX14278を切って、桁行5間（柱間寸法2.4m=8尺等間）、梁間3間（柱間寸法2.4m=8尺等間）の規模で、北に庇をもつ東西棟建物SB14200が建つ。この建物は、斜道SF14255Bの位置に重なることから、SB14200を建てた段階では斜道の登り口は北に寄ったと考えられる。なお、本地区の東半部の調査で、対称の位置に同規模の北庇建物SB9220を検出している。

SB14200の東北の角から、東へ続く幅1.3mの東西溝SD14241がある。延長2.2m分を検出しただけで、東端は調査区の外へ延びるため、全長は不明である。南岸は人頭大の安山岩を、北岸はそれより小振りの凝灰岩を並べて護岸する。この溝は土坑SK14240の埋土上に作られている。北岸の凝灰岩列は残りは悪い

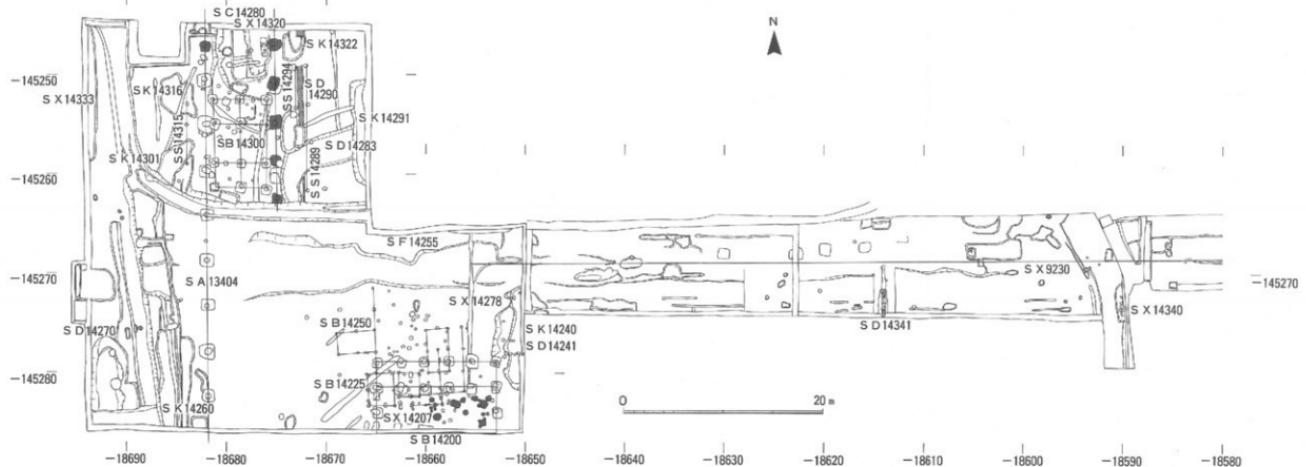
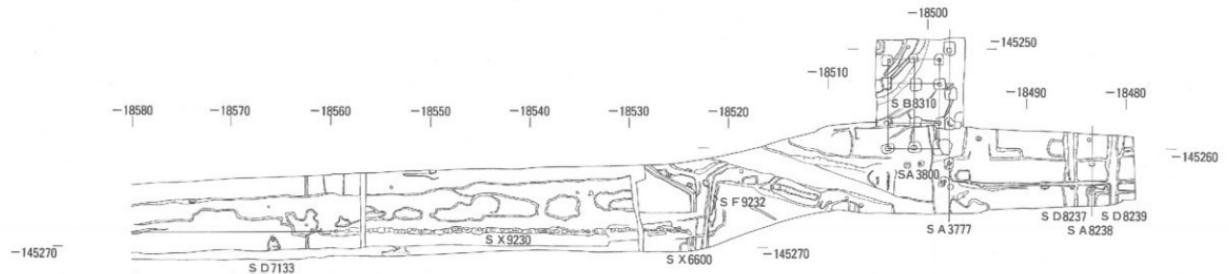


図19 第217次調査遺構図 (1 : 400)

が、南岸の石列より上層の埋土に据えられており、なんらかの改修を受けた跡とみられるが詳細は不詳。なお本地区の東半部の調査でも、SB9220の西北角からは東西溝SD9236が西に延び、SD14241に対応している。

土坑SK14240は、遺構面からの深さが約40～50cmで、南北10.5m、東西3.5mを検出した。東南部は調査区外になるため、全体規模は不詳。SK14240は広場の西北端、石積擁壁のすぐ南の位置に当たり、第Ⅱ期に存在したとは考えがたい。埋土中には平城宮軒瓦編年のIV期前半までの軒瓦を含むことから判断すれば、第Ⅱ期と第Ⅲ期の間、すなわち長岡遷都に伴うか、第Ⅲ期の造営に際して掘られたのであろう。

(館野和己・森本 脣)

#### ◎平安時代以後の時期

##### 銅工房遺構

北庭建物SB14200と重複する位置において、土の焼けた小穴等を20基以上検出した。埋土に坩堝片や銅滓を含むものがあり、銅工房関連の遺構と考えられる。銅工房の遺構には炉2基、弱く焼けた小穴2基、埋土中に木炭を含む小穴18基、そのほかの小穴10～20基、塀2条などがある。

これらの遺構は層位的には同一層上にあり、鋳造作業面の重なりや切り合いがなく、同時期のものであると見てよい。次に、これらの遺構の配置状況を見ると、一定の規則性があることが分かる。つまり、約2mの距離をおいて2基のかSX14207・14203があり、各炉から約0.3、0.6m離れて弱く焼けた小穴（以下、焼け穴と呼ぶ）SX14209・14204が位置し、かSX14207の西側、炉SX14203の南側と東側にそれぞれ一定の空隙地があり、その外側に木炭を埋土中に含む小穴（以下、炭穴と呼ぶ）、その他の小穴（以下、小穴と呼ぶ）がある。しかも、炉と炉、炉と焼け穴、炉と炭穴・小穴などが重複しない。以上のように、遺構の層位的な検討や平面配置などから見て、これらの遺構は一体となって一つの銅工房を構成し、同時に操業していたと見てよい。

炉は共に、周囲が橙褐色～灰色に強く焼け、やや離れた所に焼け穴が位置する。既に述べた層位や平面配置から見て、炉と隣接する焼け穴が一対となっていると

考えてよい。炉SX14203は地面を浅く円形に掘り窪め、底部を平坦にしたもので、直径約50cm、深さは約10cmあり、内壁北東面に埠を貼りつける。対になる焼け穴SX14204は一辺約50cmの方形を呈する。炉SX14207は地面を楕円形に掘り窪め、底部を平坦にしたものである。北東壁面に埠を貼りつけるほかに、西壁面にも礫、平瓦などを貼りつけ、さらには底部に4個の礫を据えるなど、構造がSX14203とは異なっている。そして、底部中央から4個の礫の間にかけて木炭粉の薄い層が堆積していた。また、この炉と対になる焼け穴SX14209は径約30cmの円形をなす。このような2組の炉と焼け穴に認められる差異は、既に述べた理由から、時期差ではなく機能差を示していると考える。それぞれの機能を示す直接的な手がかりは得られなかったが、炉SX14207底部の4個の礫は、その上に坩堝を置くためのものかも知れない。もしそうだとすれば、炉SX14207は鋳造用の銅などの合金を溶解する炉、そして炉SX14203は原料の銅地金などを溶解する炉とする想定も可能になる。しかし、これは今後の類例や資料の増加をまってあらためて検討すべきであろう。

この2基の炉の周囲にある空閑地については、直接的な証拠はないが、舗を設置した場所や作業時の工人の「座」と想定することで、空閑地として残っている

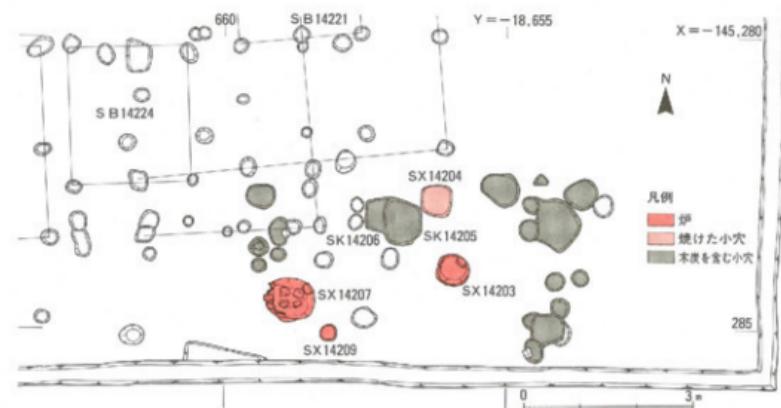


図20 鋳銅工房遺構図 (1 : 100)

ことが説明できると思う。このほか、対になる焼け穴、周囲の炭穴や小穴の性格は不明であり、また、燃料となる木炭を置く場所などは確定できなかった。

遺物は、土坑SK14206から鉛滓、銅滓が出土し、炉SX14207から坩堝、スサ混じり粘土製品などが出土した。坩堝は胎土に砂粒を含む粘土製のもの。全周の約四分の一が残り、注口の有無は不明。口唇部から内面底部にかけて薄く鉛滓、木炭などが付着し、緑青をふいている。スサ混じりの粘土製品は断片であり、元の形が復原できず性格が明らかではない。あるいは、炉の上部構造の一部とするのも一案であろう。

(小池伸彦)

なお、これらの炉跡からは、ほかに平安時代初期に属する土師器の杯・皿片が出土している。しかし、遺構は広場上面の整地土上に堆積した、瓦器を含む暗茶褐砂質土層の上面で検出したため、その造営時期を平安時代末～鎌倉時代初期に比定することが可能である。また発掘区の南壁でも、木炭を含む小穴を4基検出しており、工房遺構はさらに南まで広がっていたとみられる。

また、炉跡の北側には、4棟の掘立柱建物、それらと炉跡の間を画し、L字形に連なる塀2条、および掘立柱建物に取り付く塀2条を検出した。これらの建物、塀には少なくとも2時期の変遷がある。いずれも小規模で、柱間寸法にも規格性が見られず、方位も正方位から振れているので鍛冶に関連した仮設的な建物であろう。

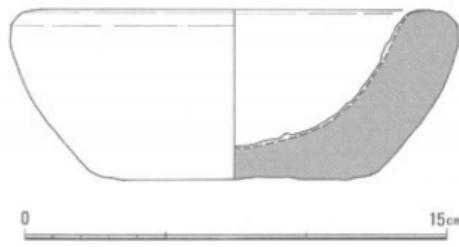


図21 SX14207出土坩堝 (1 : 2)

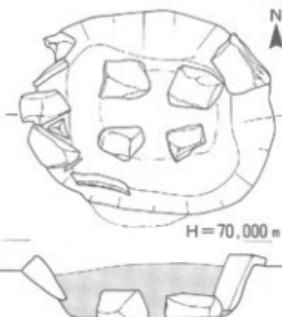


図22 炉SX14207(上)・14203(下)  
平面・断面図 (1 : 20)

### 墓状遺構SX14320

西調査区北端の西面築地跡の東側に、長さ180cm、幅50cmの長方形の掘形を持つ遺構SX14320がある。中には4個の凝灰岩の切り石を東西方向に置き、垂直方向に刺さった状態の鉄釘を4ヵ所で検出した。おそらく近世の墓で、凝灰岩の上には木棺が置かれていたとみられる。

### 彎曲溝SD14283

西調査区の旧構内道路北の段上で、西面築地回廊東縁に沿い、北に行くにつれて東へ彎曲していく幅2~3.8m、深さ10~30cm程の溝状遺構SD14283がある。その性格は不明であるが、中世以降のものとみられる。

### 土坑SK14291

西調査区の旧構内道路北側東端で、南北10.5m、東西1.5m以上、深さ1.5mの近代のものとみられる大土坑SK14291がある。その性格は不明であるが、中には厚さ60cm程の礫を含む層があり、あるいは水はけをよくするためのものであろうか。

## 5 主な遺物

出土した主な遺物には瓦埠類、土器、凝灰岩の切り石などがある。軒瓦の概要を表6に示すが、平安時代の新型式軒丸瓦7255Aが見つかったことが注目される。

土器は土師器、須恵器、瓦器、埴輪などがあるが、きわめて少ない。

表6 第217次調査出土瓦集計表

軒 丸 瓦				軒 平 瓦				通 具 瓦				
型 式	種	点 数	型 式	種	点 数	型 式	種	点 数				
6 1 3 0	B	3	6 2 8 2	D	2	6 6 6 3	B	1	廻 斗 瓦	3		
6 1 3 1	A	1		不 明	1		C	35	面 戸 瓦	4		
	A	3	6 2 8 4	A	8	6 6 6 4	不 明	1	通 具 瓦計	7		
	B	5		不 明	5				文 字 瓦			
6 1 3 3	C	3	6 2 9 6	不 明	1	6 6 6 6	A	1	神 頭 点 数			
	不 明	2	6 3 1 1	B	1	6 6 8 2	A	1	刻 印 瓦	1		
	A	2	6 3 2 0	A	1	6 6 8 5	A	2	丸 瓦			
6 2 2 5	C	2	7 2 5 5	A	4	6 6 9 1	A	3	重 量kg	442.48		
6 2 8 2	B	13	型式不明		11		C	4	点 数	3,936		
	軒 丸 瓦 計				6 7 2 1	型式不明		新種	1	平 瓦		
							D	1	平安時代	1	重 量kg	22,351.92
										点 数	28,395	
						軒 平 瓦 計						

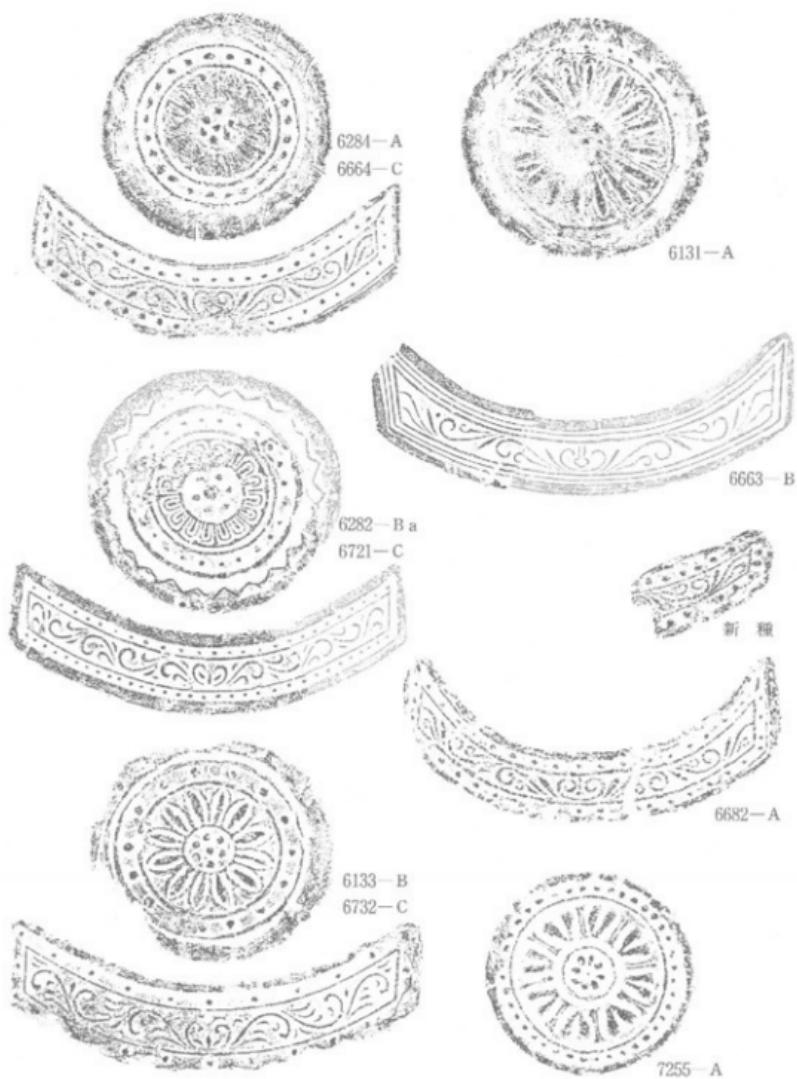


図23 第217次調査出土軒瓦（1：4）

## 6 まとめ

今回の調査区からは埴輪片が出土しており、またかつて東半部の広場では古墳も検出している。このように、この地区の近辺には多くの古墳があったと推測できる。そのような地域に、西調査区では厚さ1mにも及ぶ大規模な盛土による整地を施し、第一次大極殿地区を建設したことが確認できた。また、第一次大極殿地区の東西両築地回廊と石積擁壁部分の状況、変遷が確認できた。その結果、今回検出した遺構は、基本的にこれまでの調査で知られた本地区東半部の遺構と左右対称の配置をとり、同じ変遷をたどっていたことがわかった。これにより、今後の本地区的整備に向けての良好な資料を得ることができた。

また、平安時代末～鎌倉時代初期と見られる炉跡を検出し、本地区を銅工房として利用していたことが明らかとなった。さらに墓があるなど、この地域の後世の土地利用のあり方の一端が判明した。

ただ、今回は旧構内道路に沿った狭長な調査区となつたため、周辺の遺構との関連を十分とらえることはできなかった。西面築地回廊の西側にあたる第一次大極殿地区外の状況や、広場に掘られた土坑SK14240の性格、銅工房遺構の広がりなど、今後の周辺の調査によって解明されるべき課題も多い。

(館野和己・森本 晋)

## 6 宮北面大垣の調査 第215-6次

住宅改築に伴う事前調査。平城宮の北面大垣については、これまでに第23次、34次、第161-1次、174-16次、191-4次調査などを行ない、築地や前身の掘立柱塀を検出している。今回の調査区は北面大垣の西端近くにあたり、西側および北側隣接地は、過去の調査で近世頃から沼地状になっていたことが判明している。本調査区も近世以降の破壊が著しいが、東南隅で北面大垣のごく一部を検出した。

北面大垣SA2300は、版築による築地積土が厚さ0.4mほど残る。うち0.2mほどが掘込み地業である。築地の南端は調査区外だが、過去の調査で基底幅2.1mと判明している。SD01はその北約1.0mにある雨落溝である。幅約1.1m、深さ約0.4m。溝肩から溝底にかけて一面に瓦が覆っていたが、すべて丸・平瓦で軒瓦は出土しなかった。SA2330はSA2300の前身の掘立柱塀である。一辺約1.6mの柱掘形を2個検出したにとどまる。ともに柱抜取り穴があり、柱間は10尺である。

SK02は中世の土坑。SD03は近世の南北大溝。西岸を石積み、東岸を丸太で護岸する。幅約3.2m、深さ約1.1m。SD04は近世末の南北大溝で、幅約3.8m、深さ約1.0m。両岸を転用材で護岸する。SD03の付け替えであろう。（毛利光俊彦）

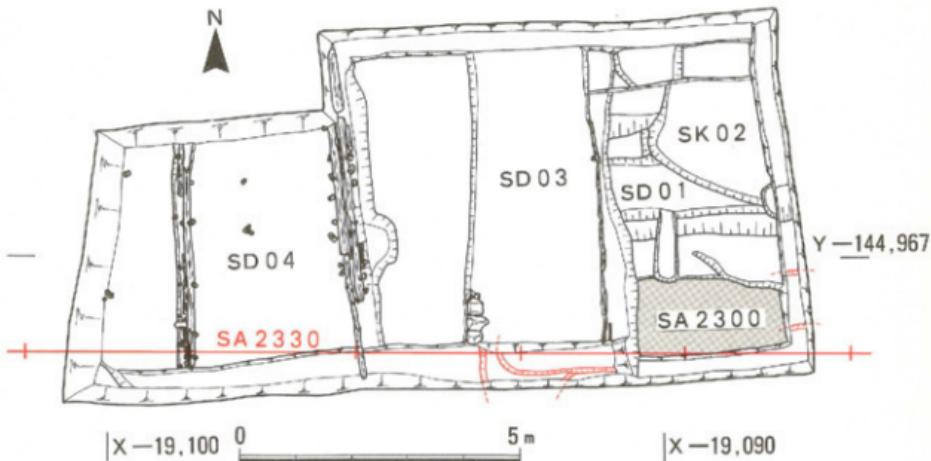


図24 第215-6次調査遺構図 (1:100)

## 7 東院地区東辺の調査 第215-7次

### 1 はじめに

平城宮の東に接する法華寺の集落東辺で住宅の増築工事があり、これに先行して発掘調査を実施した。調査は1990年8月21日に開始し、8月25日に終了した。調査は面積約35m<sup>2</sup>のA区を中心として、その西北約10mの地点に面積約7m<sup>2</sup>のB区を設けて調査を実施した。なお、本調査区の北と南にそれぞれ第79-7次、第79-4次の既往の調査区が存在するため、本項ではこれらの成果を含めて報告する。

### 2 基本層位

いずれの調査区においても厚さ約10~15cmの表土の直下が暗黄褐色粘質土の奈良時代の整地土、および黄褐色砂質土の地山となり、これらの上面で奈良時代の遺構を検出した。とりわけ本調査のA区では、調査区の東半部は地山が高まっており、中央部から西にかけて次第に厚く奈良時代の整地土が堆積している。

### 3 遺 踪

**遺構** 奈良時代の掘立柱建物2棟、掘立柱塀1条のほか、中世~近世の土坑などがある。

**SB13620A・B** 本調査のA区、第79-4次、第79-7次の各調査区において、この建物の柱穴を検出した。本調査のA区では西端と中央部やや西寄り、および東端の3地点において、それぞれ南北に重複する一辺約1~1.2mの柱掘形を計6個検出した。いずれも南側の掘形が新しく、掘形中央に直径約30~40cmの柱抜取り痕跡がある。3箇所すべてを断ち割ったところ、調査区中央部の2つの掘形が約0.9~1.1mと最も深く、次いで東端の掘形が約0.5~0.6m、西端の掘形は約0.3~0.35mと、二者に大きな差が認められる。おそらく西端の柱掘形は西庇に相当するものと思われる。中央部の柱掘形の北と南の延長線上には、79-7次および79-4次調査区でも同様の柱掘形を検出している。したがって、SB13620は桁行3間以上、梁間3間、西庇付掘立柱建物南北棟で、柱間寸法は桁行、梁間、庇の山ともに10尺等間の規模を持ち、ほぼ同位置で建て替えられているものとみられる。

SA13630 本調査のA区で検出した南北壠である。79-7次調査区では東半部の削平が著しく、SA13630の北の延長線上にあたる箇所に柱掘形を検出していない。本調査区内におけるSA13630の柱間寸法は2.7~3.0m (9~10尺) である。

遺物 出土遺物はきわめて少ない。SB13620の柱掘形から軒丸瓦6282Ba型式1点が出土したほか、表土層から中近世の土器片が微量出土した。

#### 4 まとめ

既往の調査区を含めた4つの調査区は平城宮東院地区の東端部に位置し、本調査区の東約8mの位置には平城宮東面大垣が想定される。SB13620やSA13630は、東面大垣に接して存在する平城宮東院の、何らかの役所の建物と考えられる。

(本中 真)

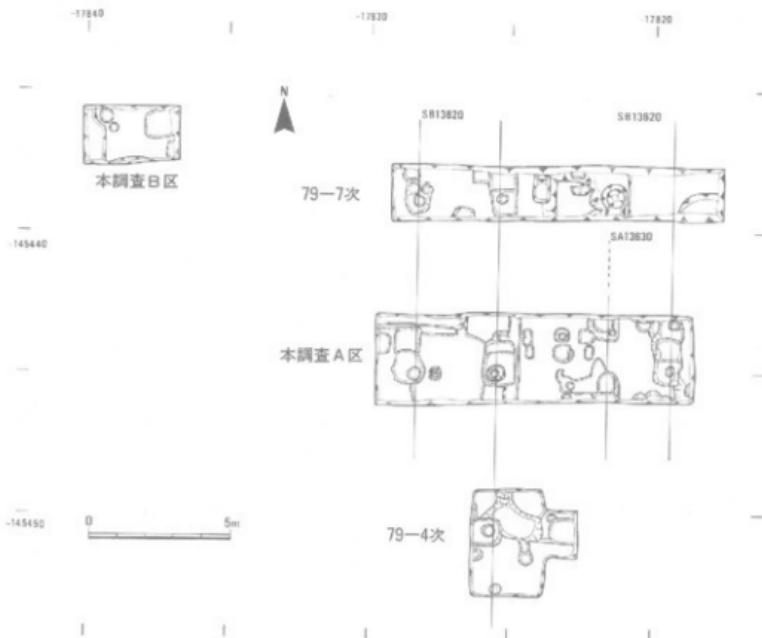


図25 第215-7次調査遺構図 (1 : 200)

### 1 はじめに

本調査は、佐紀町内の下水道敷設工事に伴う事前調査である。立坑掘削部分9箇所の発掘調査と立坑間の開削部分7箇所の立会調査を実施した。調査地は、佐紀池と御前池を分ける堤から東方、平城天皇楊梅陵（市庭古墳）の南を通る道路上で、現在この道路は、大半が平城宮の史跡整備地と住宅地とを画する境界となっている。從来この路面下については発掘調査を行なっていないため、今回の調査によって平城宮関係の遺構の検出が期待された。立坑部分の調査面積は118m<sup>2</sup>（開削部分131m<sup>2</sup>）である。調査は10月17日に開始したが、工事の進行に合わせて断続的に実施することとなったため、全調査が終了したのは1月25日である。

### 2 遺構

No.4立坑において築地の積土と思われる遺構、No.7立坑で柱穴1個を検出したほか、No.6立坑で市庭古墳周濠を確認した。

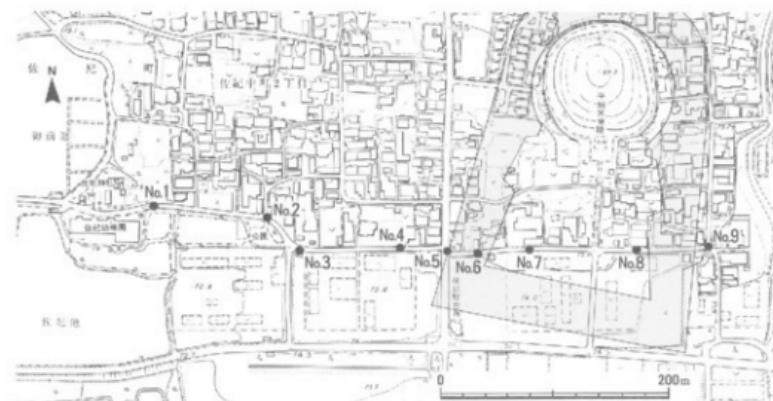


図26 第215-13次調査位置図 (1 : 5000)

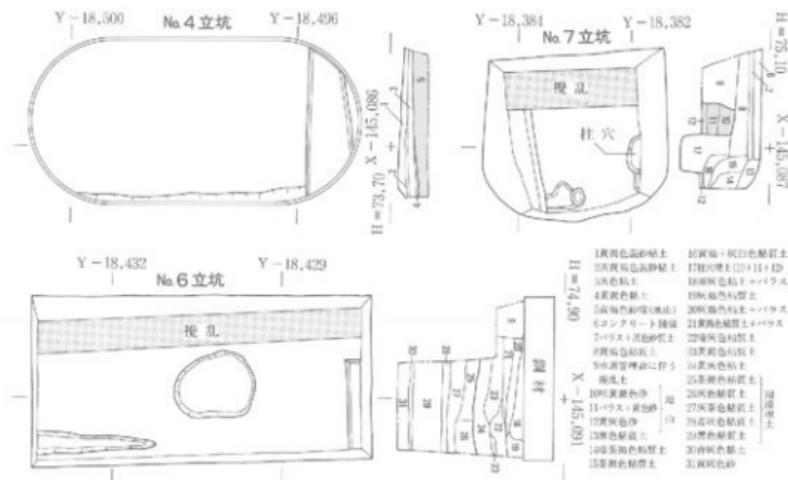


図27 第215-13次調査遺構図 (1 : 100)

No. 4 立坑の築地積土は、現道路面の約90cm下から検出したもので、上部はすべて攢乱を受けているため、痕跡程度しか残っていない。硬質の黄褐色砂砾の基盤層（地山）の上に黄褐色粘土、灰色粘土、灰黄褐色混砂粘土、少量の砂を含む黄褐色粘土が認められる。基盤層上面から積土の上部までの高さは最大35cm程度である。調査区の北半が旧水路の影響で還元されているうえに、幅の制約もあって明確な雨落溝などは確認できず、そのため築地心の確定はできなかった。この築地は、南辺のSA8100および東辺のSA350と同様に、宮内省大膳職の北辺を画するものと考えられる。第139次調査においては、内裏北外郭の築地東北隅を検出している（『昭和57年度平城概報』所載）が、その位置を国土座標系に換算すると、X = -145,088.0、Y = -18,175.4という数値が得られる。それから平城座標（方眼北から $0^{\circ} 7' 47''$ 西偏する局地座標）上で内裏北外郭の築地がまっ

すぐ西に延び、大膳職北辺の築地もそれと築地心を描えていたと仮定すると、今回の調査地での築地心の推定位置は、 $X = -145,088.7$ 、 $Y = -18,496.0$ となる。これは調査区の南端から1.7mほど南にあたる。したがって、この場合、今回検出した築地はその北寄りの部分に相当することになるが、こうした想定の正否については、周辺の調査の進展をまって検討する必要があろう。

No.7立坑の柱穴は現道路面の約55cm下から検出したもので、上部の黄褐色粘質土からは奈良時代の瓦片少量が出土した。No.7立坑は市庭古墳墳丘内部にあたり、柱穴は墳丘を削平した地山面から掘り込んでいる。No.4立坑と同様に、今回の調査地での築地心の位置を推定すると、 $X = -145,088.5$ 、 $Y = -18,352.0$ となる。これは調査区の南端から0.5mほど南にあたる。したがってこの柱穴は築地にともなうものである可能性が高いが、正否については、やはり周辺の調査の進展をまって検討しなければならない。

No.6立坑は市庭古墳前方部西南の周濠内濠部分に位置する。市庭古墳関係の調査には第10、11、13、20、82-7、95-6・11、103-2、126次調査などがあり、奈良時代に市庭古墳を破壊し、濠を埋め立て、整地を行なって平城宮を建設した状況が明らかになっている。その整地土の下から墳丘の一部や内濠SG2150を検出しておらず、墳丘を切り崩した黄褐色系粘質土の整地土、古墳の葺石、濠

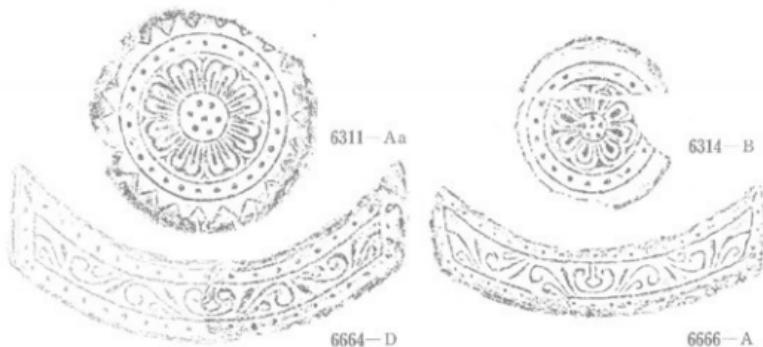


図28 第215-13次調査出土軒瓦（1：4）

の底面までの土層などを確認している。濠底の標高は西南隅では71.7mである（『平城宮北辺地域発掘調査報告書』、『平城宮発掘調査報告』Ⅶ）。今回の調査区では、現道路面の約70cm下から黄褐色系粘質土の整地土を検出し、この面から奈良時代の軒丸瓦、軒平瓦が多数出土した。整地土は約60cmの厚さで終り、その下に茶褐色粘質土、灰茶色粘質土、黒色粘質土の面が続き、これらが古墳周濠部の埋土と考えられる。黒色粘質土の面で葺石の落込み状況を確認した。濠底の標高は71.9mであった。

### 3 遺 物

出土遺物は全体に僅少で、少量の土師器細片と瓦類が出土しているにすぎない。軒瓦は、No.1立坑から近世の軒平瓦が出土したのを除くと、全てNo.6立坑から出土したものである。6225、6284型式もわずかにあるが、主体となるのは6311A・B-6664D・F、6314B-6666Aという平城宮軒瓦編年の第Ⅱ期前半の組合せである。これらの型式・種は内裏地区において卓越することが明らかになっており、この地域が内裏と密接な関わりをもっていたことを示唆するものとみられる。

（小澤 耕・森 公章）

表7 第215-13次調査出土瓦集計表

軒 丸 瓦			軒 平 瓦			丸 瓦	
型 式	種	点 数	型 式	種	点 数	重量 kg	10.79
6 2 2 5	A	1	6 6 6 4	D	1	点 数	82
6 2 8 2	不明	1		F	1		
6 2 8 4	不明	1	6 6 6 6	A	2		
	A	6			2		
6 3 1 1	B	1	型式不明		1		
	不明	2	中世以降				
6 3 1 4	B	5					
	C	1					
型式不明		2					
軒 丸 瓦 計		20					
			平 瓦			平 瓦	
						重量 kg	11.73
			軒 平 瓦 計			点 数	100

## II 平城京・京内寺院の調査

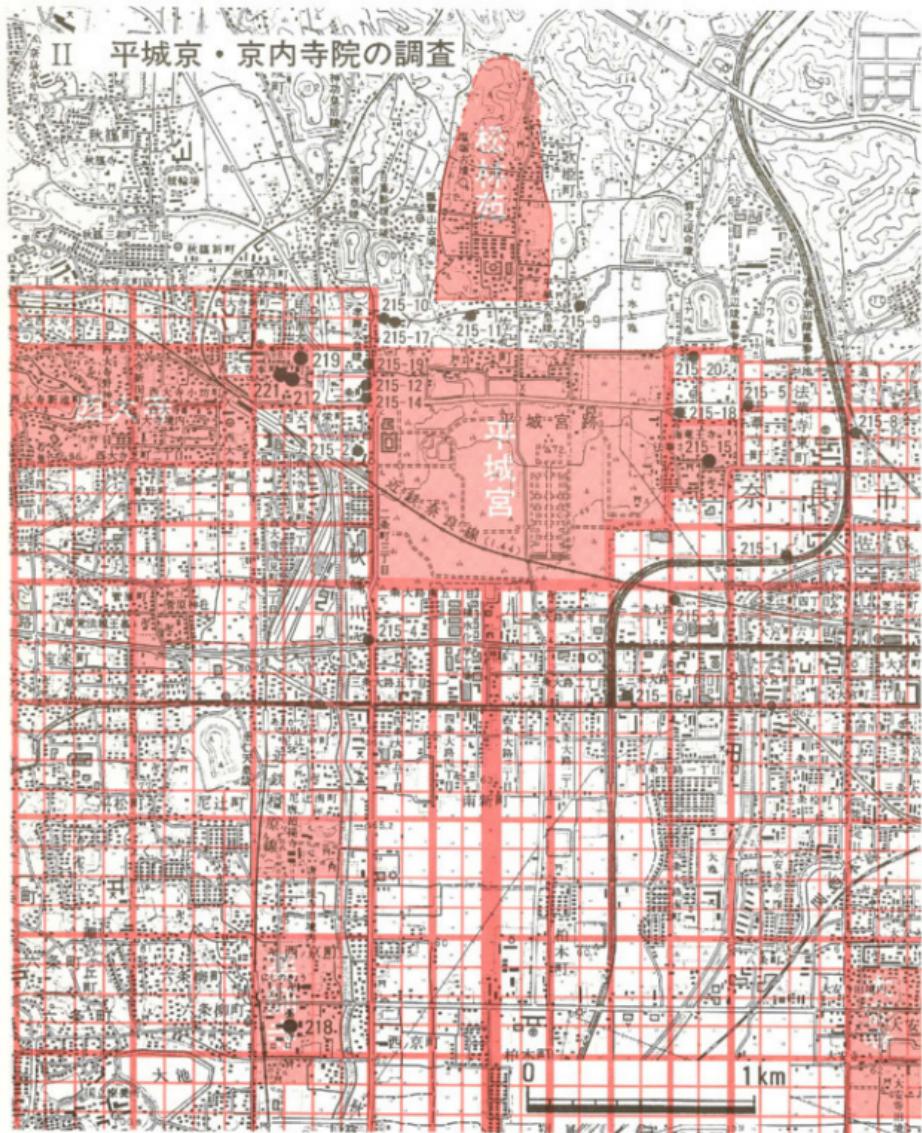


図29 1990年度平城京・京内寺院発掘調査位置図 (1 : 25000)

表8 1990年度 平城京・京内寺院発掘調査地一覧

調査次数	調査地区	地区名	面積(㎡)	調査期間	調査担当者	備考	掲載頁
212	西隆寺旧境内	6BSR	600	5. 7 ~ 6. 19	杉山 淳	奈良ファミリー 建設地Ⅲ	106
218	薬師寺講堂・北面回廊	6BYS	700	7. 5 ~ 8. 25	鷹田 敏男	伽藍復興	97
219	西隆寺旧境内	6BSR	1,030	11. 16 ~ 11. 23 1. 22 ~ 3. 29	玉田 芳美 修口	奈良ファミリー 建設地IV	111
221	西隆寺旧境内	6BSR	585	1. 22 ~ 3. 14	小野 健吉	奈良市都市計画 道路I	120
215-1	左京三条三坊六坪	6AFE	320	4. 3 ~ 5. 11	浅川 浩男	川崎ビル	74
215-2	右京一条二坊四坪	6AGA	200	5. 15 ~ 5. 23	高瀬 要一	歯科医師会館	
215-3	左京三条二坊九坪	6AFI	430	6. 19 ~ 7. 12	杉山 淳	武田丈夫宅	92
215-4	西一坊大路	6AGF 6AGG	142	7. 7 ~ 7. 13	小池 伸彦	ケンタッキー フライドチキン	94
215-5	左京一条二坊二坪	6AFB	95	7. 26 ~ 8. 8	本村 真	金田町吉宅	58
215-8	左京一条四坊二坪	6AGA	250	8. 27 ~ 9. 10	小池 伸彦	青山商事	70
215-12	右京一条二坊二坪	6AGA	16	10. 15 ~ 10. 17	森 公章	竹田キヨ子宅	
215-14	右京一条二坊二坪	6ACA	25	10. 22 ~ 10. 25	玉田 芳美	斎火	
215-15	法華寺境内	6BFO	205	10. 29 ~ 12. 6	上野 邦一	境内改修	126
215-16	左京三条二坊四坪	6AFI	400	11. 21 ~ 12. 26	小沢 義	大一車舗	81
215-18	法華寺旧境内	6BFO	17	1. 16 ~ 1. 17	松本 修自	東口酒店	
215-19	西一坊大路	6AGA	10	2. 25 ~ 2. 26	金子 格之	大久保喜八郎宅	
215-20	左京一条二坊十坪	6AFC	18	3. 12	金子 格之	塙本余良次郎宅	

## 1 はじめに

半城宮東方の法華寺町において事務所の新築工事があり、これに先行して調査を実施した。調査面積は95m<sup>2</sup>、調査期間は7月26日から8月8日までである。

**基本層位** 地表面下約1.2mには北から南に向かって緩やかに下る青灰色粘土の地山があり、調査区南半部には地山の上面に奈良時代の整地土が薄く存在する。調査区北半部は地山の上面で、両半部では整地土の上面で奈良時代の遺構を検出した。これらの層の直上には厚さ約30cmの黒色腐食土層の堆積がある。この黒色土の堆積土層は、調査区全体が中世に沼沢地であったことを示す。層中には夥しい量の輝石安山岩（通称カナンボ）の玉石を含み、若干量の中世の上器片等が出土した。黒色土中に含まれる多量の玉石群は、本調査区の北方に存在した建物回りの化粧材か溝の護岸に用いられていたものであろう。なお、黒色土の上には厚さ約15~25cmの耕作土があり、それより上は厚さ約60cmの現代の盛土層である。

## 2 遺 跡

**遺構** 奈良時代の掘立柱建物1棟、玉石列1条、土坑1基等を検出した。

**SB01** 調査区北半部で検出した掘立柱建物である。桁行3間以上、梁間2間以上で、柱間寸法は、桁行が3.9m（13尺）等間、梁間が3.0m（10尺）である。柱掘形の深さは約60~70cmと浅く、遺構面が削平されていることが推定される。

**SX02** 調査区南端付近で検出した玉石列。幅約0.3~0.5m、延長約2.5m分を検出し、奈良時代の整地土上面に据えられている。東西溝の側石が、北方から流れてきた中世の流水によって大半が削り取られた後にかろうじて遺存したものであろう。

**SK03** 調査区中央西端で検出した土坑。西半部は調査区外に延びるため、東半部のみ掘り下げた。直径約1.5m、深さ約0.85mある。単なる土坑ではなく井戸である可能性もあるが、井戸であるとすれば、側板は抜き取られて残らない。

**遺物** 瓦では奈良時代の軒丸瓦5点、軒平瓦8点と、中世の軒瓦が24点ある。土器は奈良時代の土師器、須恵器と、若干量の中近世の土器がある。遺物はすべ

て黒色腐食土層から出土した。

### 3 まとめ

本調査区は左京一条三坊二坪の西南隅にあたり、調査前には二坪と三坪の坪境小路に関連する遺構が想定された。しかし調査の結果これに該当する遺構は確認していない。ただSX02は東西溝の側石である可能性があり、小路側溝の痕跡を

示すものとも理解できる。しかし從来の平城京城の調査によれば、小路側溝が玉石で護岸された例は皆無であるから、SX02が小路側溝の痕跡であると考えるよりも、二坪南端を画する築地の北側溝の痕跡と考えるほうが自然であろう。

(本中 真)

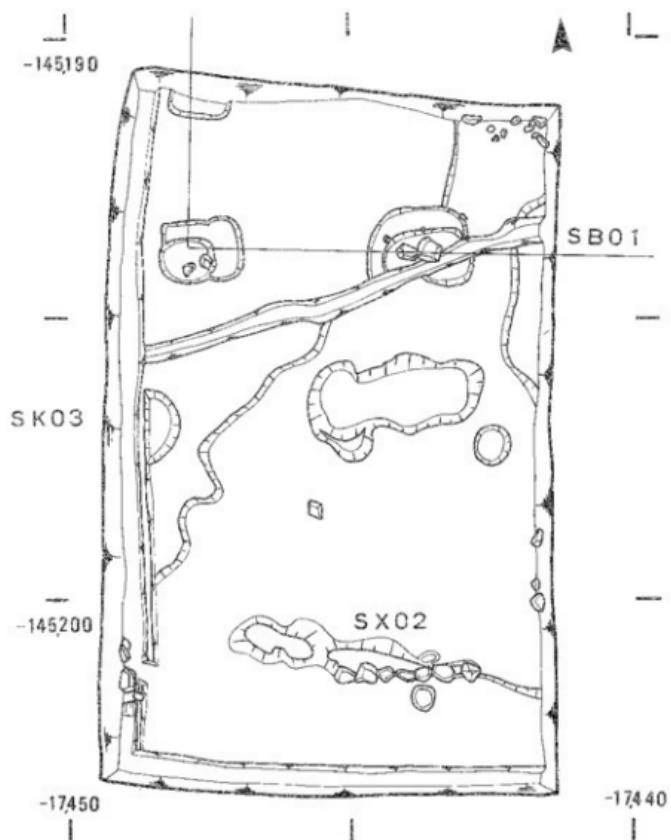


図30 第215-5次調査遺構図 (1 : 100)

## 2 左京一条四坊三坪の調査 第215-8次

奈良市法蓮町にある洋装店の倉庫増築にともなう調査である。調査は1990年8月27日から9月10日まで実施した。面積は250m<sup>2</sup>。調査地の旧状は、JR関西本線と店舗とに挟まれた三角形の狭い駐車場であった。

調査地の土層は、駐車場のアスファルト路面から約30cmの深さまで碎石を主体とする造成土があり、その直下で砂礫混じりの黄褐色粘土の地山面に達する。調査区内では遺物包含層はまったく見られなかった。これは店舗建設の造成工事の際に、本来の遺構面よりかなり下まで削平したためとみられる。また、建築廃材を埋めた土坑が調査区内に点在していたり、外灯用電灯線の配線やコンクリートU字溝埋設のための素掘溝が調査区内を横断していた。これらの削平と攪乱により遺構は既にかなり破壊を受けていたが、部分的には非常によく遺構の残っていることが調査により確認できた。

調査地は平城京左京一条四坊三坪にあたり、坪の中央南部に位置する。調査の



図31 第215-8次調査位置図

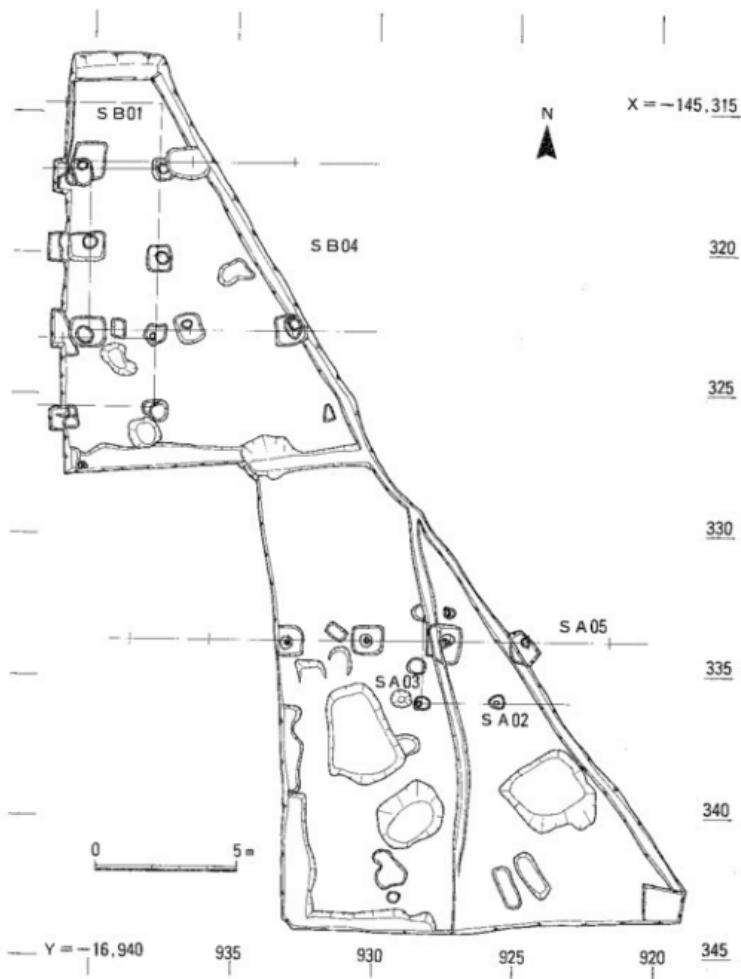


図32 第215-8次調査遺構図 (1:200)

結果、奈良時代の掘立柱建物 2 棟、東西塀 2 条、南北塀 1 条が見つかった。遺構の重複から 2 時期に分けることができる。

A 期 掘立柱建物 SB01、東西塀 SA02、南北塀 SA03 がある。いずれも柱穴の残りは悪い。SB01は南北に庇をもつ東西棟建物で、北東隅の柱穴は既に削平されていたが、その西側の柱穴を調査区の西壁面で確認した。身舎の梁間 2 間（柱間約 3 m）、桁行は 1 間分（柱間約 3.3 m）を検出した。庇の山は約 2.4 m である。2 条の塀は L 字形をなし、南の東西塀 1 間分（柱間約 2.7 m）と、その西端で北へ折れる 2 間分（柱間約 1.5~1.8 m）を検出した。東西棟建物 SB01 の東妻と南北塀の間は約 9.6 m (32 尺) ある。

B 期 掘立柱東西棟建物 SB04、東西塀 SA05 がある。削平を受けているにもかかわらず、両者とも柱掘形は一辺 1 m 以上あり、大きい。SB04は梁間 2 間で、桁行は 2 間分検出した。梁間の柱間は約 3 m 等間、桁行の柱間は約 3.6 m 等間であり、平城京内の掘立柱建物のなかでは大型に属する。また、北側柱列の東の柱穴では礎板が、西妻中央の柱穴では礎板と根石がそれぞれ出土した（図33-1・2）。

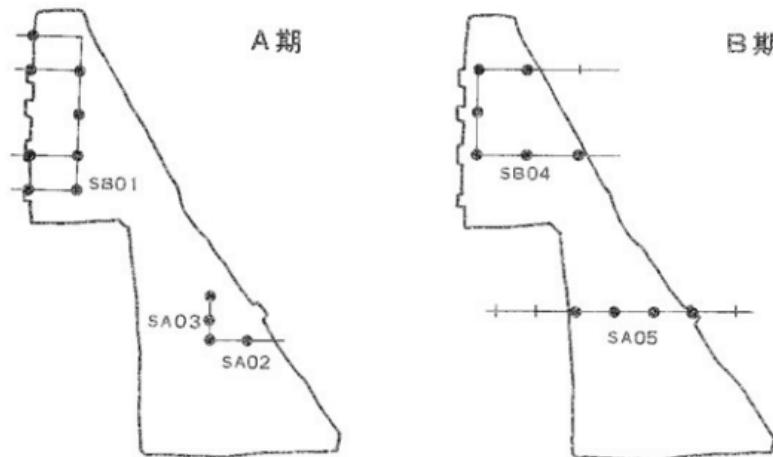


図33 遺構変遷図 (1 : 400)

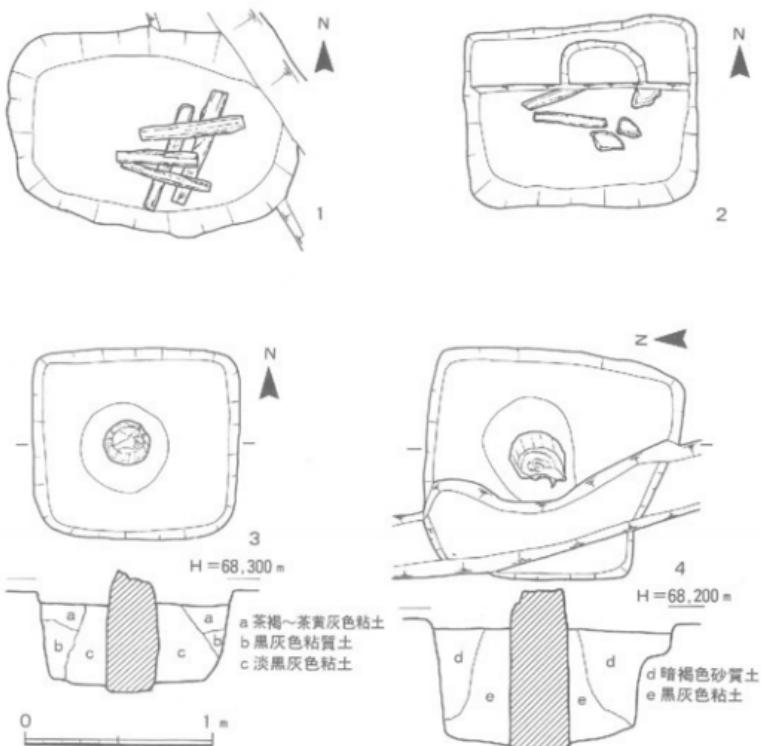


図34 SB04礎板・根石出土状況、SA05柱穴断面図（1：30）

SB04の南側柱列から約11m（37尺）南に東西塙SA05がある。SA05は柱間が約2.7mで、3間分を検出し、西側3個の柱穴には柱根が残っていた。西から2本目、3本目の柱穴の断面を見ると、柱を立てる際に根元の周囲を円錐状に粘土で固めて埋めた様子がはっきりと分かり、掘形も削平を受けた割には深く（約0.5～0.8m）、造作のしっかりした塙であったことがうかがえる（図34-3・4）。

出土遺物は皆無に近く、遺構の各時期の年代は不明である。また、遺構の坪内での位置の詳細な検討も今後の課題である。しかし、平城京内では大型に属する掘立柱建物を発見したことは、大きな成果であった。

（小池伸彦）

### 1 はじめに

事務所建設にともなう事前調査である。調査面積は320m<sup>2</sup>。調査地は、左京二条三坊六坪の東南隅にあたり（図35）、1985年度には第164-12次調査として西隣の一画（現トヨタ・ヴィスタ）を発掘している。本調査では、坊間路・坪境小路の側溝をはじめ、六坪の敷地内において掘立柱建物2棟、掘立柱塀3条、井戸2基などの遺構を検出した（図36）。なお、条坊遺構の推定座標値は、①条坊の振れが15' 41"、②坪境小路の幅は側溝心々で20大尺、③坪一辺の規模は道路心々距離で450小尺、1小尺=0.296mとする3つの仮定にもとづき、これまでの周辺における調査成果を基礎として換算したものである。

### 2 遺構の変遷

検出した遺構は、A期～C期の3期にわたる変遷をしている（図37）。

**A期（奈良時代初期）** 二条条間南小路北側溝SD03と東三坊坊間路西側溝SD04によって、六坪の敷地を区画する。SD04は発掘区を貫流する素掘りの南北溝で、幅が1.9～2.2m。トレンチ東南隅でわずかに東の肩を検出した。深さは遺構検出面下20cm～50cmで、溝底の凹凸が著しい。西の肩は、トレンチの中央付近にわずかな張出しがあり、その前方の溝中には橋脚と思われる杭が1本遺存する。つまり、六坪の敷地は坊間路西側溝に橋をかけて道路に連絡していたことになる。

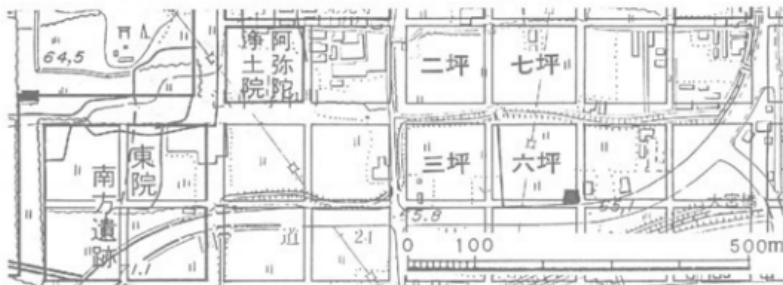


図35 第215-1次調査位置図

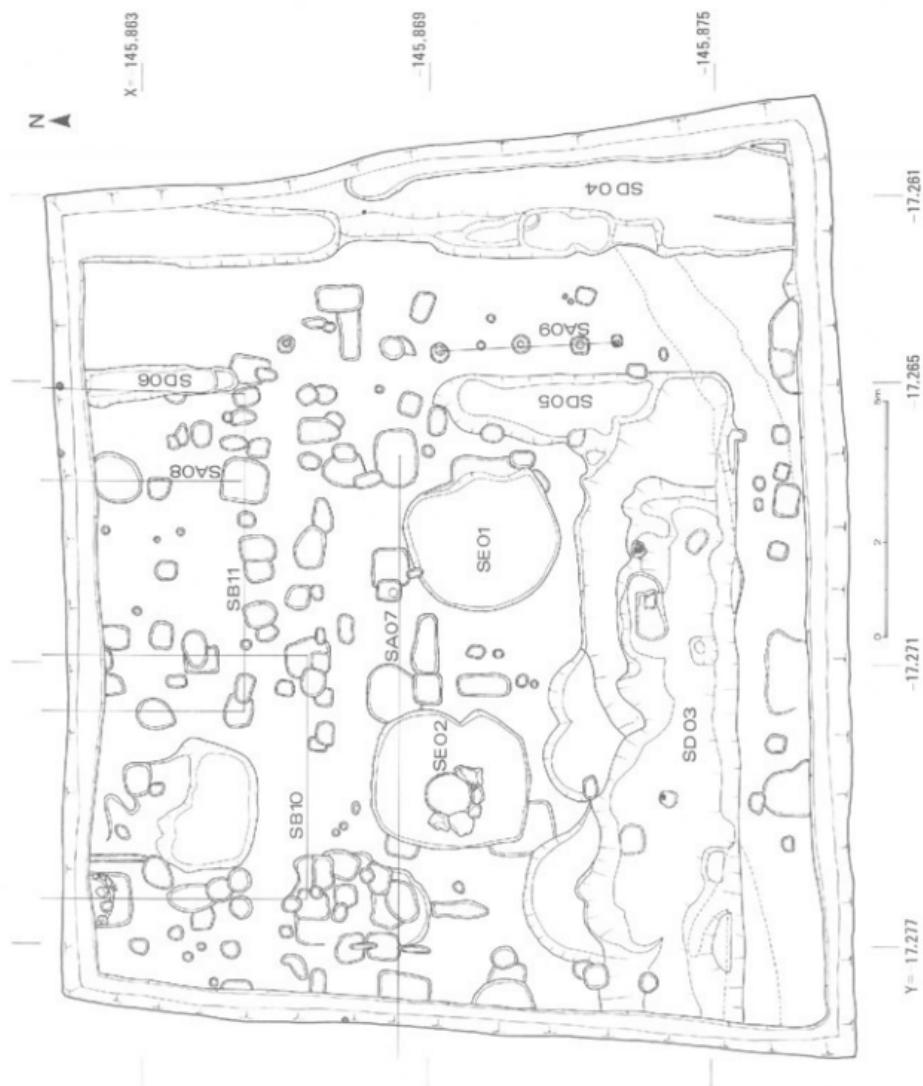


図36 第215-1次調査遺構図 (1 : 120)

SD03は幅3.0～3.3mの素掘りの東西溝で、深さは遺構検出面下30～36cmである。この溝は発掘区を貫流せず、SD04の手前約2.5mのところで途切れる。すなわち、六坪の敷地は、その東南隅で、五坪との坪境小路と地続きになっていた。

SD03とSD04によって区画された六坪の東南隅には、掘立柱建物SB10がたち、その南方には井戸SE01がある。SB10は桁行2間以上×梁間2間の南北棟で、柱間寸法は桁行が7尺、梁間が11尺である。梁間中央の柱穴は、妻壁面よりもやや前方に位置しており、直接棟木をうける棟持柱であった可能性が大きい。SE01はすでに井戸枠が抜きとられていたが、抜取り穴の底から多量の土器が出土した。土器はいずれも平城宮土器Ⅰに属しており、A期の年代が知られる。

さて、前記の条坊遺構に関する3点の仮定にしたがうと、二条三坊の坊間路と条間南小路との交点の座標値は、X = -145,877.226、Y = -17,257.787となり、SD04と坊間路の心々距離は約3.2mである。したがって、坊間路の幅は、側溝心々距離で約6.4m（22小尺）に復原できる。一方、条間南小路とSD03の心々距離は約3.6mあり、条間南小路の幅は側溝心々距離で約7.2m（20大尺）に復原できる。なお、SD03は1984年度の第156～18次調査で検出したSD01とX座標がほぼ一致しており、一連の東西溝である可能性が大きい。

**B期（奈良時代前半～中頃）** 挖立柱建物SB10と井戸SE01は廃絶し、かわって3条の掘立柱塀SA07・SA08・SA09を築き、小さな南北溝SD05・SD06を掘る。これらの遺構は、いずれも六坪東南隅の区画関連施設である。

SA07はSD03の心から北へ約6m（20小尺）の位置にある4間以上の東西塀



図37 遺構変遷図

で、柱間寸法は10尺等間である。これに直交するSA08は1間以上の南北塀で、柱間はやはり10尺である。SA08とSA07東端の柱では約60cmのずれがあり、またSA08南端の柱とSA07の間隔は塀の柱間より広く11尺あって、おそらくここが六坪東南隅の出入口であったのであろう。

条間南小路北側溝SD03に接続して掘られた南北溝SD05は、SA07の手前で途切れる。SA09は、SD05の位置、長さと対応するようにたてられた4間の南北塀で、仮設的なものとみられる。柱間寸法は北から3尺、3尺、4尺、2.5尺と一定ではなく、柱位置も正確な直線上にはない。SD06はSD05の延長線上にある南北溝で、こちらはSA08と対応関係を示している。以上のように、SD05・SD06は六坪の敷地東南隅の出入口をさけるようにして設けられた南北溝であり、それぞれ対応関係をもつSA09・SA08と一体化して、敷地の隔離性をより強固にしている。なお、SD05・SD06からの出土土器は、平城宮土器Ⅱのものを主体とする。

C期（奈良時代後半） B期の区画施設SD05・SD06・SA07・SA08・SA09はすべて廃絶し、六坪の区画施設は再びSD03とSD04だけになる。敷地のなかには、掘立柱建物SB11がたち、その南方に井戸SE02を掘る。空間構造としては、A期にきわめてよく似ている。

SB11は桁行2間以上×梁間1間の南北棟で、棟東を用いた妻入の建物であろう。柱間寸法は、桁行が8尺等間、梁間が17尺である。SE02は縦板組の円筒形

H=62.400m の井戸で、直径は約1m。杉の板

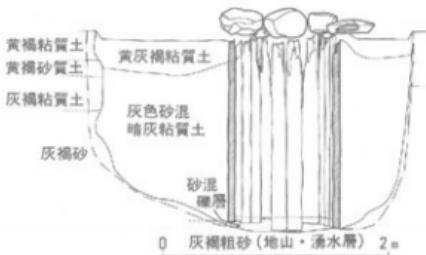


図38 井戸SE01断面図 (1:50)

材を二重にまわしており、上端に大きな自然石を5つ残した状態で遺存していた（図38）。井戸底の砂混礫層から和同開珎、萬年通宝、神功開宝などの銅錢15枚が出土し、埋土上層からは10世紀初頭の土師器が出土した。（浅川滋男）

### 3 遺 物

**土 器** 4条の溝と井戸SE01から、大量の土器が出土した。SE01の底から一括出土した土器(図39)には、土師器杯B、皿C(6)、椀C(7)、甕C(4)、羽釜(5)、須恵器杯A、杯B(9)、杯B蓋(8)、平瓶(1)、壺A(3)、壺B(10)、壺L、壺Q(2)がある。土師器甕Cは、小さな平底で、外面を粗い刷毛目で調整し、器壁を薄く仕上げる粗製の甕である。2個体出土した。近畿地方には類例が少ない。須恵器杯B、杯B蓋、平瓶、壺Bは、いずれも灰白色を呈し、濃緑色の自然釉が厚くかかる。美濃古窯跡群の製品と推定される。また、壺Qや杯Aなどには漆が付着する。小片のため図示は省略したが、土師器杯Bに螺旋暗文+二段斜放射暗文をもつものがあり、また、須恵器平瓶や壺Aの形態からも、平城宮土器Iに位置づけられる。

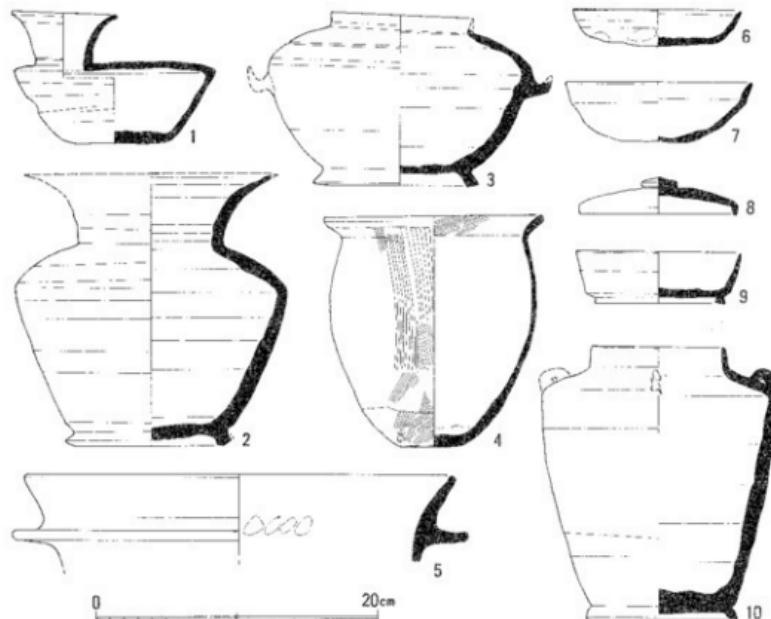


図39 SE01出土土器 (1 : 4)

SE02の埋土上層からは、e手法で調整するほぼ完形の土師器杯Aと皿Aが2個体ずつ出土した(図40)。10世紀初頭に位置づけられ、外面ヘラ削りのc手法による東三坊大路東側溝上層(SD650B)出土土師器より後出する。また、天禄4年(973)の火災によって遺棄された薬師寺西僧房床面出土土器と比べると、皿Aの口縁部に屈曲がなく、両者の中間に位置づけられる。なお、「新」もしくは「新田上」と記す墨書き器が坊間路西側溝SD04から出土した。(杉山 洋)

**木製品・金属製品** 溝と井戸から木製品、金属製品が出土した。木製品には堅杵、漆刷毛、曲物、蓋板、挽物皿、琴柱、加工棒、部材などがあり、ほかに漆塊、種子類なども出土した。これらはおもにSD03とSD04から出土し、井戸SE01からは曲物と部材が出土したにすぎない。いずれも腐食がすすみ、残りはよくない。これらのうち、堅杵は丸材の中央を粗く削って握りとした簡単なもの。中央で折れているがほぼ完形で、長さ43.9cm、直径4cm。漆刷毛は腐食のためほとんど原形をとどめないが、先端部に漆の付着した毛が残る。琴柱は、底辺の中央部を三角形に切り欠いて双脚としたもので、ほぼ完形。長さ3.8cm、高さ2cm。

井戸SE02からは木製品は出土しなかったが、鉄釘、銅鋌とともに銅錢が出土した。銅錢は和同開珎、萬年通宝、神功開宝の3種15枚で、いずれも完形品であり、井戸底の砂混疊層から出土した。和同開珎は「隸開和同」であり、萬年通宝には「年」の第4画を縱にする「綴点萬年」5点と、横にする「横点萬年」2点

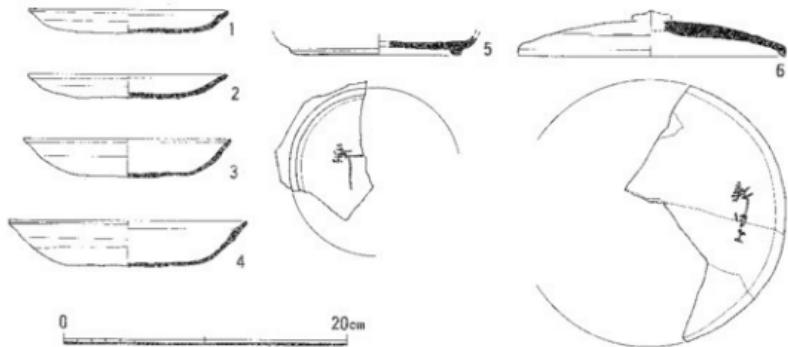


図40 SE02・SD04出土土器(1:4, 1~4;SE02, 5・6;SD04)

があり、神功開宝には「功」の旁を「刀」にして縁に長くのばす「長刀」と呼ばれるもの6点と、同じく旁が「力」で鉄鋸が一回り大きい「力功大様」1点がある。平城京内の井戸出土の銅錢としては、1987年度の第186次調査で、左京三条三坊二坪の奈良時代後半の井戸から出土した和同開珎、萬年通宝、神功開宝の3種39枚がある。やはり完形品が多く（32枚）、井戸底の堅くしまった砂層に散在していた。今回発見した銅錢とよく似た出土状況を示している。（小池伸彦）  
瓦塊類 軒丸瓦と軒平瓦が、あわせて7点出土した。軒丸瓦は6133A、6135A、6225A、6318Abの4種5点で、6135Aが2点ある。軒平瓦は6641I、6732Cの2種2点である。

#### 4　まとめ

面積300m<sup>2</sup>あまりの小規模な調査ではあったが、発掘区が左京二条三坊六坪の東南隅という地点にあたることもあり、上記のような興味深い遺構と遺物をいくつか発見することができた。ここにその成果を要約しておこう。

- ①坊間路西側溝SD04と条間南小路北側溝SD03を検出し、坊間路と条間南小路の幅を側溝心々距離で、それぞれ22小尺、20大尺と復原できた。
- ②六坪の敷地は、その東南隅において、東側は坊間路西側溝に橋を架け、南側は条間南小路北側溝の途切れた余地を利用して、周辺道路と連絡していた。
- ③遺構は、大きくA～Cの3期にわたる変遷をしている。その中で、奈良時代前半から中頃にかけて最も長く存続したB期では、3条の解と2条の南北溝を設けることによって、敷地の閉鎖性を強固にするとともに、道路に対する複雑なアプローチをうみだしていることが判明した。
- ④井戸のうち、SEG1は平城遷都のごく初期に掘られてまもなく廃絶したが、SE02は765年を上限とし、平安時代（10世紀以降）まで存続した。
- ⑤4条の溝と2基の井戸からは、年代の判明する土器や銅錢など、多彩な遺物が出土した。その中で、奈良時代初頭の漆付着土器や漆籠、漆塊などがまとまって出土したことが注目され、付近に漆関連の作業所的なものが存在した可能性が指摘できる。

（浅川滋男）

## 1 はじめに

本調査は、店舗付共同住宅建設に伴う事前調査である。調査地は平城京左京三条二坊四坪の東南部にあたるが、当該坪については、1986年に北辺部の発掘調査を実施している（第174-11次、『昭和61年度平城概報』所載）。今回の調査面積は約400m<sup>2</sup>であるが、厚さ0.7~1.0mにおよぶ盛土が行なわれていたため、遺構面における実質的な面積は300m<sup>2</sup>にとどまる。11月21日に重機による掘削を開始し、12月26日の遺構保護用の砂入れをもって調査を終了した。

**土層** 調査区の基本的な層序は、盛土の下に厚さ15~20cmの灰黒色の水田耕土があり、次が10cm内外の淡灰黒色の旧耕土と厚さ数cmの床土となる。この下が基本的には奈良時代の基盤層（地山）である。上から灰色砂・黄灰色粘土・灰黒色砂質土・灰黃褐色砂質土……（以下略）の順で堆積しているが、遺構検出はほとんど灰色砂の面で行なった。基盤層（地山）上面の標高は、59.3~59.4mである。



図41 第215-16次調査位置図（1:5000）  
大和都市計画図1/2500から作製

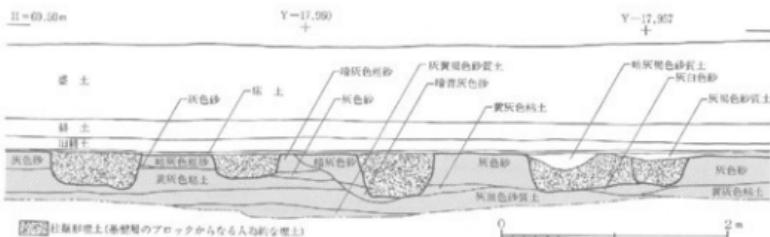


図42 調査区北壁土層図（部分、1:50）

調査区の東北部には、灰色砂の上に、奈良時代の遺物を含む層（灰褐色砂質土）が薄く広がるが、この上面では奈良時代の遺構は確認されなかった。なお調査区内には、部分的に暗褐色砂質土を埋土とする窪みが存在するが、これらも奈良時代以前のものと考えられる。

## 2 遺構

検出した遺構は、平城京関係のものと、京廃絶後のものに大別される。前者の遺構としては、掘立柱建物 6 棟、掘立柱塀 3 条があり、後者に属するものとしては、素掘溝、土坑がある。

SB01 調査区の中央北寄りの部分で検出した、桁行 3 間・梁間 2 間の東西棟建物。桁行総長 9.0m (30 尺 = 10 尺 × 3)、梁間総長 4.8m (8 尺 × 2) を測り、方位は国の方眼にはほとんど一致する。柱筋をそろえて南側に 2 列の小柱穴列をも

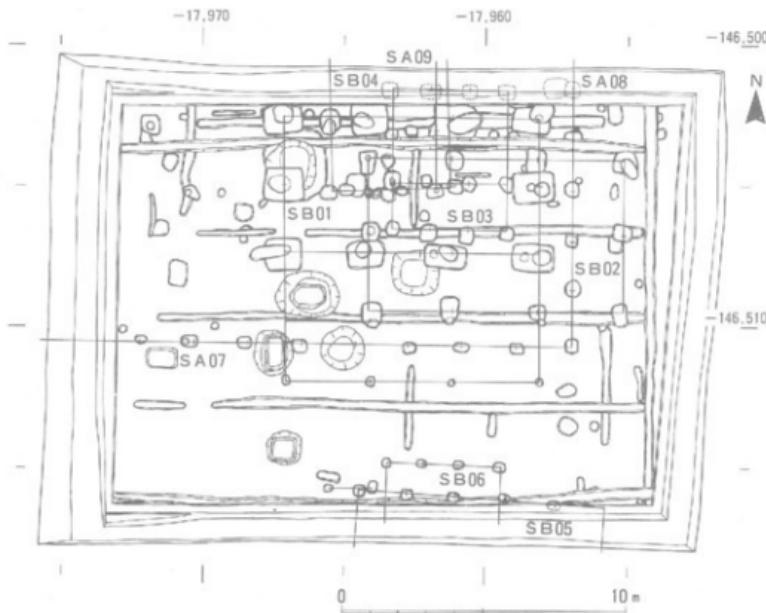


図43 第215-16次調査遺構図 (1 : 200)

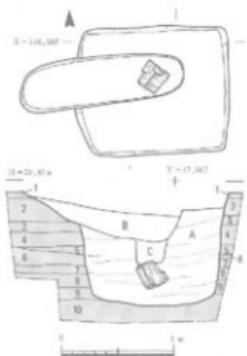
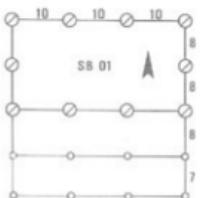


図44 SB01西南隅柱穴（1:50）

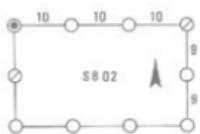
五往軒部地盤上	1 桜色砂	6 鮎川色砂
〔基盤部のブロック〕	2 黄灰色粘土	7 黄灰色粘土
3 柱抜取穴地盤上	3 死葉色砂質土	8 鮎川色砂
〔柱抜取穴地盤上〕	4 青灰黑色砂質土	9 青灰色粘土
C柱式床板地盤上	5 黄灰色粘土	10 鮎川色粘土

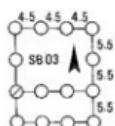
つことから、建物の南に広縁を張り出した構造であったと考えられる。南側柱列から北側の小柱穴列までの距離は2.4m（8尺）、そこから南側の小柱穴列までの距離は2.1m（7尺）である。主柱穴が遺構検出面から（以下、深さについては遺構検出面からの数値とする）70~100cmにおよぶ深さを有するのに対して、これらの小柱穴は深さ5~15cmと浅く、消失したものもみられる。主柱穴の掘形は、東西がやや長い長方形を呈しており、長辺で1.3~1.5m、短辺が0.8~1.2mとかなり大きい。建物本体の柱は全て抜き取られているが、下部の柱痕跡から推定される柱径は25cmほどである。西南隅の柱穴には、掘形の底部に建築部材を転用した礎板が残っていた（図44）。このほか、掘形の内部に、柱掘形より新しく、抜取穴に切られる小穴をもつものが、身舎の東南隅など3箇所で確認されている。縁の問題とも関連するが、床束の掘形を見てよいだろう。深さは30~35cmと、比較的浅い。柱穴の重複関係からみて、SB02・S B03・SB04・SA09のいずれよりも新しい。

**SB02** 調査区の東北部に位置する桁行3間・梁間2間の東西棟建物。桁行総長9.0m（30尺=10尺×3）、梁間総長5.4m（18尺=9尺×2）の規模をもち、方位は国土方眼にはば一致する。柱掘形は、正方形またはやや南北に長い長方形で、長辺0.6~0.8m、短辺0.6m内外、深さ50~60cmと、柱間に比べるとやや小型である。柱は、抜き取られたものと、柱痕跡を残すものの両者が見られるが、掘形のみしか確認できなかったものが多い。柱痕跡から復原される柱径は20cm程度である。SB01と重複し、その掘形によって切られる。

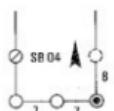


◎柱を抜き取ったもの ◉柱掘形のみ確認  
○柱掘形のみ確認 縮尺 1/300  
数字は柱間寸法(令小尺) 以下同じ





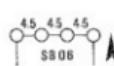
**SB03** 調査区北辺のはば中央部で検出した、桁行3間・梁間3間の東西棟建物で、南側に廂をもつ。北の側柱列は調査区の北壁にかかる形で確認されたもの（図42）で、南北長および北側の廂の有無については不確定要素が残るが、いちおう桁行総長4.05m（13.5尺 = 4.5尺 × 3）、梁間総長4.95m（5.5尺 × 2 + 5.5尺）とみることができる。桁行柱間が梁間のそれよりも短く、総長も桁行の方が短いという、やや特異なものである。方位は、 $1^{\circ} 20'$  ほど方眼北から東偏する。柱掘形は一辺0.4~0.6m、深さ25~35cmの略方形を呈し、身舎と廂とではとくに差は認められないが、妻の柱穴は小型で、深さも約15cmと浅い。柱穴の重複関係から、SB04・SA09よりも新しく、SB01よりも古い。



**SB04** 調査区の北辺中央部で検出した、桁行2間以上・梁間2間の南北棟建物。桁行柱間は2.4m（8尺）、梁間総長は4.2m（14尺 = 7尺 × 2）である。方位は、 $2^{\circ}$  近く方眼北から西偏する。柱掘形は、一辺0.5~0.7m、深さ30~45cmの方形ないし不整円形の平面をもつ。柱を抜き取ったものと、切り取った後の柱痕跡をもつものの両者があるが、柱径は約16cmである。SB01・SB03よりも古い。

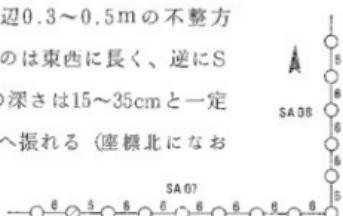


**SB05** 調査区の南端で検出した、桁行4間以上の東西棟建物。北側柱列以外は調査区外となる。確認した柱間は4間分7.0m（24尺 = 6尺 × 4）であるが、排水構内にもう1本の柱を想定して、桁行5間（総長8.8m = 30尺 = 6尺 × 5）と考えておきたい。柱掘形は東西0.4m、南北0.3~0.4m、深さ10~25cmの不整方形を呈する。径約11cmの柱痕跡を残すものがある。方位は、方眼北からかなり（約 $4^{\circ}$ ）東偏する。



**SB06** 調査区の南辺で検出した、桁行3間の東西棟建物。確認したのは北側柱列のみで、塀であった可能性も残るが、いちおう建物とみなしておく。桁行総長4.0m（13.5尺 = 4.5尺 × 3）を測る。柱掘形は、一辺0.35~0.45m、深さ5~15cmの不整方形を呈する。 $2^{\circ} 20'$  ほど方眼北から東偏した方位を示す。

SA07・SA08 調査区の中央やや南寄りを東西に走る東西塙（SA07）と、それから折れて調査区東部を北へのびる南北塙（SA08）。SA07は8間分15.2m、SA08は5間分9.0mを確認したが、いずれもさらに調査区外へと延びる。柱位置を知りうるもののがほとんどないため、厳密な柱間寸法は確定できないが、柱間はかなりばらつきが大きい。したがって、SA07については6.5尺等間に設定された可能性も残るが、一応仕事班とみて、ともに6尺等間に設定されたものと考えておく。柱掘形は、長辺0.4～0.6m、短辺0.3～0.5mの不整形を呈する。屈折点の柱穴を除き、SA07のものは東西に長く、逆にSA08のものは南北に長い平面を有する。掘形の深さは15～35cmと一定しない。方位は、SA07が $0^{\circ} 40'$ ほど東で南へ振れる（座標北になおせば東偏）が、SA08は座標方眼にほぼ一致する。



SA09 調査区の北辺中央部で検出した南北塙。確認したのは1間分にすぎず、さらに北の調査区外に延びるとみられる。柱間は2.1m（7尺）である。柱掘形は一辺約0.5m、深さ約20cmの略方形を呈し、柱痕跡から柱径は17cmほどと復原される。SB01・SB03と重複し、その柱掘形によって切られる。



東西溝 調査区のほぼ全域で検出したが、特記されるのは、調査区の北辺から南辺に至る間に規則正しく並ぶ、5本の東西溝である。これらは、西側こそ不規則にとぎれるが、東端は調査区東辺を走る南北溝付近に揃っており、かつその間隔が約3.0m（10尺）であることが注意される。この南北溝と東西溝は、幅30～50cm、深さ10～15cmの明らかに人为的に掘削された溝であり、側壁の立ち上がりも急である。埴土は暗灰色ないし暗灰褐色の砂質土で、少量の黄灰色粘土を交えるものもみられる。奈良時代の柱穴よりも新しく、次に述べる土坑よりも古い。平城京廃絶後の耕地に伴う遺構である。

土坑 もともに調査区の西部で検出したもので、明確なものとしては7基を数えることができる。さしわたし1.1mから2.6mにおよぶ、円形または略方形の平面

をもつ。深さは25~60cmであるが、40~50cmのものが多い。二段に掘削した例もみられる。埋土は暗灰色砂質土を主体とし、少量の黄灰色粘土ブロックを交えるものが一般的である。いずれも素掘溝および奈良時代の柱穴を切る。遺物はほとんど含んでいないが、中世の粘土採掘坑と判断される。

### 3 遺 物

奈良時代の遺物がほとんどであるが、大半が包含層など遺構に伴わなかたちで出土したものである。須恵器・土師器はあわせて5箱にすぎず、小片のため図示しうるものはない。瓦は、丸瓦5点2.16kg、平瓦37点4.28kgが出土しているのみで、軒瓦はない。丸瓦に比べて平瓦の数量が多いこと、平瓦の多くが小片であることを勘案すれば、むしろ熨斗瓦が主体とみて、檜皮葺屋根の熨斗棟における使用を想定することができるかもしれない。SB01西南隅柱の礎板として用いられていた建築部材（図45）は、長い角材の一部で、一方の端は折損しているが、他端に切断痕が残る。片面に仕口が認められ、その形状から横架材を転用したものと考えられる。

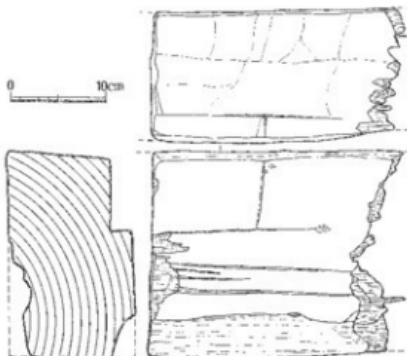


図45 SB01西南隅柱穴の礎板実測図（1:6）

### 4 まとめ

条坊復原と占地 今回の調査地である平城京左京三条二坊四坪は、南が三条大路、北が三条条間南小路に面し、西を東一坊大路、東を東二坊坊間西小路によって画される。これらの条坊道路は、いずれも過去に発掘調査が行なわれており（図46、表9）、その成果から当該坪の四至を復原しておきたい。なお2箇所以上の調査例がある場合は、当該坪およびそれをはさむ形で最も近接するものを選んだ。復原に際しては、まず当該坪に接する側の道路側溝心2点を通る直線を求め、坪の西北（a）・西南（b）・東南（c）・東北（d）におけるそれぞれの交点を算

出した。続いて、幅員の知られる三条条間南小路・東一坊大路・東二坊坊間西小路については、 $a \sim d$  から各々の道路側溝の南北方向の延長線上に三条条間南小路の推定路心  $a_1 \cdot d_1$ 、東西方向への延長線上に東一坊大路の推定路心  $a_2 \cdot b_2$  および東二坊坊間西小路の推定路心  $c_2 \cdot d_2$  を求めた。この  $a_1 \cdot d_1$  を結ぶ直線と  $a_2 \cdot b_2$  を結ぶ直線の交点が A (三条条間南小路心と東一坊大路心の交点)、同じく  $a_1 \cdot d_1$  と  $c_2 \cdot d_2$  の交点が D (三条条間南小路心と東二坊坊間西小路心の交点) となる。

三条大路については幅員を直接知りうる資料がないため、c d を結ぶ直線上で、

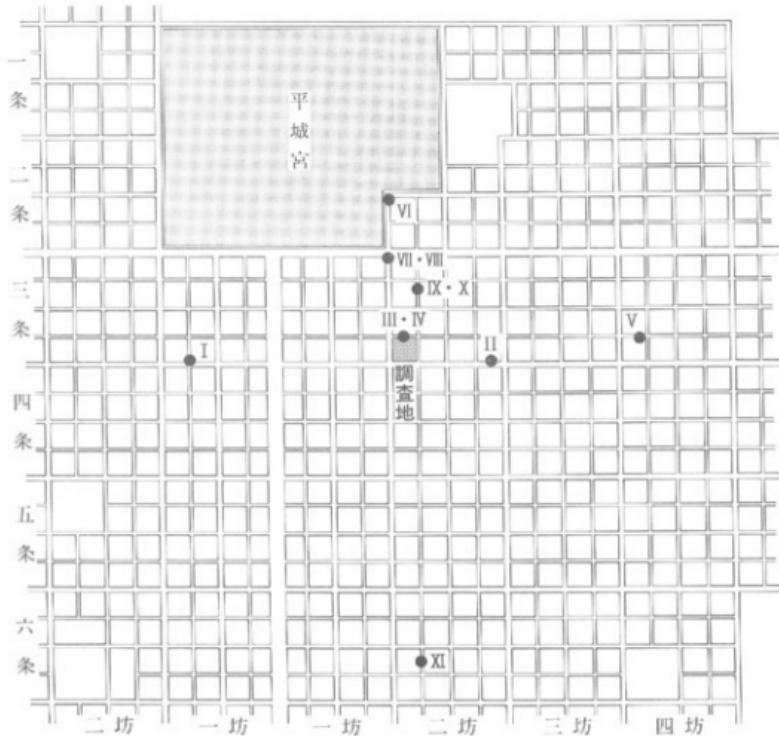


図46 関連条坊遺構調査位置図

三条条間南小路心  $c_1$  から南へ375大尺（133.2m、1尺 = 0.3552m）の位置に、三条大路路心  $c_2$  を推定した。したがって、三条大路の推定幅員（側溝心々間距離）は、この  $c_1 - c_2$  間の距離10.77mを2倍した21.54mとなる。次に、道路幅員は一定であるとの仮定に基づき、 $a_1 b_1$  を通る直線上で、 $b_1$  から南へ10.77mの位置に、もう1点の三条大路路心  $b_2$  を推定する。この  $b_1 c_1$  を結ぶ直線と、 $a_2 b_2$  を結ぶ直線の交点がB（三条大路心と東一坊大路心の交点）、同様に  $b_1 c_2 d_2$  の交点がC（三条大路心と東二坊坊間西小路心の交点）となる。

なお、三条大路幅員復原に際してDを基点としたのは、ここで交わる2本の道路のみが、当該坪の交差点の両側で検出されており、かつ道路幅員自体が狭く、

表9 関連条坊座標値一覧表

点	条坊道路	種別	X 座標	Y 座標	文献	座標値の典拠
I	三条大路	北側溝心	-146,545.30	-18,987.344	1	文献1
II			-146,537.165	-17,576.850	2	文献2
III			-146,416.877	-17,991.400	3	文献3
IV	三条条間南小路	南側溝心	-146,420.43	-17,991.40	3	実測図
V			-146,417.92	-16,879.00	4	文献9
VI	東一坊大路	東側溝心	-145,763.24	-18,043.13	5	実測図
VII			-146,039.54	-18,041.48	6	実測図
VIII			-146,031.77	-18,053.52	6	実測図
IX	東二坊坊間西小路	路心	-146,170.00	-17,919.75	7	実測図
X			-146,170.00	-17,923.45	7	実測図
XI			-147,940.000	-17,914.390	8	実測図

#### 文献

- 奈良国立文化財研究所「京三条一坊三条大路の調査（第123～2次）」（同『昭和55年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』）1981年
- 奈良県立橿原考古学研究所「平城京左京一条二坊十三坪」1975年
- 奈良国立文化財研究所「左京三条二坊三・四坪の調査（第174～10次）」（同『昭和61年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』）1987年
- 奈良国立文化財研究所「左京二条四坊四坪の調査（第151～18次）」（同『昭和58年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』）1984年
- 猪熊義勝・森 郁夫「第39次調査 東面南門推定地側」（『奈良国立文化財研究所年報1967』）1967年
- 石井則孝・三輪嘉六「第32次調査 宮城東南隅」（『奈良国立文化財研究所年報1966』）1966年
- 木中 真「道路と敷地」（奈良国立文化財研究所編『長屋王邸宅と木簡』吉川弘文館）1991年
- 森下恵介「平城京左京三条二坊二坪発掘調査報告」（奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和56年度』）1982年
- 西崎卓哉「平城京左京三条四坊十坪の調査」（奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和59年度』）1985年

路心位置に大きな狂いがないとみられることによる。そのためDの座標は、坪の四至のうちでは最も安定した数値であると考えられる。これに比べると東一坊大路は、調査例が今次調査区からかなり隔たった北側に限られる点で、復原の基礎資料としては精度的に及ばない。

以上により、左京三条二坊四坪の四至が算出されたわけだが、

坪の大きさは計画上375大尺（450小尺）と考えられるものの、道路の振れが一定しないため、A-B間133.65m・B-C間132.67m・C-D間133.19m・D-A間132.77mというように、各辺の長さは異なる（対辺側溝心々間距離では、a-b間119.29m・b-c間116.93m・c-d間118.88m・d-a間117.03m）。

また、この作業を通じて得られた三条大路の推定幅員21.54mは、60大尺（72小尺）ないし70小尺にあたると考えられる。前者の場合、1大尺=0.3590m（小尺に直すと0.2992m）、後者で1小尺=0.3077mという数値が算出される。なお、Cの有意性の検証として朱雀門心（X=-145,994.49、Y=-18,586.31）からの距離を算出すると、国土座標上で南北555.41m・東西668.51mという数値が得られる。

表10 左京三条二坊四坪周囲の復原座標値

点	X 座標	Y 座標	点	X 座標	Y 座標
A	-146,417.02	-18,051.26	a <sub>1</sub>	-146,416.99	-18,039.22
B	-146,550.67	-18,050.47	b <sub>1</sub>	-146,550.60	-18,038.43
C	-146,549.90	-17,917.80	c <sub>1</sub>	-146,549.92	-17,921.51
D	-146,416.71	-17,918.49	d <sub>1</sub>	-146,416.72	-17,922.19
a	-146,420.54	-18,039.20	a <sub>2</sub>	-146,420.57	-18,051.24
b	-146,539.83	-18,038.49	b <sub>2</sub>	-146,539.89	-18,050.53
c	-146,539.15	-17,921.56	c <sub>2</sub>	-146,539.13	-17,917.86
d	-146,420.27	-17,922.17	d <sub>2</sub>	-146,420.26	-17,918.47

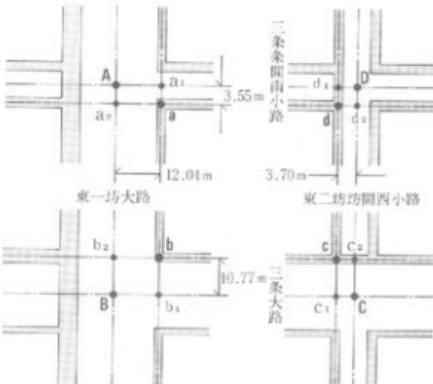


図47 坪周囲の交差点模式図

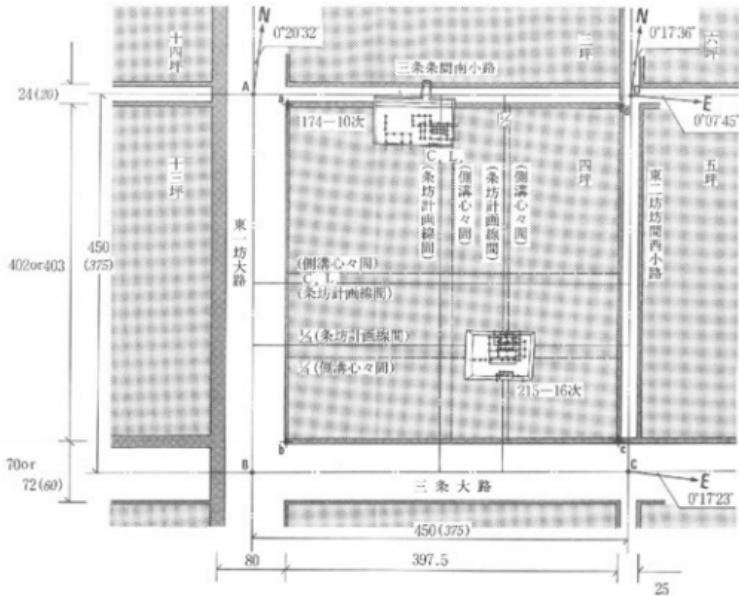


図48 条坊復原と占地概念図（1：2000）  
数字は尺（斜体は大尺）

これを朱雀大路の振れとして一般に用いられる  $0^{\circ} 15' 41''$  で造営計画上の距離に修正すると、南北  $558.45\text{m}$ ・東西  $665.97\text{m}$  となる。この数値を各々の造営計画  $1570\text{大尺}$ （1坊分  $1500\text{大尺}$ +朱雀門心と二条大路条坊計画線間の距離  $70\text{大尺}$ ）・ $1875\text{大尺}$ （1坊分  $1500\text{大尺}$ +1坪分  $375\text{大尺}$ ）で除すと、それぞれ  $0.3557\text{m}$ （小尺では  $0.2964\text{m}$ ）・ $0.3552\text{m}$ （同じく  $0.2960\text{m}$ ）という妥当な基準尺長が得られる。ちなみに条坊の振れを、朱雀大路ではなく、Cを通る2本の道路の振れ（三条大路  $0^{\circ} 17' 23''$ 、東二坊坊間西小路  $0^{\circ} 17' 36''$  とほぼ等しい）の平均値  $0^{\circ} 17' 30''$  とすると、造営計画上の距離は南北  $558.81\text{m}$ ・東西  $665.67\text{m}$  となる。これによって算出される基準尺長は、それぞれ  $0.3559\text{m}$ （小尺で  $0.2966\text{m}$ ）・ $0.3550\text{m}$ （同じく  $0.2958\text{m}$ ）である。

**建物の変遷** ここでは、遺構の先後関係・併存の可否から、建物の変遷について考えてみたい。まず柱穴の重複からは、SB04→SB03→SB01、SB02→SB01、SA09→SB03という先後関係を確認することができる。また平面的な重なりにより、SB01・SB02・SB03・SB04・SA09は、相互に併存したことはありえないし、SB01・SB02はSA07・SA08と併存しない。したがって、今次調査区内においては、少なくとも5時期の建築遺構が重複していることが知られる。実態の不明確なSA09を除外しても、4時期である。ここでSB01に先行するSB02が、SB04→SB03→SB01という流れのどこに位置づけられるかが問題となるが、SB04が南北棟、SB03がとくに柱間の狭いやや特異な平面形の建物であるのに対して、SB01・SB02は桁行10尺等間の3間×2間の東西棟という点で共通する。SB01は、東西方向に関してSB02を1間西へ寄せた形となっているが、ここでは建て替えの可能性も考慮して、SB02がSB01の直前に位置づけられるものと考えておきたい。なおSA07・SA08は、SB04ないしSB03に（あるいは両者に）伴うものとみられるから、これを宅地内区画として重視すれば、それが撤去されたSB02およびSB01の時期は、少なくともそれが存在した時期に比べて大規模な区画の改変があったことになる。

また坪内の位置関係でいうと、SB01は、その建物心が正しく条坊計画線間での東から三分の一・南から三分の一（小尺でそれぞれ150尺）の位置に置かれていることが注意される。これは、きわめて周到な配置計画をうかがわせるものといえよう。またSA07は、対辺側溝間心々距離における南から四分の一の位置にほぼ一致しており、またSA08は、その中軸線から東へ80小尺の位置にあたる。なおSA07・SA08は、その坪内の位置からみて、1町規模の宅地の中心部を限る場所であったと考えられる。一方、SB01も、坪内における位置関係と建物自体の規模を考えあわせると、1町規模の宅地に伴うものと見るのがふさわしい。したがって、これとほぼ位置的に重なる同格の建物SB02についても、同様の性格を想定することができよう。つまり、今回の調査成果による限り、左京三条二坊四坪の地は、奈良時代を通じて1坪全体を占める宅地であった可能性が高い。（小沢 裕）

調査地は、長屋王邸の所在地として有名となったそごう百貨店の東側、菰川の東に接する地である。左京三条二坊九坪の北西部に当たる。調査面積は約430m<sup>2</sup>。層序は、約80cmの盛り土の下に、耕作土、床土、灰褐色粘質土（厚さ約20cmの遺物包含層）、暗赤褐色粘質土（整地土）、黄褐色粘質土（地山）の順となる。遺構は、一部暗赤褐色粘質土上面から掘り込んでいるが、大部分は黄褐色粘質土上面で検出した。

**遺構** 挖立柱建物6棟、井戸1基、古墳時代の溝1条などを検出した。SB01～03の3棟は、一辺約50cmの不整形方の掘形を持つ掘立柱建物。SB02・03は桁行3間、梁間2間で方位を等しくする。SB04は、東に庇を持つ掘立柱南北棟建物。南北5間分を検出した。柱間は、桁行1.8m（6尺）、梁間2.4m（8尺）、庇の出3.0m（10尺）である。SB05・06は、1条の柱列を検出したのみであるが、柱掘形の規模などから、掘立柱建物になると考える。SB05の柱間は2.4m（8尺）等間。SB06は、東に庇のつく南北棟掘立柱建物と考えられ、庇と身舎の東側柱筋をSB04と揃える。SE07は、井戸枠を抜き取られた井戸。検出面から底まで2.0mを測る。SD08は、古墳時代の溝。幅約4.5m、深さ約40cmで、調査区内を一直線に流れ両端で屈曲する。布留式の土師器を大量に出土した。自然河川や用水路とは考えにくく、古墳の周濠の可能性も考慮される。

**遺物** 暗赤褐色粘質土やSE07から、奈良時代の土器が大量に出土した。SB04の東側柱筋を中心に部分的な整地土があり、「美濃国」刻印のある須恵器杯B蓋が出土した。瓦は、軒丸瓦7点、軒平瓦9点があり、6721Fの彫り直し6721Fbが新たに出土した。

（杉山 洋）

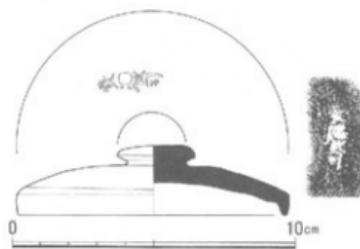


図49 「美濃国」刻印須恵器（1：2）



図50 軒平瓦6721Fb（1：4）

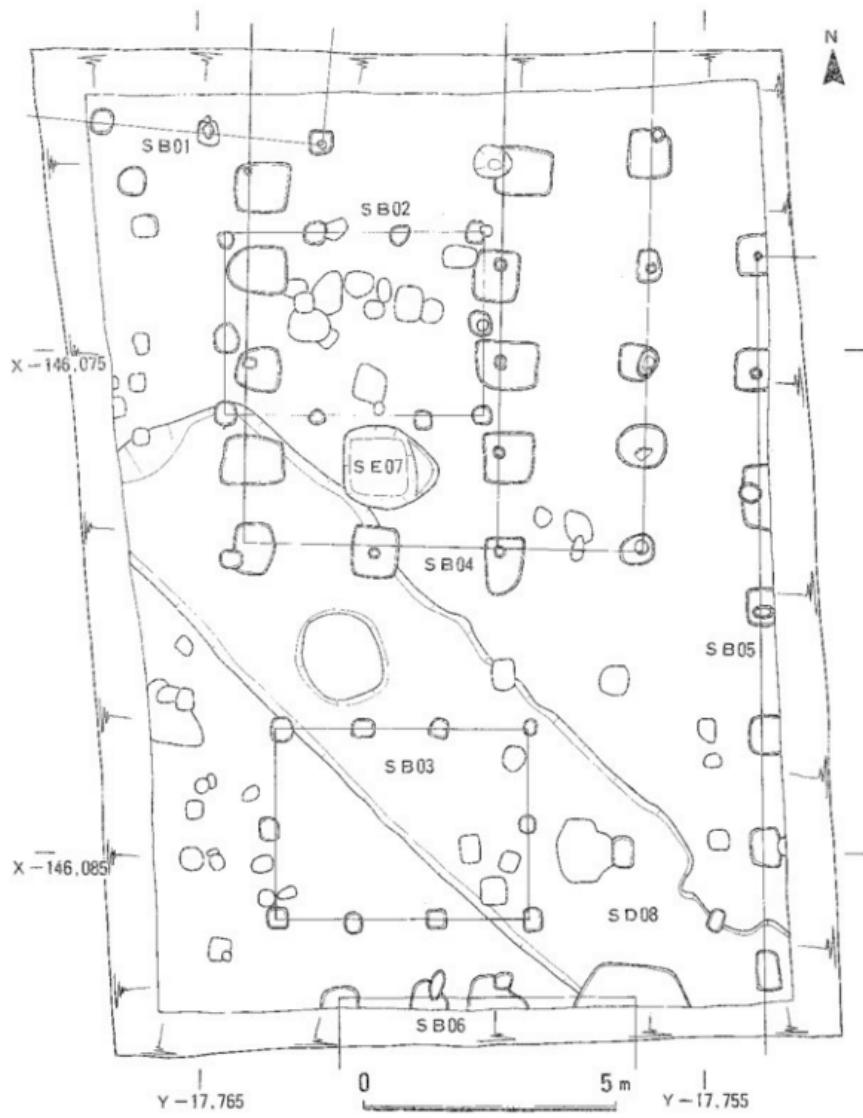


図51 第215-3次調査遺構図 (1 : 100)

## 6 西一坊大路の調査 第215—4次

店舗建設に伴う事前調査である。調査地は、奈良市二条大路南5丁目384-1、382-2にあり、阪奈道路と主要地方道奈良大和郡山斑鳩線との交差点に面する。調査は1990年7月7日から7月13日まで行なった。調査面積は142m<sup>2</sup>。

調査地は平城京西一坊大路にあたり、右京三条二坊二坪の東側、三条条間路に近い。基本的な土層は上から①盛土、②耕土、③暗灰色砂質土、④黄灰色砂質土（炭、鉄滓混じり）⑤黄灰褐色砂質土（瓦器片を含む）、⑥紫褐色粘土（地山）の順に堆積する。地表下約1mで地山に達する。また、調査区西端から東へ2mの間は灰色の砂層が広がり、調査区西端付近から西へは秋篠川旧流路の堆積土層があるらしい。

この調査では、奈良時代、12~13世紀頃、および12~13世紀より新しい時期に属する遺構を検出した。奈良時代の遺構としては、西一坊大路SF01とその東側溝SD02がある。東側溝は西肩のみを確認した。大路西側溝は調査区内では見つからず、大路の幅員などは確認できなかった。

12~13世紀頃の遺構には、細い南北溝13条と井戸1基（SE03）がある。井戸は井戸枠が抜き取られていた。これらは埋土中に12~13世紀頃の瓦器等を含んで



図52 第215-4次調査位置図 (1 : 2500)

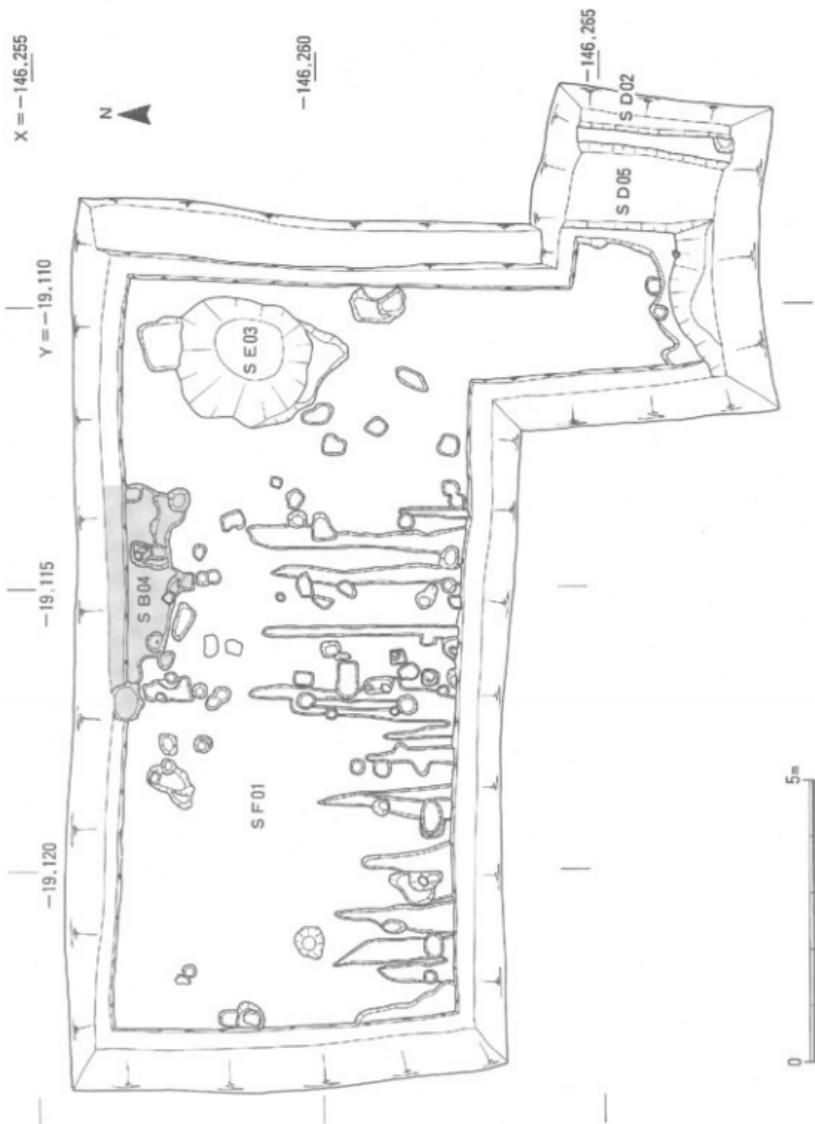


図53 第215-4次調査遺構図 (1 : 100)

いた。これらの南北溝や井戸の上層で、小穴群や竪穴状の建物跡SB04、南北溝SD05を検出した。竪穴状の建物は大部分が調査区外のため全体の構造は不明であるが、円形ないし方形に竪穴を掘り、周囲に柱を数本ないし10本前後めぐらせるものである。簡単な差しかけ小屋程度のものであろうが、内部から鉄滓が出土し、床面が比較的堅くしまっていた。また、西一坊大路東側溝に重なるようにして鉄滓を多量に含む南北溝SD05がある。

出土遺物には奈良時代の軒平瓦（671A）1点、丸・平瓦少量、瓦器少量、中世以降の軒丸瓦1点、<sup>ムイイ</sup>蘿羽口数点、鉄滓などがある。鉄滓は、底部の丸い、いわゆる椀形滓も出土しており、ほとんどが木炭を噛み込んでおり、すべて鍛冶滓と見てよい。

平城京西一坊大路に関しては、少なくとも東半部では旧秋篠川の氾濫による破壊を受けていないことがわかった。調査範囲が狭いために大路路面と東側溝の一部が見つかっただけで、大路の幅員や西側溝の位置などは確認できず、今後の課題として残る。また、今回検出した竪穴状の建物跡SB04などは、出土状況からみて小鍛冶工房に関連するものと推定できる。1989年度に実施した第202-3・4次調査では、近世ないし近代の小鍛冶工房に関連する遺構、遺物が見つかっている（『1989年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1990年）。今回の調査区はこの202-3・4次調査区に近接しており、層位から見てもふたつの小鍛冶工房の遺構は、同時操業とは言えないにしても、強く関連していると言えよう。いずれにしても、小鍛冶の遺跡がこの付近一帯に広がっていることはまちがいない。

（小池伸彦）

## 7 薬師寺講堂・北面回廊の調査 第218次

### 1 はじめに

薬師寺では1954年以来、数次にわたる調査を行なってきている。これまでに、金堂、西塔、中門、回廊、南大門、僧坊、食堂、十字廊、経蔵を発掘調査し、創建当初の薬師寺の中心伽藍の様相が明らかになっている。そのうち、1985年までの調査の成果は、奈文研『薬師寺発掘調査報告』1987年（以下、『薬師寺報告』と略称）としてまとめ、公刊している。今年度は、北面回廊の柱配置の確定と講堂の規模確定を主眼として、調査区を現在の講堂の東側に図54のごとく設定した。調査面積は700m<sup>2</sup>である。調査は1990年7月5日に開始し、8月25日に終了した。

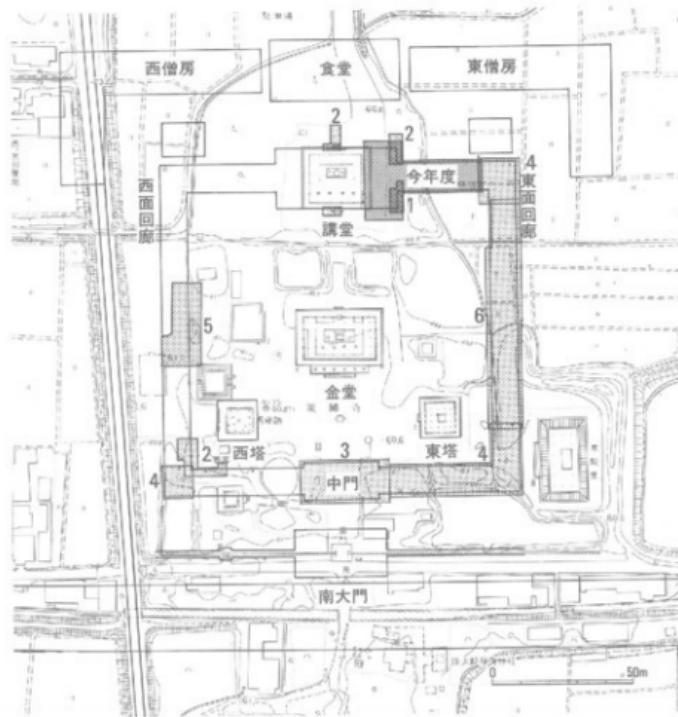


図54 第218次調査位置図 (1 : 2000)

講堂については1968・69年に調査を行ない（図54）、基壇規模が確定している。この調査では講堂基壇の東北隅、東南隅と北面中央部を検出しており、伽藍中軸線で折り返し、基壇は東西42.5m、南北22.2mと復原している。平面は桁行7間、梁間2間の身舎に庇、裳階が付き、身舎桁行中央5間を15尺、端間を12.5尺、身舎梁間柱間寸法を15尺とし、庇の出を12.5尺、裳階の出を6.25尺と推定している。なお、今回の調査区は1968・69年の調査区を含む形で設定した。

文献によると講堂は天禄4年（973）に火災のために焼失し、すぐに再建されたが、享禄元年（1528）には再び火災のため焼失した。その後講堂は長く再建されず、安政3年（1856）になって現在の講堂が再建されている。

回廊については、6次にわたる調査を行なっている。東北隅、東南隅、西南隅と東面回廊の全面、南面回廊の東半、西面回廊の一部を調査し（図54・表11）、以下の見解を得ている。

① 回廊は、当初、単廊で計画したが、礎石を据えた後に計画変更を行ない、同じ位置で複廊を造営している。単廊計画時の伽藍計画寸法は回廊心々間で、東西400尺、南北362.5尺である。複廊計画時の伽藍計画寸法は回廊心々間で、東西392尺、南北362.5尺である。

② 『薬師寺報告』では単廊の柱間寸法は桁行、梁間とも12.5尺であるとした。一方、『1989年度平城概報』では、東面回廊の桁行柱間寸法は、伽藍計画寸法の南北長を363尺と考え、363尺を29間で等間割した、12.52尺であるとしている。

表11 回廊調査一覧

区	年度	調査場所	文献
1	1968	東面回廊 北面回廊	1) 4)
2	1969	東面回廊 北面回廊	1) 4)
3	1982	南面回廊 中門	2) 4)
4	1985	東面回廊 西面回廊 南面回廊 北面回廊	3) 4)
5	1988	西面回廊	5)
6	1989	東面回廊	6)

- 1) 杉山信二・松下正司・阿部義平「薬師寺の最近の発掘調査」（『仏教芸術』74  
1970） 2) 奈文研「薬師寺中門の調査」  
（『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査報告』1983） 3) 奈文研「薬師寺回廊の調査」  
（『昭和59年度平城宮跡発掘調査部発掘調査報告』1985） 4) 『薬師寺発掘調査報告』（奈文研学報第45冊 1987） 5)  
奈文研「薬師寺西面回廊の調査」（『昭和63年度平城宮跡発掘調査部発掘調査報告』  
1989） 6) 奈文研「薬師寺東面回廊の調査」  
（『1989年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』）

なお、北面回廊に関して『薬師寺報告』では、柱間数を、講堂取り付き部とコーナーを含めて11間と推定している。

③ 複廊の梁間柱間寸法は10尺等間とする。桁行柱間寸法は基本的には13.5～13.7尺である。東面回廊では南北伽藍計画寸法を単廊計画時の長さを踏襲しているため、等間で割り付けることができず、3間分の柱間寸法を長くして調節している。南面回廊では桁行柱間寸法は13.5尺であるが、中門取り付き部分の2間は12尺とする。基壇は凝灰岩壇上積基壇とし、基壇幅は34尺である。

## 2 遺構

検出した遺構は北面向廊と講堂の東端部である。遺構面は全体に東が低く、西ほど遺構の残りがよい。とくに、発掘区中央付近（Y=19,475）より東は一段下がっており、削平が著しい。一方、講堂部分の遺構面は浅く、現代の整地土直下である。また、現在の講堂基壇東部で基壇化粧石をはずして調査を行なった結果、現基壇土内に当初の基壇土が残っていることが判明した。

講堂 講堂の遺構として、基壇地覆石、雨落溝、階段、身舎・庇・裳階の礎石据付掘形および抜取穴を検出し、北面では南北道路敷を検出した。

身舎・庇の礎石据付掘形は径約2mの隅丸方形で、一部には抜取穴がみられ、根石の残存する据付掘形もある。当初基壇土の残りの良い発掘区西北隅の掘形の断面を観察すると、礎石は基壇土構築の途中段階で据付掘形を掘って据え付け、その後、さらに基壇土を積んでいる状況がみられる。礎石据付掘形は根石据付位置より30cm～40cm深く掘り、上を充填しながら根石を据えている（図57）。裳階礎石据付掘形は、遺構面の最も残りのよい発掘区西北隅（現講堂基壇内北端）でのみ検出した。掘形は東西80cm、南北70cmと小さく、礎石は抜き取られているが掘形の底で根石を検出した。この掘形の底のレベルは身舎・庇の妻を検出した遺構面より高く、他の場所では削平されたと考えられる。なお、断面調査の結果、礎石据付掘形は一度しか掘られておらず、礎石を据え替えた痕跡はない。

柱間寸法は礎石が残っておらず正確には確定し得ないが、1尺を0.296mと仮定すると、身舎桁行方向柱間寸法を15尺等間、梁間方向を17尺等間、庇の出を10

尺ととることができる。裳階の出は、6尺、または6.5尺のいずれとも考え得るが、『薬師寺報告』で推定している6.25尺として考えておく。この成果を伽藍中軸線で折り返すと、桁行方向の不明部分は75尺となり、この部分は桁行5間、柱間寸法15尺等間となる。したがって、講堂の規模は桁行7間、梁間2間の身舎の四面に、出が10尺の庇が付き、さらに四面に裳階が付くと復原できる（図56）。

基壇に関しては、北面と南面で凝灰岩地覆石を検出しておき、講堂基壇化粧は凝灰岩壇上積であった。地覆石は幅32.5cm、厚さ34cmで、長さは50~90cmと一定していない。最も残りの良い地覆石をみると、地覆石上面に幅16.5cm、深さ1cm弱の溝があり、この溝に羽目石を立てたと考えられる（図55）。南面・北面の地覆石外面間の距離が22.5mであるので、基壇南北幅は76尺と復原でき、庇柱筋からの出は11尺となる。基壇東端は正確に確定し得ないが、雨落溝等の状況より、庇柱筋からの基壇の出が南・北面と同じ11尺と考えられる。したがって基壇東西規模は147尺と推定される。

南・北面では、身舎端間の正面に階段の痕跡を検出した。北面では石階耳石下の地覆石の一部を検出し、南面では石階前面の踏石の一部を検出した。階段の出は南面が1.1m、北面が0.7mである。階段の東端は身舎妻柱筋に揃うが西端は不明である。おそらく身舎妻柱筋より一筋西の柱筋に揃い、階段幅は15尺と推定される。なお基壇地覆石は階段位置にも通っており、基壇本体を築成後に階段を取り付けたと考えられる。

雨落溝は総体的に残りが悪く、溝として検出し得たのは北面回廊取付部の南入隅部のみである。溝幅は約60cmとし、西肩に部分的に凝灰岩の残欠があり、東肩は凝灰岩で化粧していたと考えられる。庇妻柱筋・雨落溝心間は約4.5m

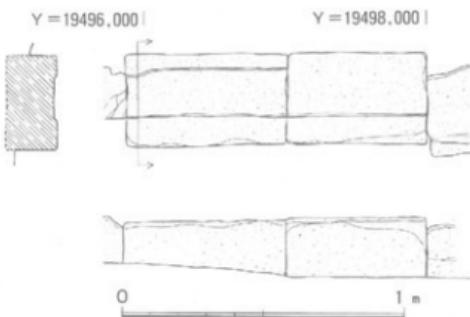


図55 講堂北面地覆石詳細図（1:20）

(15尺)と復原できる。また、北面では部分的に東西帯状に広がる小礫敷を検出した。北庇柱筋から小礫敷の心までは15尺となり、妻側の庇から東雨落溝までの距離と等しくなる。したがって、この小礫敷は北雨落溝の底に敷いた小礫と考えることができる。なお、南面に関しては階段が推定雨落溝位置より若干外に張り出しているが、この部分での処理方法は後世の削平のため不明であった。また、北面でも雨落溝が後述する南北石敷通路と交差するが、この位置に小礫敷がなく、また集水管設置による攪乱のため、新旧関係もしくは処理方法は不明であった。

**講堂北面石敷通路** 講堂の北面で、南北に延びる石敷造構を検出した。1969年の調査では、講堂北面中央で階段、および北方の食堂へ続く通路を検出しており、この造構も食堂へ続く通路と考えられる。石敷通路は北面の階段の正面に位置し、東西10尺幅に人頭大の川原石を敷きつめており、東・西端には見切り石のごとくに石が一列に並んでいる。造構の東端は北面の階段の東端、すなわち身舎の妻柱筋に揃う。しかし、西端は柱筋には揃わず、通路の中央と柱間の中央は揃わない。石敷通路の上面には、中古の整地土が覆っており、さらにその上層に焼土・炭化

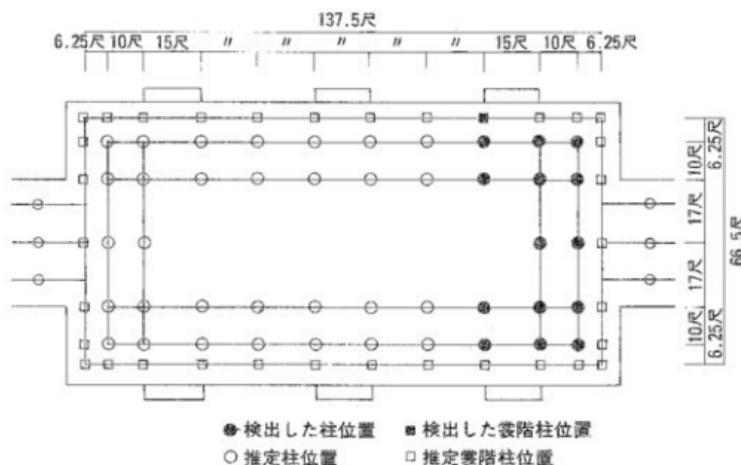


図56 講堂推定柱配置図

物層があった。焼土・炭化物層は享禄火災直後の投棄面、整地層は天禄再建時のものと考えられ、石敷通路は天禄再建後には使用されなかったと思われる。

**北面回廊** 北面回廊においても、単廊の礎石を据えた後に計画変更され、複廊を造営したことを確認した。図58中のY = -19,475より東側は前述のように削平が著しく、複廊、単廊双方の礎石据付掘形の痕跡がようやく残っている状況である。一方、西側は基壇土がある程度残存しており、単廊から複廊への計画変更時に単廊の礎石を抜いた後の積土に覆われているため、単廊の柱位置は検出できず、複廊の礎石据付掘形および抜取り穴のみを検出した。ただし、講堂取付部で部分的に掘り下げて、単廊の礎石据付掘形を一か所検出している。単廊の柱間寸法は桁行、梁間とも12.5尺である。『薬師寺報告』で推定しているように、裳階妻柱から東北隅入隅までの10間を12.5尺等間で割り付けている。複廊の柱間寸法は梁間10尺等間とし、桁行方向は東北隅入隅から西へ7間分は13.5尺とする。ただし、講堂取付部分の1間は、裳階妻柱筋から、その東の複廊の柱までは26尺とする。

基壇の遺構として、発掘区東端の南面・北面と講堂取付部の北面で凝灰岩地覆石を検出し、講堂取付部の南面と北面で玉石列を検出した。基壇幅は南北両面の地覆石が残っている発掘区東端では、南北約10.0m、すなわち34尺となるので、回廊側柱心からの基壇の出は7尺となる。地覆石は幅21cm、高さ21cmとし、長さもほぼ60cmに統一している。講堂取付部南面の玉石列は礎石を抜き取った外側に並べており、雨落溝の側石の二次的な改修と考えられる。また、北面の玉石列は、凝灰岩の外面に合わせて、平坦な面を上に向けて並べており、従来の見解通り当初雨落溝化粧が凝灰岩であるとすると、この石列は二次的な溝底石となる。なお、雨落溝化粧の外面は、南面・北面とも集水管が埋設されており調査不能であった。

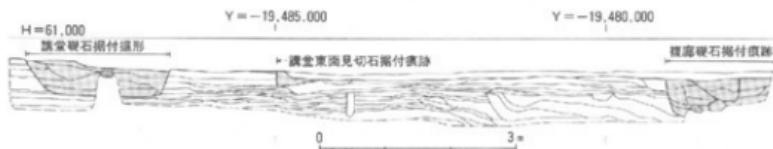


図57 講堂・回廊土層断面図

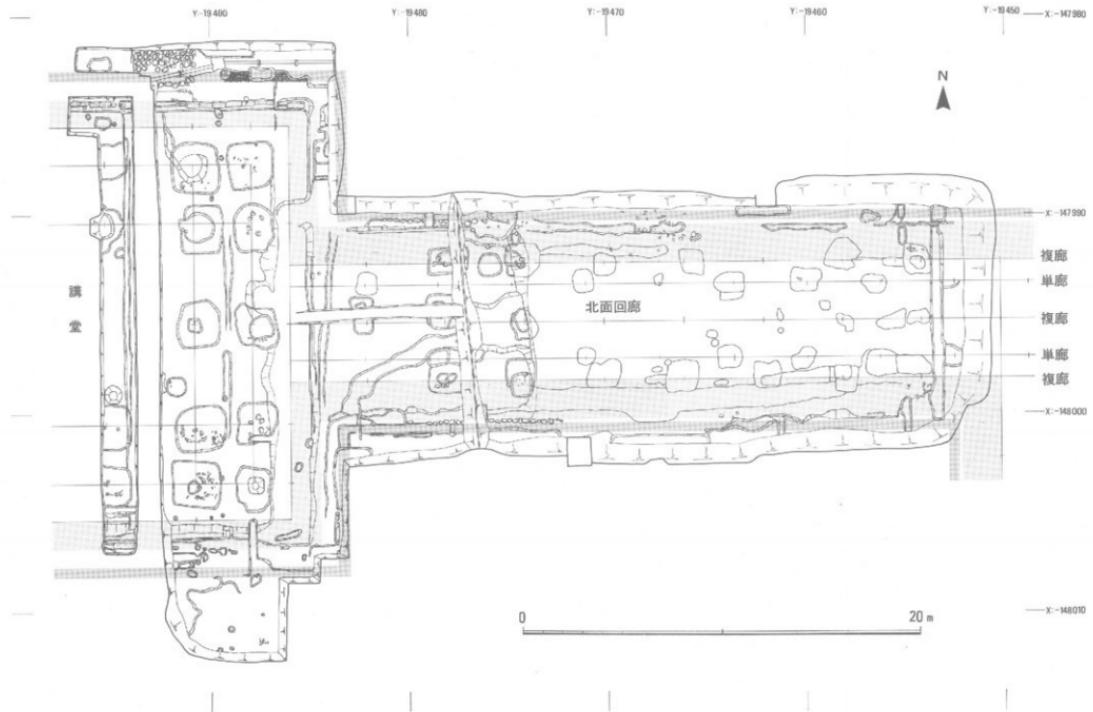


図58 第218次調査遺構図 (1 : 200)

**講堂・北面回廊取付部** 先述のように、複廊の柱間は講堂取付部で26尺と広い。南面回廊では、桁行柱間寸法は基本的に13.5尺であるが、中門取付部分では12尺を2間としており、北面回廊も講堂取付部では柱間寸法のやや狭い2間（13尺等間、または13.5尺と12.5尺）としたと考えられよう。しかし、この26尺の間には礎石を据えた痕跡は検出できなかった。複廊の礎石据付掘形の底は造構面から約60cmの深さにあり（図57）、26尺の間に礎石を据えたとすれば、なんらかの痕跡が残るはずである。これは、講堂から1間目の柱をやや高い位置に据えたために、その痕跡が削平されたためと考えることができる。つまり、講堂取付部では、講堂から2間目の柱筋から講堂に向かって基壇上面が上がり、回廊と講堂の基壇高の差を、この位置で基壇面をスロープ状にして処理していた可能性がある。

また、講堂基壇東妻位置に凝灰岩を南北に据えた痕跡を検出し、凝灰岩1個体を原位置で検出した。講堂東の見切りの位置にあたるが、その高さは回廊地覆石の高さとあまり変わらず、本来ならば基壇内に埋もれるレベルにあり、当初のものとは考え難い。したがって、二次的な仕事、つまり回廊基壇が崩壊した時期に、講堂東端の見切石として据えたものと推定できる。

### 3 遺 物

出土遺物のほとんどは、瓦塊類である。軒瓦は創建時の瓦が中心だが、講堂礎石据付掘形から小型軒丸瓦6307C 1個体がほぼ完形で出土した。この瓦の年代は、『薬師寺報告』では伽藍がほぼ整備された天平10年（738）以降としている。



図59 軒丸瓦6307C  
(1:4)

表12 第218次調査出土瓦集計表

軒 丸 瓦	軒 平 瓦		道 具 瓦		九 瓦	
	型 式	種 類	型 式	種 類	点 数	重 量 kg
6 1 3 5	A	1		G	9	551.30
				H	8	点数 3,741
6 2 7 6	E	1		I	1	
6 3 0 7	C	1	6 6 4 1	K	1	
型式不明		2		M	1	
平安時代		1 3		不明	2	平 瓦
平安末以降	3 8	6 6 6 3	F	1		重 量 kg 2,073.75
		型式不明		1		点数 20,073
		平安時代		1 9	文 字 瓦	種 別 不 明
		平安末以降		3 6	刻 印 瓦	重 量 kg 3.60
軒丸瓦計	8 4	軒平瓦計		8 1	点 数	点数 56

#### 4 まとめ

講堂の平面形式 講堂は四面庇にさらに裳階がつく形式で、身舎は桁行7間梁間2間、桁行柱間寸法は15尺等間、梁間柱間寸法は17尺等間である。庇の出は桁行、梁間方向ともに10尺とし、裳階の出は6.25尺である。したがって全体として裳階を含めると、桁行13丈7尺5寸、梁間6丈6尺5寸となり、裳階を含めないと桁行12丈5尺、梁間5丈4尺となる。『薬師寺縁起』には「重閣。七間四面 在裳階 高一丈三尺六寸。長十二丈六尺。廣五丈四尺五寸。」とあり、裳階を含めない平面規模は『薬師寺縁起』に記載された規模にはほぼ等しい。桁行方向の柱間寸法については、『薬師寺報告』にあるように全体を12.5尺の倍数として計画したとすれば、図56で示した柱間寸法で整合する。なお、梁間方向に関してはさきに示したように17尺と考えることもできるが、柱の中心が確定し得ないので、『薬師寺縁起』の梁間規模に合わせて身舎梁間寸法を17.25尺とも、『薬師寺報告』の推定規模にあわせて17.5尺と復原することも可能である。今後、講堂西側の調査によって、妻側の基壇端が正確に確定すれば、庇妻柱からの基壇の出を算出し、その数値を南面・北面（凝灰岩地覆石によって基壇端が確定している）にも適用して、梁間寸法を決定することが可能であるが、今回の調査のみでは梁間規模は確定し得ない。梁間規模はとりあえず上記のように推定し、正確な数値は講堂全面調査の後に確定することとしたい。

今回の調査成果から復原される講堂平面の全体規模は『薬師寺報告』の推定とほぼ等しい。しかし、『薬師寺報告』では庇の出を12.5尺と推定しているが、今回の調査によって庇の出は10尺であることが判明した。つまり、講堂は推定よりも身舎が大きく、庇の出が極端に狭い建物であった。このように、庇の出が身舎の柱間寸法に比べて極端に狭い例は奈良時代以前の建築様式であるとの指摘もあり、平城京の建物としては前時代的な様式とも考えられ、講堂が何故このような形式であったかが注目される。

階段の位置は、今回の調査で身舎端間の正面で検出することができ、1968年の調査では北面中央間でも検出しているので、6ヶ所に設けていたと復原できる。

**講堂の創建年代** 薬師寺の平城京における造営時期については不明な点が多いが、『扶桑略記』には東塔が天平2年（730）に建立された記事があり、ほぼこの頃には造営が終了していたと考えられている。また、天平7年（735）には大般若経の転読が行なわれており、この頃には伽藍は整っていたと考えられる。しかし、今回の発掘調査では講堂の礎石据付掘形から軒丸瓦6307Cが出土し、『薬師寺報告』の瓦編年従うと、講堂は天平10年以降に造営を始めたことになり、その完成はさらに数年後となる。また、基壇土の構築状況（図57）から、講堂と回廊は同時に基壇が築成されたと考えられ、回廊の完成も下がる可能性がある。瓦編年に従い講堂の完成時期を恭仁京遷都以降の時期と考えるのか、それとも瓦編年を再考すべきかは今後の検討課題である。

**講堂の沿革** 史料によると講堂は創建後、天祿4年（973）に火災のために焼失したがすぐに再建され、享禄元年（1528）に再び火災のため焼失する。その後講堂は再建されず安政3年（1856）になって現在の講堂が再建される。今回の調査では、講堂の礎石据付掘形は各柱位置に一つしかなく、礎石を据え替えた痕跡はなかった。したがって、天祿4年焼失後の再建講堂は、当初の礎石上に再建されたと考えられる。なお、現在の講堂は当初規模の梁間規模をほぼ踏襲しているものの、桁行規模は大幅に縮小しており、基壇は当初の基壇土の東西部分を削り、基壇上を積みたしている。

**北面回廊** 本年度の調査においても、回廊が単廊から複廊へ計画変更されていることを確認した。単廊に関しては、『薬師寺報告』で推定しているように、桁行柱間数は11間で、桁行・梁間とも12.5尺等間であった。

複廊の柱間寸法は13.5尺、梁間10尺等間とし、講堂取付部の2間を13尺等間もしくは13.5尺と12.5尺としている。そして、講堂と回廊の基壇高の差は、取付部分の2間の間でスロープ状に処理していたと推定される。 (島田敏男)

### 1 はじめに

本調査は、百貨店の増床計画に伴う事前調査として計画した、4次にわたる調査の第3次目に当たる。昨年度の調査では、西隆寺東面回廊の規模を明らかにすると共に、寺域の東北隅を確認し、西隆寺建立以前の遺構をも検出している（平城宮第209・210次調査）。今回は、回廊東北隅の検出を主目的に、第209次調査区の北に接する地に約600m<sup>2</sup>の調査区を設定した。調査区南半部は、耕作土上面で北半部より約50cm下がっており、この地下げのため遺構の残りは悪い。北半部では、百貨店建設工事に伴う擾乱が著しく、回廊SC01東側の土坑のほとんどは擾乱坑である。北半部では、深さ約40cmの旧床土下の黄褐粘土が遺構検出面となる。南半部には、北西から南東にかけて奈良時代以前の自然河川の流路があり、この部分の遺構検出面は、灰色粗砂である。

### 2 検出した遺構

西隆寺の回廊東北隅および雨落溝、掘立柱建物1棟、掘立柱塀3条、溝3条、井戸1基、土坑、および土器埋納遺構などである。これは、縄文時代、古墳時代、奈良時代に分けられる。以下、時期ごとに記述を行なう。

**奈良時代の遺構** SC01は西隆寺回廊の東北隅である。遺構の残りは悪く、礎石据付掘形の底が深さ約20cm前後でかろうじて残るにすぎない。基壇化粧は、その痕跡も検出できなかった。SD11は、東面回廊の東雨落溝。奈良時代の遺構面が西南隅に部分的にしか残っていないため、南北5mほどを検出したのみである。SX12は、東面回廊を横断する暗渠の東端部である。



図60 第212・219・221次調査位置図



図61 第212次調査追補図 (1 : 200)



図62 土器埋納遺構実測図（1:20）

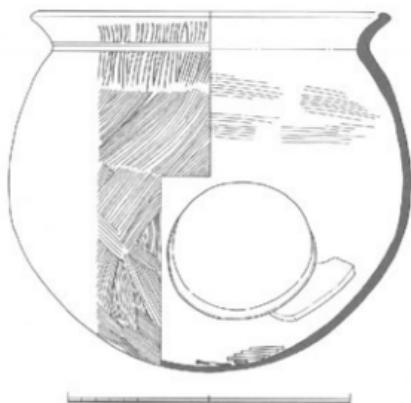


図63 銭貨の埋納状況（1:4）

SD03と04は、東西方向の素掘溝。SD04は北肩のみが残る。SD03の心からSD04の北肩まで約6mを測り、西隆寺造営以前の右京一条二坊九・十坪の坪境小路の可能性が考えられる。

SA06・07は当初掘立柱建物と考えたが、方位を異にし、掘立柱塀と考える。SE08は小型の浅い井戸。横板組井戸枠一段の中に、平瓦を円形に並べ、中に刳りもの桶を置き水溜とする。

**土器埋納遺構**　回廊SC01東北隅中央の礎石据付掘形の底から、土師器壺Aが正位の状態で出土した（図62）。内部には土が充満していたが、慎重に内部の土を除去したところ、壺の底部で銅銭5枚と付着した布片、土師器皿C1個体、土師器壺の大破片3個を検出した（図63）。銅銭は、和同開珎、萬年通宝、神功開宝各1枚、錢文不明銭2枚である。

当初の埋納状態を復原すると、壺の内部に布に包んだ銅銭を置き、その上に土師器皿Cをかぶせ、土師器壺破片で蓋をしていたものと推定される。出土状況から判断して、これは回廊建立に当たって礎石据付掘形底部に置いたもので、その上に礎石を据えたと考えられる。

**古墳時代の遺構** SA09とSB10は、柱穴掘形から古墳時代の須恵器が出土した。方位も東西方向から振れているので、古墳時代のものであろう。

**縄文時代の遺構** 調査区北端の溝SD02は、北東から南西にかけての直線的な斜行溝で、埋上の底近くから縄文時代晩期の船橋式土器が出土した。溝の断面形態は逆台形で、弥生時代の同様の形態の溝（たとえば京都大学教養部構内A P 22区の溝。京都大学埋蔵文化財調査研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』1984年 9・10頁）の例からみて、人為的に掘削した溝である可能性が高い。

### 3 遺 物

**奈良時代の遺物** 今回の調査区内には整地土や包含層がなく、出土遺物の量は少ない。軒瓦は、軒丸瓦3点、軒平瓦5点が出土したのみである。井戸SE08からは、水溜め外側に使用していた平瓦が12枚出土した。半裁したものが多い。

土器の出土は、きわめて少ない。楕円形の浅い土坑SK05からは、須恵器横瓶2個体、壺L2個体、壺K1個体が出土した。いずれも内面に漆が付着する。

金属器は、銅鏡7枚が出土した。そのうち5枚は、上器埋納遺構からの出土。ほかに、井戸SE08から和同開珎が2枚出土した。

**古墳時代の遺物** 6世紀中頃の土器が出土したが、いずれも小片である。

**縄文時代の遺物** SD02から、突帯文土器の深鉢1個体が出土した。口縁部から胴部にかけての破片で、全周の約四分の一ほどが残る。口縁端部からやや下がった位置に1条、胴部に1条の計2条の突帯を施し、突带上に範状工具でD字形の



図64 突帯文土器実測図(1:6)

刻み目を入れる。口唇部に刻み目は入れない。外面は、2条の突帯間は、巻貝条痕を行なった上になでによる調整、胴部の突帯以下は不調製で、粘土紐の継目が残る。内面は巻貝条痕で調整。色調は暗褐色で、胎土に角閃石は含まない。晩期末葉の、船橋式土器である。

#### 4まとめ

今回の調査では、回廊の東北隅を検出した。これによって、東面回廊の規模が推定されるとともに北面回廊の位置が明らかになった。なお、北面回廊は西接する第221次調査でも確認した。

また、土器埋納遺構を検出したことにより、回廊建立に伴ってなんらかの祭ごとが存在したことが推定できる。本土器埋納遺構は、III-2に掲載したように、土師器甕内の銭貨周辺の土壤の脂肪酸分析の結果では胞衣壺と推定されている。しかし、出土状況等からみて、本土器埋納遺構は西隆寺建立時のもので、回廊建立に伴って埋納されたものであることは明らかであり、地鎮具と推定している。その性格については、脂肪酸分析の結果の理解も含めて、将来の本報告作成時に、慎重に検討しなければならない。（杉山 洋）

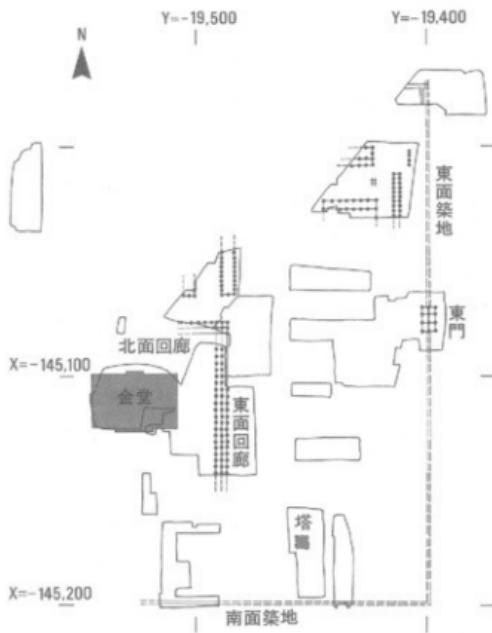


図65 これまでに検出した西隆寺の遺構（1:2500）

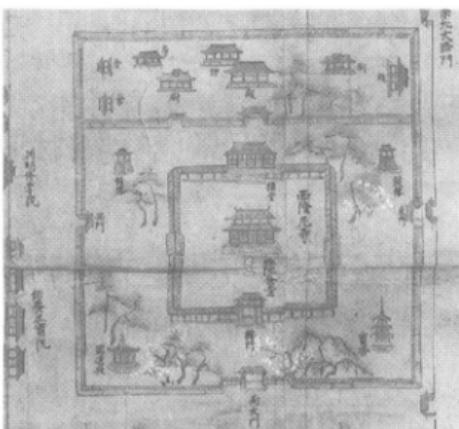


図66 西大寺御藍絵図に描かれた西隆寺

第209次調査以来行なってきた、百貨店改築に伴う事前調査の最終区である。調査は、1990年11月16日に開始し、一時中断を経て1991年3月29日に終了した。調査面積は、1030m<sup>2</sup>である。

調査地は平城京右京一条二坊九坪にあたり、西隆寺寺地としては東北隅部分になる。調査区は2軒分の宅地及び道路敷であったところで、その下水施設などによって部分的に深く掘削を受けた箇所があるが、おおむね遺跡の保存状況は良く、古墳時代から平安時代にまで及ぶ、相当数の遺構を検出することができた。奈良時代以降の遺構は、主として旧耕土・床土直下の古墳時代遺物包含層、及び調査区内を北から南東に通る旧流路の砂層上で検出した。

### 1 遺構

**古墳時代** 調査区の南西から東北方向へ、幅3.2m、深さ0.4mの斜行大溝SD09が通り、埋土に多量の土器を含む。土器の年代は6世紀で、良好な資料がある。この溝に平行、あるいはほぼ直交する斜行溝があり、これも同時期のものであろう。また、周辺の小穴群も、この時期に属する遺構となる可能性が高い。

**奈良時代前半（A期）** 挖立柱建物2棟と、掘立柱塀1条がこの時期に属する。調査区東南の建物SB06は、南北棟で、桁行5間、2.65m（9尺）等間。梁間も2.65m（9尺）2間である。柱掘形は一辺1~1.2mのやや南北に長い長方形を呈し、深さは遺構検出面から35~50cmである。柱痕跡は直径25cm前後あり、東側柱はB期の長廊状遺構SC05と多く重複する。

調査区西方の建物SB10は、東西棟で、桁行4間以上、西半は発掘区外に延びる。柱間は桁行2.65m（9尺）等間、梁間2.65m（9尺）2間であり、柱筋は方眼方位より北で西へ2度弱振れる。柱掘形は一辺約1mの略方形を呈し、深さは60cm前後である。いずれの柱穴にも明瞭な抜取り穴が認められ、その中に黄色土が混入しているのが一つの特徴である。これは、SB06にも認められることから、SB06・10は同時期と推定した。

SB10の東北方の南北塀SA13も、柱筋が同傾向の振れをもつ。SB06の北約4.2mをへだてて始まり、発掘区内では2間分を検出し、さらに北へ続くと推定される。柱間は2.7m（9尺）等間である。以上、この時期に属する遺構は、いずれも9尺の柱間を持つことで一致した結果となった。年代は、次期との関係から、西隆寺造営以前の奈良時代前半～中ごろにあてる。所用の遺構の特定はできないものの、後述の井戸SE08の廃絶時に投入された瓦に奈良時代前半のものがおり、西隆寺以前の遺構の存在を推定し得よう。

**奈良時代後半・平安時代（B期）** 西隆寺の造営と時を同じくして成り、同寺北東部に一院を形成していたと推定される遺構群である。発掘区東方の長廊状遺構SC05は、礎石建ちで梁間2.7m（9尺）、発掘区の南端から北に9間分を検出した。桁行の柱間寸法は1.9m等間で尺の完数値にはならず、6尺5寸と推定し得るほか、ある距離を等分した結果とも考えられる。遺構の形状、深さ共に一定せず、礎石据付掘形と抜取り穴を混合して検出したものと考えられる。9間目以北については、その場所が旧流路にあたり検出が困難であったこともある、より長く延びていた廊であった可能性も否定し得ない。また一方で、検出遺構通りに完結した、梁間1間の住房のような建物となることも考えられる。もし単廊ということが今後の調査で確定をみれば、院の施設として重要な知見となる。

調査区の南端の東西棟建物SB07A・Bは桁行7間の建物で、北側および北入側柱を検出した。当初掘立柱の建物（A）を、同規模、同位置に礎石建ち（B）に改めている。桁行の柱間は2.95m（10尺）等間、庇の出も10尺である。身舎妻柱は東側のみが発掘区内にあるが、柱穴は他に比してきわめて浅く、遺構として疑問が残る。当初の柱掘形は一辺0.9～1.2mの略方形で、柱痕跡は径30cm。柱を抜き取った後に根石を置き、礎石を据えている。このような手法の実例として法隆寺伝法堂があり、一般的な住宅建築というより

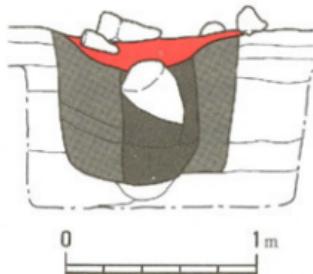


図67 SB10柱穴断面図（1:30）



図68 第219次調査構造図 (1 : 200)

むしろ仏堂的性格の濃いものと考えられる。これは、長期の存続のあかしであり、その規模からも院の中心的な建物と推定される。調査区北西のSB12は、桁行3間以上、東西棟南片庇付の掘立柱建物である。柱間は、桁行・梁間共に2.65m(9尺)等間であり、柱間10尺のSB07とは柱筋が一致しないが、仮にこれも桁行7間と仮定すると、建物の東西中軸線が一致する関係にある。また、両者の妻柱間の距離が26.7m(90尺)となることにも計画性が認められ、同時期と推定した。

SB07・12の東辺中間にある井戸SE08A・Bは、当初横板の、いわゆるせいろ組と呼ばれる上質の構造であったもの(A)を、ある時期に内側に縦板を添え立てて改修している(B)。深さは2.4m。SE08Bの井戸枠に用いられた板材は、四面とも扉板の転用であることが判明し、西隆寺の建築の様相をうかがうに足る貴重な資料となった。また、調査区西端で、SB07の東西中軸線に対してSE08と東西対称の位置に、井戸とおぼしき深い掘形の一部SX15を検出しており、2棟の建物の間の広場に2基の井戸を東西対称に配している可能性が生じた。

B期の終末は、建物の柱抜取り穴や井戸SE08の埋土から出土した土器の年代から、10世紀後半と考えられる。史料から知られる西隆寺の存続とほぼ時を同じくすることがわかり、およそ2世紀にわたって存続したと推定されるのである。

なお、調査区西南隅にSB14があり、現段階では桁行5間以上、南北棟掘立柱建物の東南部分と推定している。柱掘形はSB07・10の双方と重複し、時期的に

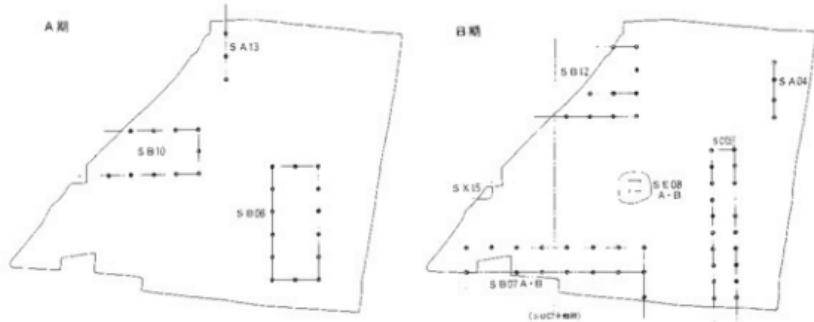


図69 遺構変遷図

はその中間の位置となる。しかしながら、発掘区の制約からこの遺構の解釈はまだ確定的ではなく、複数の遺構である可能性もあり、具体的な規模、性格については今後の調査の進展を待ちたい。この他に、発掘区の東辺に近世以降の大土坑SK01、時期不明で旧流路を横断するように幅1m、長さ8.3mにわたってある土坑SK02、4本の柱からなる小構造物SX03などがあり、また北東隅には3間の掘立柱構SA04がある。SA04の掘形の一つには柱根が残り、また掘形に重複する土坑からは西隆寺式軒平瓦2枚が出土した。

## 2 遺 物

遺物は瓦塼類、土器が主であるが、井戸SE08から若干の木製品および延喜通宝が出土した。遺構の項でも述べたように、SE08Bの井戸枠は扉板の転用であつて、木製品として出色的の資料であるので、項を設けて詳述する。（松本修自）

**土 器** 古墳時代から平安時代までの土器が出土した。ここでは、10世紀後半の良好な一括資料である、井戸SE08出土土器（図70）について述べる。

SE08Bの井戸枠抜取穴、井戸底、掘形から整理箱3箱ほどの土器類が出土した。掘形には遺物は少ないが、9世紀後半代の綠釉陶器片が出土し、井戸の上限を物語る。抜取穴と井戸底の土器類は、ほぼ同型式で、土師器の小皿（1～6）、杯（7）、鉢釜（18～21）、黒色土器A類の椀（8～17）と、他に黒色土器B類の椀2個体分の破片がある。土師器の杯と皿は、すべて手作による調整で2群に分かれる。I群（1～4）は、砂を多く含み、暗灰褐色を呈し、II群（5～7）は、緻密で砂をほとんど含まない胎で淡灰色を呈し、極めて薄く作られている。

黒色土器A類の椀は、口縁部外面上端のみをよこなでし、以下の部位は調整しないものが大半を占めるが、15だけは口縁部上端部に笠削り調整を施す。内面の鏡磨きは難で、口縁部の磨きを省略する例（14）もある。同様に、外面の磨きも難で磨かないものもある。16・17は、底部外面に墨書きがあるが、判読できない。

井戸底からは、延喜通宝も出土しているが、これらの土器類は、錢貨の年代よりも新しく、天禄4年（973）の火災で焼失した薬師寺西僧坊床面土器よりやや新しい時期に位置付けられよう。（巽淳一郎）

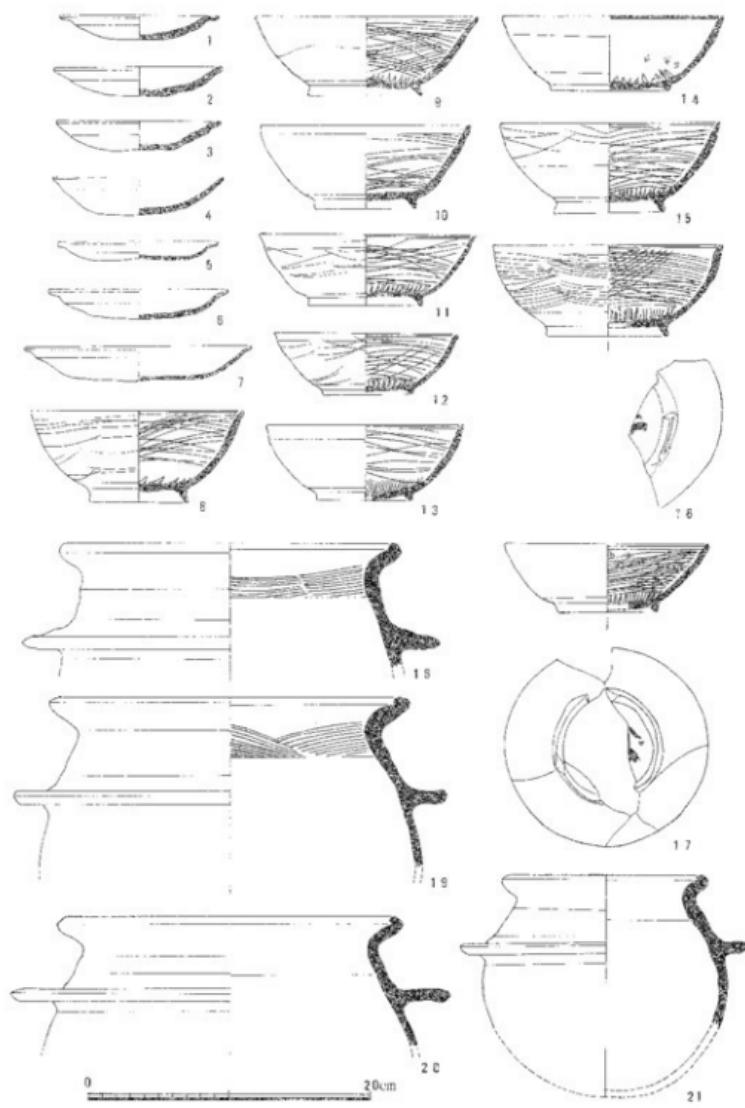


圖70 SE06出土十器 (1 : 4)

**扉板** 井戸SE08Bの井戸枠に転用していたもの。材の上半は腐朽していたが、下半ではいずれも当初の幅を完存していた。各材は、片側を丸く仕上げ、下端に造り出しの軸を残す。幅の寸法からA～C材とD材の2種に分類できる。D材のみは他と細部手法も異なり、別の建物か違う部位に用いていたものと推定される。各材の所見を述べると、まずA・B材は同一規格で厚さ7cm弱の一枚板から成る。ただしA材は軸部分を破損したとみえ、その部分を切り取って後補している。木口に埋め込みの端喰をもつのは法隆寺五重塔所用の扉と同等の手法で、貴重な実例を加えた。C材はA・B材と同幅であるが、ほぼ同一寸法の4枚の板を本実矧<sup>ほんじまこと</sup>で接合し、一枚の扉板に仕立てている。D材はやや幅がせまく、2枚の板をC材と同様に本実矧<sup>ほんじまこと</sup>で接合し、横棟<sup>よこむね</sup>と八双金物の釘跡を共に残す点も他と異なる大きな特色であるが、端喰はない。総幅889mmは3尺、2枚の板幅はそれぞれ2尺と1尺、また横棟の間隔も2尺に復原され、きわめて規格的な造りであることも注目に値する。八双金物の形状は、法隆寺東院夢殿の旧扉金具や、唐招提寺金堂所用のものに類似した、おだやかな出八双に復原されるが、およそ扉板の半分にも及ぶ長さをもつ点は常識を覆すものであり、当代に扉の意匠として八双金物が活用されたことがうかがわれる。また、これらの扉板の他に、中方立とも呼ぶべき材の断片が出土しており、古代の扉口の工法の一例として貴重である。

今回の発見は、井戸への転用材として平城宮内外を通じて初めての例である。法隆寺金堂、五重塔所用のものと、その規模や端喰の技法が一致し、一枚板のものとして年代的にもそれらに次ぐ古さをもつこと、さらに複数の材を集成する手法や、八双金物、横棟など細部技法の知見も得ることができたことの意義は大きいといえよう。また、その規模と意匠から、西隆寺内の堂に用いていたものであろうことはほぼ確実であり、往時の伽藍を偲ぶよすがともいうべきものである。

表13 SE08出土扉板計測表

部材	位置	構成 材数	残存長(m/m)	総幅(m/m)	軸	横棟	端喰	八双 金物
A	北	1	1,780	995 (欠)	×	○	×	×
B	東	1	1,596	990	○	×	○	×
C	南	4	1,497	993 (欠)	○	○	×	×
D	西	2	1,475	889	○	○	×	○

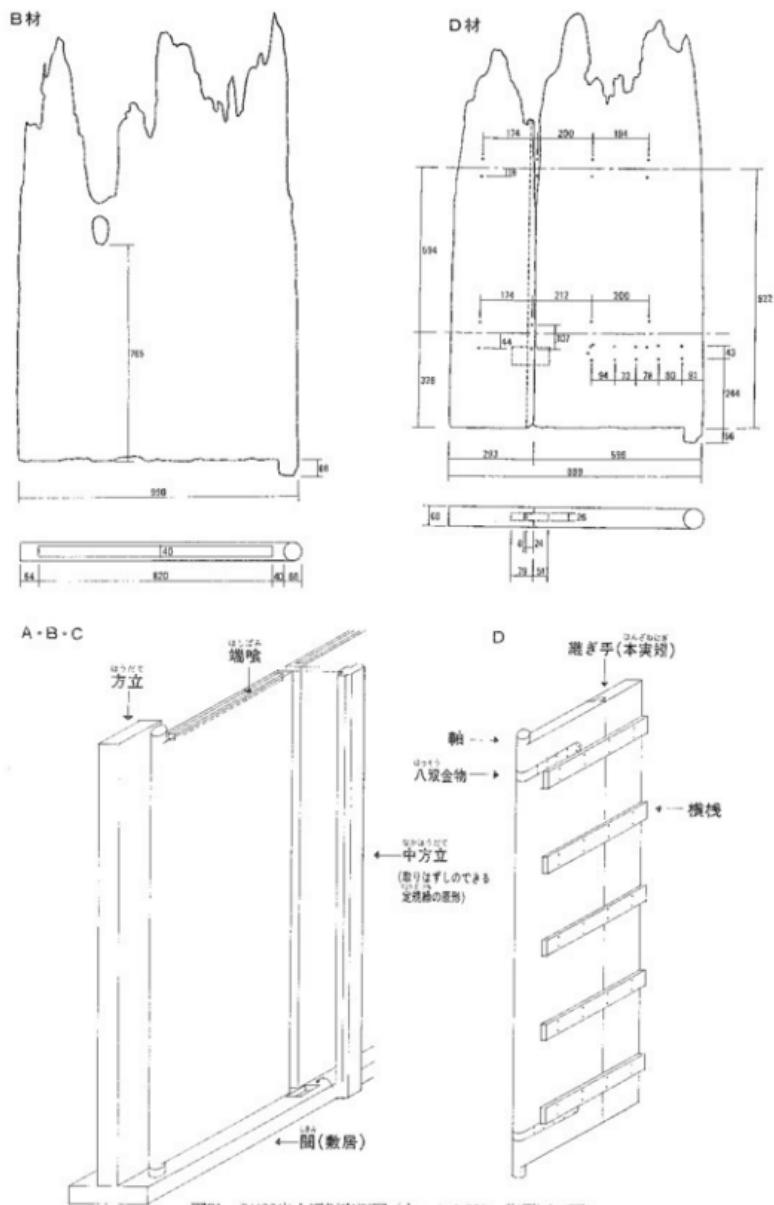


表14 第219次調査出土瓦集計表

軒 瓦 類 別 式			軒 瓦 類 別 式			軒 瓦 類 別 式		
件	点	数	件	点	数	件	点	数
6125	A	1	6652		2			
6134	A	1				A	8	1
6225	A	4	6663			F	1	1
	B	1				不明	1	
6235	C	11	6685	C	1			
	D	2	6691	D	1			
6236	F	1	6702	B	1			
	不明	1	6732	K	1			
6273	B	1	6739	A	2			
6275	D	1	6764	A	5			
6291	A	1	6775	A	1			
6311	F	1	型式不明		1			
6348	A	2						
型式不明		5						
軒丸瓦計		34	軒平瓦計		35			
						平 瓦		
						重kg	923.41	
						点数	6,733	

瓦導類 軒瓦はほとんどが井戸SE08の廃絶時に投入されたもので、表14のように西降寺所用の軒丸瓦6235と軒平瓦6761が最も多数を占める。軒丸瓦6225と軒平瓦6663がこれに次いで多いのは注目されよう。また、長廊状造構SC05の西辺の南北溝および北東の東西溝には瓦片が非常に多く、SC05が瓦葺であったことをうかがわせる。

### 3まとめ

今回の第219次調査と周辺の調査の結果から、以下のことが指摘できる。

- (1) 磁石建物をはじめとする、西隆寺の一院を形成していたとみられる建物群を検出した。これは、中世以降の西隆寺絵図には明確な形で対比できるものは描かれていない。同様の建物は第221次調査でも検出しており、伽藍の中核部分以外は絵図が必ずしも正確な姿を伝えていないのではないか、という問題が生じた。
- (2) 井戸SE08の廃絶年代から、西隆寺関係の遺構の終末が10世紀後半と考えられることが判明した。これは、文献史料による知見とも一致する。
- (3) 西隆寺造営以前にさかのぼる、右京一条二坊九坪の宅地の遺構を検出した。周辺の調査ではこの時期の遺構はこれまで検出しておらず、平城京の宅地を考える上で、貴重な知見となる。
- (4) 井戸SE08から豊富な遺物が出土した。特に、井戸枠に転用していた扉板は、西隆寺の建物が現存しない今では、当時の建築を知るために重要なものである。また、土器は10世紀後半のもので、類例の少ない当代の資料に貴重な実例を加え、編年を行なう際に重要である。

(松本修自)

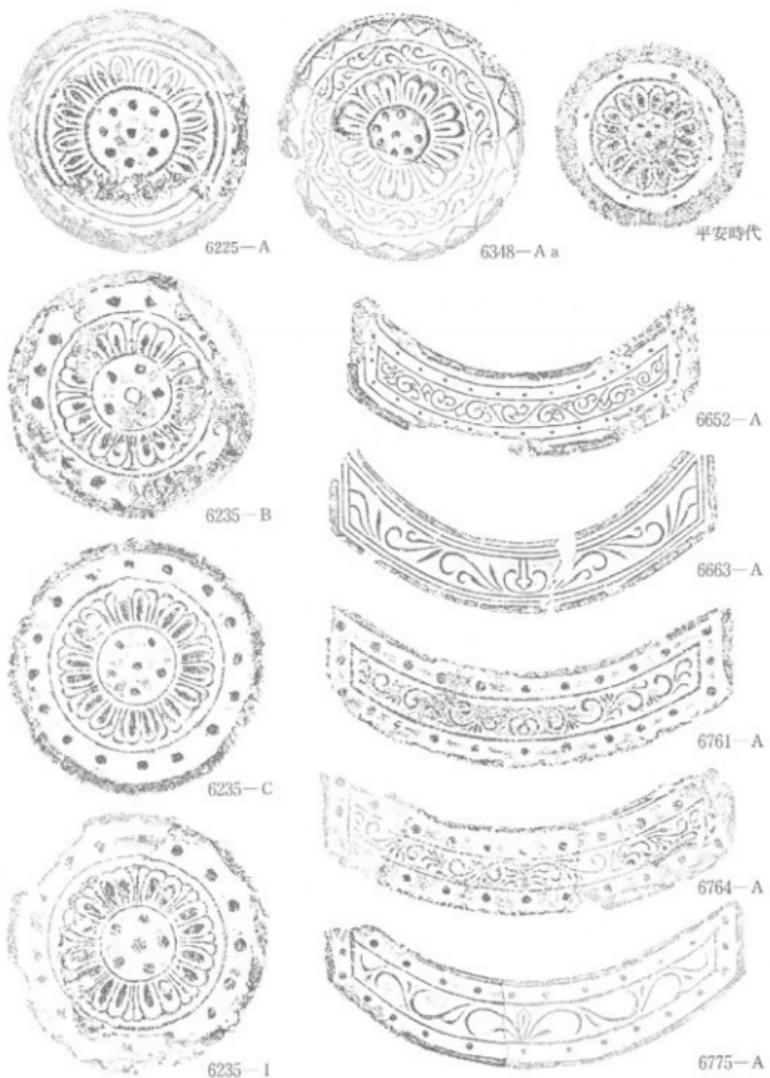


図72 第219・221次調査出土軒瓦（1：4）

### 1 はじめに

本調査は、奈良市都市計画道路予定地の事前調査である。調査は、1991年1月22日に開始し、同年3月14日に終了した。調査区の所在は奈良市西大寺東町で、平城京条坊では右京一条二坊九坪西南部にある。また、奈良時代後半に造営された西隆寺の伽藍中心部付近でもある。これまでに行なわれてきた西隆寺関係発掘調査の結果及び西大寺伽藍絵図（元禄11年・1698に、宝亀11年・780の絵図流記を模写したと伝える）から、金堂を取り囲んで巡る回廊の北側部分（北面回廊）と講堂の一部の検出が予想された。調査の結果、調査区南部で北面回廊の北側の柱列を検出したが、講堂に関する遺構は検出できなかった。また、調査区北部では西隆寺に伴うと考えるのが妥当とみられる掘立柱建物等を検出した。さらに、調査区西南部で平安時代初頭とみられる井戸を検出したが、この井戸の存在は西隆寺伽藍中心部であるだけに、寺の盛衰を考えるうえでの重要な手がかりを提供したと言えよう。

### 2 遺構

検出した遺構は、北面回廊、掘立柱建物6棟、掘立柱塀1条、井戸1基、大土坑1基、小穴多数と古墳時代の掘立柱建物、縄文時代の斜行溝などである。遺構検出面は縄文時代の斜行溝以外は現地表下約50~60cmであった。以下、奈良時代のものを中心に各遺構の概要を記す。

#### (1) 北面回廊SC1

西隆寺の回廊については、1989年度の平城宮跡第209次調査で、桁行方向柱間間隔10尺・梁間方向柱間間隔8尺、複廊の形式を持つ東面回廊を検出し、さらに1990年度の同第212次調査ではその東面回廊が西へ曲がる回廊東北隅を検出していた。今回の調査では、第212次調査で検出した回廊東北隅から西へ延びる北面回廊のうち、北側柱の礎石据付掘形5個を検出した（うち1個は第212次調査で一部検出済み）。桁行方向柱間間隔は10尺で東面回廊と同じであった。礎石据付



図73 第221次調査遺構図 (1 : 200)

掘形の形状は径150cm前後の不整円形もしくは長円形で、厚さ15~20cmの埋土がレンズ状に残るのみであった。

なお、北面回廊の北側に点々とある瓦溜りは北面回廊が廃絶した後に投棄されたものである。

### (2) 調査区北部の建物等

SB 2 衍行8間以上梁間2間の掘立柱東西棟建物。衍行方向柱間間隔7尺、梁間方向柱間間隔8尺。

SB 3 衍行10間以上梁間2間の掘立柱南北棟建物。衍行方向、梁間方向とも柱間間隔7尺。柱掘形は1辺1m前後の隅丸方形。

SB 4 東西2間南北2間の掘立柱総柱建物。東西方向の柱間間隔は5尺5寸、南北方向の柱間間隔は6尺5寸。

SB 5 衍行3間、梁間2間の掘立柱東西棟建物。床付きまたは総柱で、衍行方向柱間間隔6尺、梁間方向柱間間隔7尺。

SB 6 東西方向柱間間隔7尺、南北方向柱間間隔7尺の掘立柱南北棟建物か。

SB 7 東西方向柱間間隔8尺の掘立柱建物か。

SA 8 柱間間隔9尺、4間以上の掘立柱東西塀。

存続時期等については、SB 2は出土遺物から西隆寺に先立つ時期の建物である可能性も残すが、東西に長い形状から西隆寺に伴う、例えば僧坊といった建物と考えたい。また、そのほかの建物等についても西隆寺が史料的に10世紀までは存続していたことが確認されることから、西隆寺に伴うものと考えるのが妥当であろう。

### (3) 井戸及び大土坑

SE 9 調査区南部西端で検出した井戸。掘形の南北長約2m、井戸枠の横板を止めていたとみられる杭のうち検出できた東側の2本の杭の距離約90cm。奈良時代の綠釉陶器1点とともに平城宮土器Ⅶ（平城上皇の時期）の土師器・須恵器が出土した。このことから、西隆寺建立以前のものでないことは明らかである。しかし、おそらく平安時代の初頭には既に存在したものとみられる。

SK10 調査区西南部で検出した径2m強の不整円形の土坑。埋土から出土した遺物の中に、平城宮瓦編年I期後半の軒平瓦6664Gaが1点ある。このことからだけでは判断はできないが、西隆寺に先立つ時期の、宅地に伴う遺構の可能性もある。また、湧水が激しく掘り下げが十分できなかったが、井戸であった可能性も残る。

#### (4) 繩文時代の溝

今回の調査区の東側に隣接する第212次調査区では、斜行溝を検出し、繩文時代晩期の土器が出土している。その斜行溝の延長部を確認するため、調査区東部で奈良時代の遺構検出面からさらに約1m掘り下げた。その結果、斜行溝の北肩を検出したが、遺物は全く出土しなかった。

### 3 遺 物

**瓦塊類** 調査区の全域から多量の瓦が出土した。軒丸瓦12点、軒平瓦20点、鬼瓦1点があり、平城宮瓦編年IV期のものが主体である。それ以外には、丸瓦が780点(111kg)、平瓦4918点(548kg)を数えた。軒丸瓦では6235Cが5点、軒平瓦では6761Aが5点出土したのをはじめ、西隆寺にかかわるものが大半を占める。なお、本調査で出土した軒瓦は、第219次調査出土の軒瓦とともに図72に掲載したので、参照されたい。

表15 第221次調査出土瓦集計表

軒 丸 瓦			軒 平 瓦			道 具 瓦	
型 式	種	点数	型 式	種	点数	種 類	点 数
6 1 3 3	N	1	6 6 4 3	D	1	鬼 瓦	1
	C	5	6 6 6 3	C	1		
6 2 3 5	I	1	6 6 6 4	G	1		
	F	1	6 6 7 5	A	2		
6 2 3 6	不明	1	6 6 9 1	A	1	丸 瓦	
6 2 3 7	A	1	6 7 2 1	A	1	重 量 kg	111.45
型 式 不 明		1		不明	1	点 数	780
平安 時 代		1	6 7 3 9	A	1		
			6 7 6 1	A	5		
			6 7 6 4	A	3		
			6 7 7 5	A	1	平 瓦	
			型 式 不 明		2	重 量 kg	548.03
軒 丸 瓦 計	12		軒 平 瓦 計	20		点 数	4,918

**土器** SB 2 の柱穴掘形から平城宮土器編年Ⅲ以前の土師器杯底部、同抜取穴から平城宮土器Ⅲ・Ⅳの土師器Ⅲ及び土師器杯、SB 5 の柱穴掘形から9～10世紀の土師器杯が出土した。また、SE 9 の井戸掘形及び埋土から、平城宮土器Ⅶの土師器、須恵器数点と奈良時代の縁軸陶器 1 点が出土した（図74）。1 は須恵器杯 B 蓋で、口径 16.6 cm、高さ 3.2 cm。灰褐色を呈し、口縁端部が強く屈曲する。2 は土師器Ⅲ A II。口径 17.5 cm、高さ 2.1 cm。a 手法で調整し、口縁部直下を強くよこなです。

#### 4 考 察

##### (1) 北面回廊と講堂

今回の調査では、西隆寺北面回廊の北側の柱列を検出した。第209次調査及び第212次調査の成果から、回廊の梁間の柱間寸法は 8 尺であることが判明しているので、北面回廊の中心の柱列の位置は北側の柱列より 8 尺南にくると考えてよい。この中心の柱列と 1971 年度の調査で明らかとなっている金堂の心との距離は 32.5 m 前後、ほぼ 110 尺となる。第209次調査では東面回廊の中心の柱列と金堂の心との距離は 130 尺であることが明らかになっており、回廊が東西、南北ともに金堂の心を基準に建設されていることが推定できる。

次に講堂は、前述したように西大寺伽藍絵図では金堂の北方で北面回廊に取り付く形で描かれているが、今回の調査では基壇あるいは礎石に関連する遺構は全く検出できなかった。調査区南部では、全体的に遺構の残存状況がよくなかったので、この位置に講堂が存在しなかったとはにわかに断定はできない。しかし、2 (3) でふれた井戸 (SE 9) の存在時期から、もし存在したにしても比較的短期間で廃絶したものとみられる。また、この SE 9 の存在は、講堂のみならず伽藍中心部の荒廃がかなり早かったことを示している。

##### (2) 北面回廊北部の建物等の変遷について

北面回廊北部の建物等の並存及び前後関係については、調査結果から以下の事項が指摘できる。

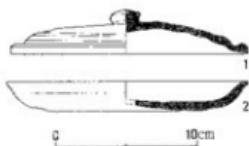


図74 SE 9 出土土器 (1 : 4)

① SB 2 は SB 3 ・ SB 4 ・ SB 6 とは並存しない。

② SB 3 は SB 5 ・ SB 7 ・ SA 8 とは並存しない。

③ 柱穴の切り合い関係から SA 8 は SB 3 よりも古い。

④ SB 2 の複数の柱穴の柱抜取り穴から平城宮土器編年Ⅲ・Ⅳの土師器が、また SB 5 の柱掘形から平安時代（9～10世紀）の土師器が出土していることから、SB 2 は SB 5 よりも古いと推定できる。

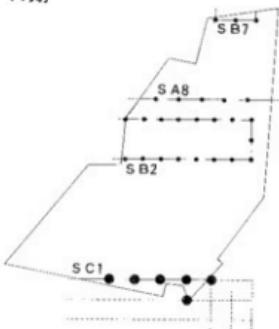
⑤ SB 3 と SB 6 は、桁行方向、梁間方向とも柱間隔が 7 尺で南側の柱筋をそろえていることから、同時期の建物である可能性が高い。

以上のうち①、②から少なくとも 3 時期以上の変遷があることが明らかであるが、各建物等の前後関係については③、④、⑤以外の手がかりがないため確定できない。一応、一案を図 75 に示しておく。

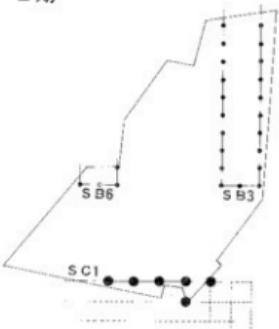
いずれにせよ、前述の西大寺伽藍絵図では北面回廊の北側は空地として描かれているが、今回の調査の結果、以上のように比較的多くの建物等が継続的に存在していることが明らかになった。このことは、西隆寺が存続しながらも、中心部の伽藍が荒廃し、それほど整然とした秩序をもたずく建物等が建設されていたことを物語るのかもしれない。

（小野健吉）

#### A期



#### B期



#### C期

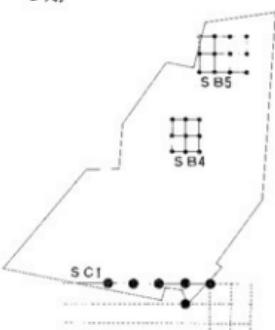


図 75 遺構変遷図

## 11 法華寺境内の調査 第215—15次

法華寺の境内で、薬師堂の移転に伴う調査と駐車場を囲う築地塀の改築に伴う調査を行なった。また、現在の南門に取付く南築地塀の改修に伴う立会い調査でも礎石列を発見しているので、併せて報告する。

### 1 薬師堂の移転に伴う調査区

棟札によって1666年（寛文6）に建立したことがわかる現在の薬師堂を、北へ2mほど移して建てるため、建物撤去後に現基壇を中心に面積56m<sup>2</sup>を調査した。前身建物の基壇と礎石据え付け掘形が見つかり、現在の薬師堂と同規模の前身建物があったことがわかった。前身建物の基壇は東西540cm、南北450cmで小さい三間堂であり、向拝はない。基壇は整地土上に高さ30cmほどを三層で築いている。基壇土に混入している瓦から建物は中世に建立したと考えられる。

現在の薬師堂の四隅にあたる柱位置の礎石は、他の礎石が人頭大であるのに、その倍ほどある。前身薬師堂も同様である。

### 2 築地塀の改築に伴う調査区

この調査は三ヶ所に分かれているので、西からI区、II区、III区と呼んで記述する。I・II区は幅5m、長さ10m、III区は幅3m、長さ10mの調査区である。

三区に共通するのは、室町時代初期にここに東西の築地塀が築かれ、何度かの改修を受けて現在に至っていることである。江戸時代の『大和名所図絵』にも、この位置に築地塀を描く。この築地の基底部は土を突き固めて築いた様子ではなく、いわば土を積み重ねただけであり、したがって全体に柔らかい。

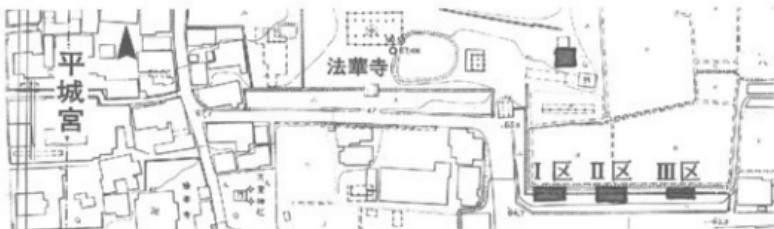


図76 第215—15次調査位置図

## I 区

層位は上から盛土、旧耕土、床土、遺物を含む茶褐色土で、これらを取り除くと奈良時代の遺構面に達する。上層の遺構として発掘区南端部で室町時代の築地塀を検出し、発掘区西半分を掘り下げ奈良時代の遺構面で十字に交わる溝、掘立柱建物2棟を検出した。

### 奈良時代の遺構

溝SD03、SD04は調査区内で十字形をなしている溝で次に述べる掘立柱建物より古い遺構である。幅100cm前後で、深さは10cmほどと浅い。このうち東西溝SD04は、南一条大路の北側溝の位置にあたり、平城京造営時に掘削した可能性がある。ただし、南北溝SD03は条坊とは無関係の位置にあたるから、決定的ではない。発掘区南よりに検出した掘立柱建物SB01は東西棟建物と思われ、桁行は3間分を検出した。柱間数は不明であるものの、柱掘形が70cm～100cm、柱痕跡は30cmと大きく、規模が大きい建物を予想させ、桁行5間以上と考えられよう。柱間寸法は、1尺29.7cm前後で桁行10尺等間、梁間9尺と考えられる。建物の南側に建物が広がる余地がないから、検出した一部は建物の南底に当たる。また、発掘区北に掘立柱柱穴2つを検出し、塙SA05とするが、建物の可能性もある。

II区で検出した奈良時代の築地は、I区では検出できなかった。

下層遺構として検出した奈良時代の遺構と、上層遺構として検出した室町時代の遺構の間に、瓦が散乱する面があったが、遺構を伴ってはいない。

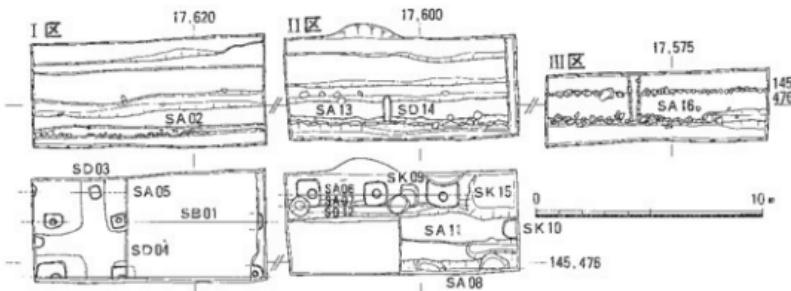


図77 第215-15次調査遺構図（1：250 上3図上層、下2図下層）

### 室町時代の遺構

築地塀SA02は基底部で幅150cmほどがのこり、基壇南側を白粘土で固定し玉石あるいは瓦を数段重ねて化粧とする。瓦には軒瓦が混じり、その文様から室町時代初期のものであり、築地もその頃であろう。

### II 区

層位はI区と同じで、上から盛土、旧耕土、床土、遺物を含む茶褐色ないし灰褐色土があり、これらを取り除くと奈良時代の遺構面に達する。東西に並ぶ掘立柱穴列を3条、土坑2基、東西築地2条を検出した。上層の遺構である南端の築地1条を除いて奈良時代の遺構と思われる。

### 奈良時代の遺構

掘立柱穴列である3条は建物にまとまるか塀の柱列かは不明である。いずれも東西列で、北の一列SA06は桁行2間分を検出した。柱間数は不明であるものの、柱掘形が100cm～140cm、柱痕跡は36cmほどと大きく、建物にしても塀にしても、相当大きい規模であろう。1尺は29.7cmで、柱間寸法は10尺等間と考えられる。北の一列SA06に重複してそれより新しいSA07があり、調査区の南にSA08がある。掘立柱穴列SA07とSA08の柱穴は丸味を帯びている。

築地塀SA11は地山を削り出して基底部をつくっている。基底部の北には肩幅70cmほどの東西溝SD12があり、築地の雨落溝と考えられよう。II区の東端の築地中央に方形の穴SK10があり、門の西柱穴かもしれない。

### 室町時代の遺構

室町時代の築地塀SA13は、奈良時代の築地塀の南にある。I区の築地塀の東延長部にあたるが、ここでは基壇化粧の玉石や瓦はなく裏込にあたる白粘土がブロック状になって基壇を固めていた。築地上には発掘区ほぼ中央に幅30cm、深さ5cmの南北小溝SD14がある。築地基底部を貫く、暗渠の痕跡であろう。

### 時期不明の遺構

発掘区の北東隅に大土坑SK15がある。枠などの施設は残存しないが、井戸であるかもしれない。

### Ⅲ 区

層位は、上から旧耕土、床土で、これを取り除くと中世の遺構面に達する。発掘区中央には、室町時代の東西築地塀SA16がある。この基壇の化粧石が良好に残っていたので、Ⅲ区では基壇を壊して掘り下げることはせず、したがって奈良時代の遺構面に達していない。東西築地塀SA16のはかには遺構はない。

東西築地塀SA16はⅠ区、Ⅱ区で検出した東西築地塀SA02、SA13の東延長部に当たるが、Ⅰ区、Ⅱ区と異なりⅢ区では玉石で化粧している。築地の内外では地面に高低差があったらしく、内側である北が40cm高い。基壇化粧は、外側にあたる南で人頭大の石を二段に重ね、所々に瓦を併用している。基壇幅は150cmあり、北側には土層断面の観察の結果、雨落溝があったと判断される。

### 3 その他の調査

現在の南築地塀の改修に伴う調査を部分的に行なった。現在の築地の基底部を取り除くと東西に並ぶ礎石があり、これらの礎石は築地には無関係であり、中世から近世にかけての建物跡と考えた。現本堂を中心軸線としてほぼ対称の位置で、東に3個、西に1個の礎石を確認したに留まるが、現在の南門と本堂を結ぶ中軸線の対称の位置に礎石建物があったと考えられよう。礎石は長軸80cmほどの自然石で、柱間は3mで10尺となろう。建物全体の様子は不明である。（上野邦一）

### 4 Ⅰ区、Ⅱ区出土の遺物

土 器 奈良時代から近世にいたる土器が出士した。ここでは、下層の掘立柱塀SA06の柱抜取穴から出土した土器を示す。1は土師器皿Aで、a. 手法で調整する。暗文はない。2は土師器鉢B。内面に放射暗文がある。3は須恵器皿B。いずれも平城宮土器Ⅲ～IVである。

（玉田芳英）

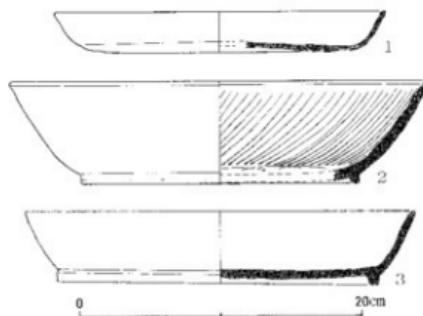


図78 下層塀SA06柱抜取穴出土土器（1：4）

**軒瓦** 白鳳時代から江戸時代までの各種の瓦が出土した（表16）。法華寺の前身である皇后宮所用軒平瓦6667A（図79-1）の顎の作り方には3種がある。第1は粘土板に顎用粘土を付加する段顎で、最も古式である。第2は瓦当部分が厚い粘土板に顎後縁用の若干の粘土を付加する段顎である。第3は瓦當下縁に面取りのない曲線顎で、新期の作り方である。今まで法華寺境内で出土した6667Aの顎の作り方や、範傷の検討が望まれる。出土量の最も多い軒瓦は室町時代前期（14世紀）のものであり、薬師寺との同範例が2例ある（図79-2・3）。3はすべて『薬師寺報告』の軒平瓦346の、瓦范切り縮め後の生産品であるが、焼成は両寺出土品とも軟質である。また、法華寺例は瓦當上縁と顎後縁に面取りをもつが、薬師寺例にはない。

（佐川正敏）

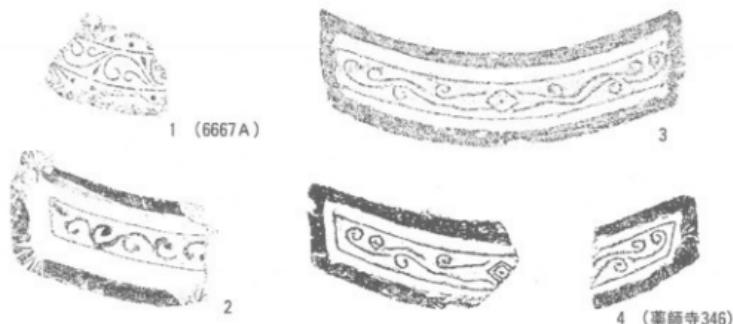


図79 第215-15次調査出土軒瓦（1：4）

表16 第215-15次調査出土瓦集計表

軒瓦		軒平瓦		道具瓦	
時代・型式	点数	時代・型式	点数	種類	点数
白鳳・盛り式	1	白鳳重瓦	2	古代・西戸瓦	1
	6126	A	6641	中世・西戸瓦	3
	B	6644	R	江戸・面戸瓦	1
	C	6667	A	中世か近世・西戸瓦	1
良	6138	1	6671	古代・駕斗瓦	2
	6276	Aa	6714	江戸・鬼瓦	2
	6285	A	6767	中世か近世・鬼瓦	1
	6348	Aa	6768	中世・複数不明	9
室町	高	1	B	江戸・複数不明	1
	巴	10	半安	道具瓦計	21
	巴	10	鎧合		
	巴	9	室町		
江戸	巴	8	中戸		
	巴	5	江戸		
	文字瓦	1			
	型式不明	1			
軒瓦計		57	軒平瓦計	72	道具瓦計
軒瓦計					
軒瓦計				重量kg	519.48
軒瓦計				点数	2,560
軒瓦計				重量kg	1675.90
軒瓦計				点数	10,695

## 12 長屋王邸および二条大路出土の木製品

### 1 はじめに

1987年から1990年にわたる長屋王邸および二条大路、藤原麻呂邸の調査では夥しい量の木製品が出土した。その一部は、1986年度～1990年度の『平城宮跡発掘調査概報』、奈良国立文化財研究所編1991『平城京長屋王邸と木簡』（吉川弘文館）に報告している。ここでは、その後の整理に伴って実測した遺物の一部を報告する。なお、遺物は膨大な量にのぼり、今後も機会を得て整理、実測を終了したものから順次報告したい。

### 2 木製品の類

井戸SE4770の木器（1～5） 平城京左京三条二坊のうち、一・二・七・八坪の4町をしめる長屋王邸では、正殿域に接して東西の外郭がある。井戸SE4770は、この東外郭の東北外側にある井戸跡である。井戸といっても実際には井戸枠を抜き取っており、そのあとごみ穴として木簡、木器、土器等を投棄していた。木簡には「長屋皇宮依一石春人夫」と記したものがあり、これによってこの地が長屋王邸と判明したことは記憶に新しい。木製品には人形（1）、マリオネット（2）、独楽（4）、陽物（5）、舟形、刀形、および曲物、糸棒などがある。ここでは祭祀具を主に紹介する。

人形は全長7.6cmの小さなもの。頭を圭頭に作り、肩と腰の両側面に切り欠きをいれるタイプで、手を表わす切りこみはない。いわゆるマリオネットは体部と、手か足の一部と思われる部品がある。体部は側面形を表わし、肩と腰の位置に手足の軸をいれる小孔を穿つ。顔には墨描などの表現はない。保存状態はやや不良。独楽は広葉樹の心材を加工したもので、一部には樹皮が残る。陽物は、針葉樹の心去り材を加工し、亀頭や鈴口を表現したもの。他端部は欠損し、これらの加工状態は不詳。舟形は丸木舟の形であるが、甲板には長軸に直交する刻みがあり、あるいは丸木舟に甲板を張った準構造船の模造品か。半分に切断している。

SE4770から出土した木簡には靈龜、養老の紀年銘があり、このうち年代が降

りるのは「養老元年十二月廿二日」の日附である。木簡の投棄は、この養老元年（717）末前後と考えてよく、木製品の年代も同じ頃に位置づけられよう。ところで、人形は手の切込みがないやや特殊なタイプで、平城宮壬生門の調査で初めて明らかになった。最近では静岡県元宮川・神明遺跡での類例が増しており、日本における偏平人形の出現時期にからんで注目されている（静岡県埋蔵文化財研究所1991『大谷川』IV）。この形の人形は、数は少いながら平城宮では壬生門前の二条大路北側溝（『木器集成図録』№5304）や、平城宮東大溝SD2700（『昭和61年度平城概報』P.21-8）に類例があり、本例はこのうちで最も実年代が遅る。8世紀初頭の人形が、地方によって実際に形や作りが違ったのか否かの問題や、この型を寫した可能性が強い銅製人形の年代をめぐって、今後論議を呼ぶことになろう。

**井戸SE4225の漆器**（17） 井戸SE4225は、奈良末のF期に属す。長屋王邸は王の死後、再び四つの坪に分割されるがこのうちの七坪の南西隅近くに位置する。この井戸の埋土からは漆器が出土した。器種は杯Aに属し、推定口径16～17cm、高さ3cm。口縁部と底部の一部を欠く。木胎の上に布着せをし、黒漆塗りとする。底面のほぼ中央に針書き「少川」がある。

『関市令』出壳条には「それ横刀、槍、鞍、漆器の属は各造る者の性名を題し験らしめよ」とある。『日本令』のもとになった『唐令』には似た規定があり、また実際に中国では漆器に工房名や工人名などの記載をみる。しかし、令の規定にかかわらずわが国古代の漆器（容器の類）に、製作者名などをみるとあまりない。その稀な例に属する平城京左京一条一坊の東一坊大路側溝SD650の漆器には、2例がある。1例は高台を作りだした杯Bの底面中央に「東」と針書きがあり、いま1例は椀の外面に朱漆で2字ないし3字の文字（判読不可）がある。しかし2例とも9世紀代に属るものであり、本例はそれより遅る。この「少川」が製作者を示すのか、所有者なのか、あるいはその他の意味なのかは明らかにしがたく、今後の課題といえよう。

**東西溝SD5300・5100の木器**（6～16・18～26。24のみSD5100、他はすべて

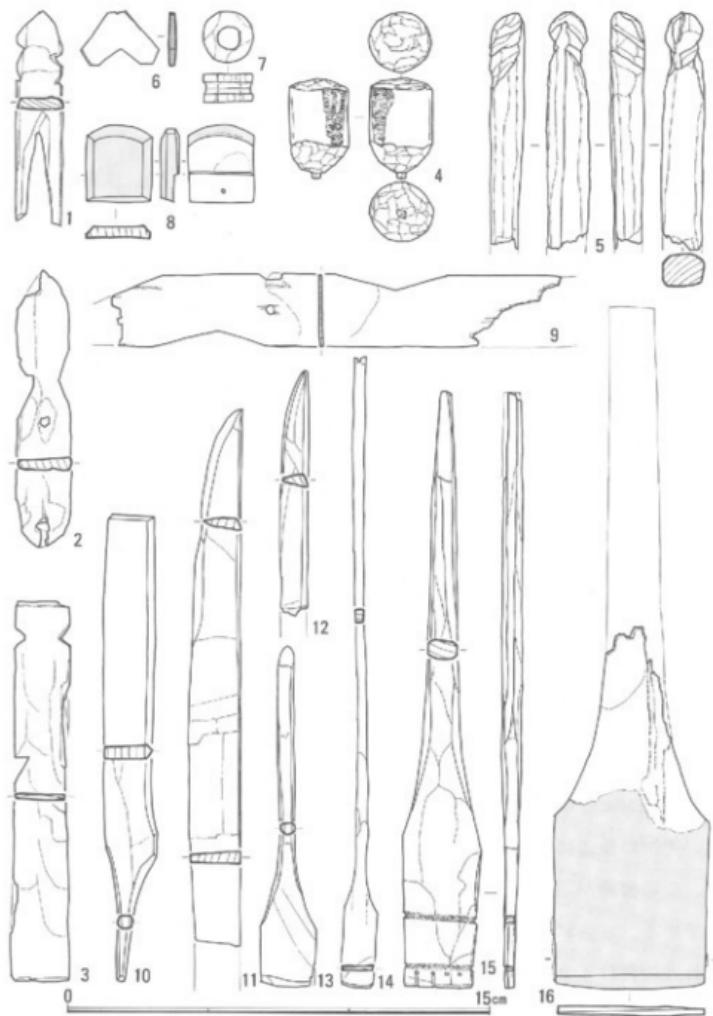


図80 SF4770・SD5300出土の木器（1：2）

SD5300) 長屋王邸の北には幅35mの二条大路がある。この大路の両側には幅約3m、長さ130mと約70mの東西溝SD5100とSD5300があり、ここから膨大な遺物が出土した。伴った木簡には天平8～10年（736～738）の紀年銘、墨書き土器には天平12年（740）の紀年銘があり、この頃に投棄したらしい。ここに報告する木製品には器物の一部（6～8）、木製模造品（9～12）、工具（13～16）、容器（18～20）、曲物（21～24）、その他（26）などがある。

**器物の一部** 6は琴柱。琴の弦を張り音程を整える琴柱は、長屋王邸と周辺から3点が出土している。これは平面形を六角形に造り、上底には弦を受ける溝をつけ、下底は三角形に切り欠く。高さ1.9cm、最大幅2.8cm。小さく薄いところから、模造品の可能性もある。同じSD5300からは墨書きのある琴柱が出土しており、これと類似する。同じ琴の部品か。8は帶金具の鉈尾に似た木製品。長方形の板の一端を弧状に削り、表の縁は3辺を面どりする。裏面は長辺の中央付近で段をつける。器物の一部であろうか。表には墨の痕跡があり、裏面全面には剥離痕跡があり、また木釘が一部残る。長さ2.7cm、幅2.4cm。7は、いわゆる浮袋の口に類似した環状の木製品。直径1.7cm、高さ1cm。

**木製模造品** 11・12は刀子形である。9は鳥形ないし馬形の一種か。現状では両端を欠き、上面に2カ所、下面に1カ所の切り欠きがあり、中心部の左寄りには穿孔がある。10は、一端を直角に截ち落し、他端部を茎状に削り細めたもの。一側辺を刃状に削り出しており、あるいは一種の刀形であろうか。

**工具** 篦および刷毛がある。15は刷毛の完形品。全長21.2cm、最大幅2.8cmの刷毛。先端の側辺に切りこみをいれて毛を挟み、紐で結縛する形。紐は現存しないが、その痕跡が明瞭で、側辺には紐づれを防止する切り欠きを上下各2カ所にいれている。さらに、毛のずれを防ぐために先端に針穴を穿ち、糸で固定している。針穴の数は4カ所。16は漆篋。柄の部分を欠く。最大幅5.5cmを測り、先端部は片刃に削る。全体に漆が厚く付着する。

**容器** 曲物以外の容器には、皿および杯がある。19は皿A。破損が著しいが、口径29.8cm、高さ1.6cmに復原できる。底面の中央にはロクロの軸部にとりつけ

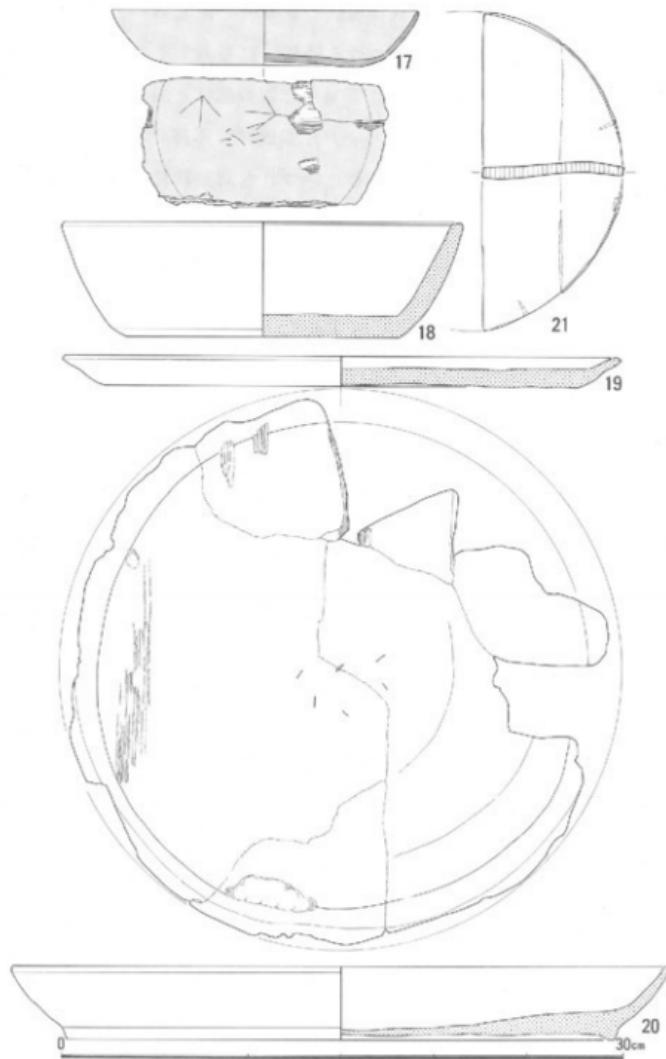


図81 SE4225・SD5300出土の漆器・木器 (1 : 3)

た鉄爪の跡が、かすかに残る。これは現状で6カ所を数えるが、爪形の方向には規則性がなく、あるいは軸部にとりつける時に、打ち直しをしたのであろうか。18は杯A。口径21.5cm、高さ6.2cm。20は須恵器の皿Bと同じ器種。現存するのは約半分。口径35cm、高さ4.0cm。ロクロ爪の痕跡は不詳。この3点ともに白木造りで、漆を塗った痕跡はない。しかし、いづれも同じ器種の漆器があり、類例の少ない漆器の大きさなどを知る上に、貴重な例といえよう。木取りは3点ともいわゆる横木どりである。25は容器の把手。いわゆる槽の類か。把手に接した縁の上面には鉄釘がのこる

曲物 側板を含め完存しているのは22の1例のみ。他は底板のみ。22は口径が16.4cm、高さ6.1cmの小型の曲物。23は底板のみ。底面の中央には大きく「益人」の刻字がある。ただし、新しいキズなどがあり、刻字の一部は欠損している。この刻み方は、字の輪郭に沿って刀子の刀をいれてゆく双鈎鎌墨の手法をとっているが、墨は点じていない。この字が底板の内（つまり底面）にあるのか、外側にあるのかは問題であるが現状では不詳。刻字の周辺には刀子の切り傷が無数にのこる。この東西溝SD5300の南には、やはり時代・性格ともSD5300と同じ東西溝SD5100があり、ここからは「奉身万歳福」、「益万呂」、「万呂」と刻字がある曲物が出土している。本例も、これらとともに、一連のある行事の中で使われたのであろうか。

24は曲物の底板。直径18.2cm。4箇所に側板を留めた樋とじの痕がのこり、内側には側板が接していた痕跡がある。これをもとに復原した側板の直径は、17.4cmとなる。底板の外側（この曲物が蓋になるとすると、蓋の上面）には、「建部建部部□」の墨書がある。SD5100の出土品。

その他 八角形の板がある。厚さ6mmから7mmの板材（板目板）を、八角形に切断したもの。八角形の四辺の中央から「十字」状に墨線をひく。これは四辺の中央に小さな刻みをいれ、それを目印にして墨線をひくが、筆ではなく、墨糸で行なったようである。この墨線は一面にのみあり、他面ではない。この板の性格について不詳である。

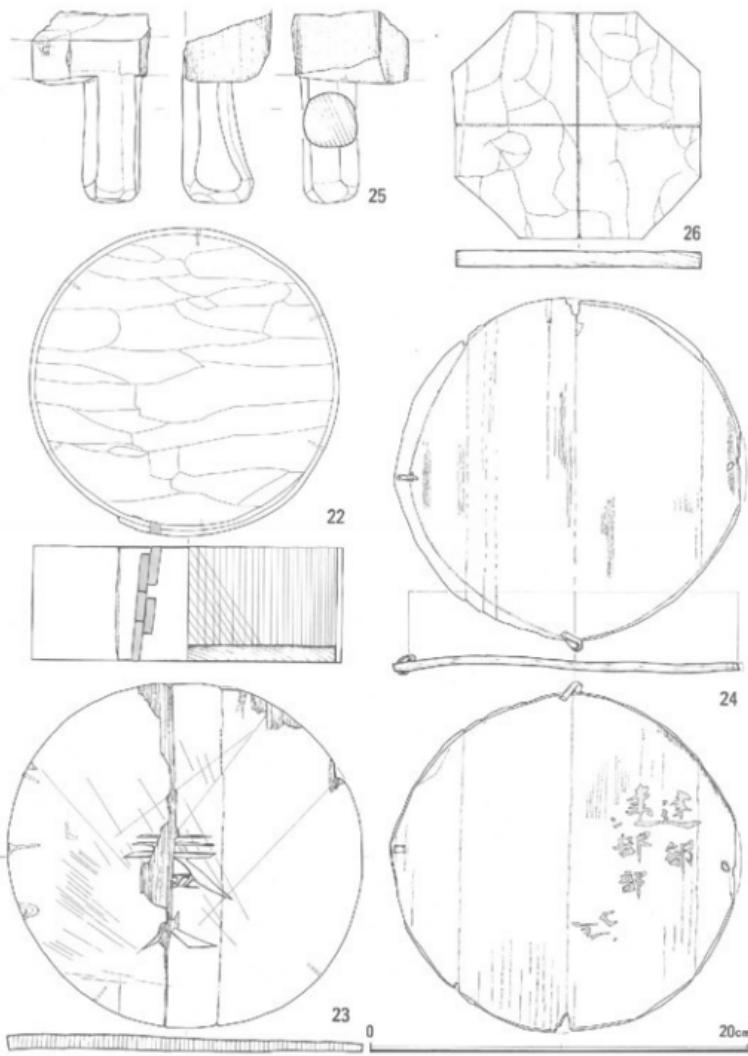


図82 SD5300・5100出土の木器 (1 : 3)

### 3 建築部材

奈良時代の建築物はそのほとんどが滅び、その実態は法隆寺など今日に遺る数少い建築と、地下に残る建物遺構とから復原している。稀には、掘立柱の礎板や井戸枠、暗渠や排水溝の側板などに建物の部材を転用していることがあり、古代建築を復原する上に貴重な資料となっている。ここでは礎板に転用した構造材の一部と、井戸枠に転用していた流板とを紹介しておく。

礎 板 (27) 一端に筏穴がのこる1辺が13cmの角柱で、全長78cmを測る。もとは建物の構造材だったようで、一面には当初材の風化した面がのこる。礎板に転用する際に、材の両端を斧で切断し、三面を手斧削りしている。手斧の刃のあたりは7.5cmと大きい。この手斧削りの後に「大」字を刻印している。印の直径は約3.3cm。刻印は4カ所に

ある。建物 SB 5250 出土。SB 5250は二条大路の北、左京二条二坊五坪の東辺にある二面庇の長大な南北棟建物。桁行は確認した範囲で20間ある。藤原麻呂の時代の建物と推定している。

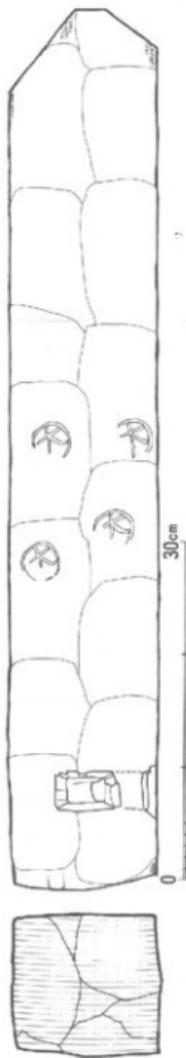


図83 SB5250の礎板に転用した構造材（実測図1：5、拓本1：2）

（金子裕之）

**大和葺下材** いわゆる大和葺に用いる流板の下材である。2枚出土した。1は、1986年度の第178次調査で検出した方形縦板組の井戸SE4116の側板に転用されていたもの（『昭和61年度平城概報』）。全長2235mm×幅227mmで、しのぎの高さは45mm。両側のひっかかり部分は、右側ではほとんど破損しているが、右側の下端近くで本来の形をとどめており、高さ42mmで上面の幅が20mm前後である。SE4116は、左京三条二坊七坪の東南隅近くの井戸。時期は奈良時代末である。2は、1989年度の第202-13次調査で検出した、東二坊坊間路西側溝から二条二坊五坪に導水する斜行溝（『1989年度平城概報』）の北側板に転用されていたもの。全長592mm×幅242mmで、しのぎの高さは44mm。両側の突起部分は左右ともに残るが、上面はすでにまるみを帯びている。また、左右でやや寸法が異なり、高さ×上面幅は左が38mm×16mm、右が53mm×22mmである。参考までに、法隆寺五重塔袋階の大和葺に用いている流板の葺き方を、図84に示しておく。下材の幅は0.98~1.00尺（約30cm）あり、今回出土した2材よりも一まわり大きいようである。（浅川滋男）

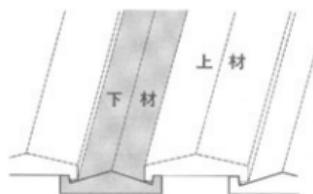


図84 大和葺上下材の納まり模式図

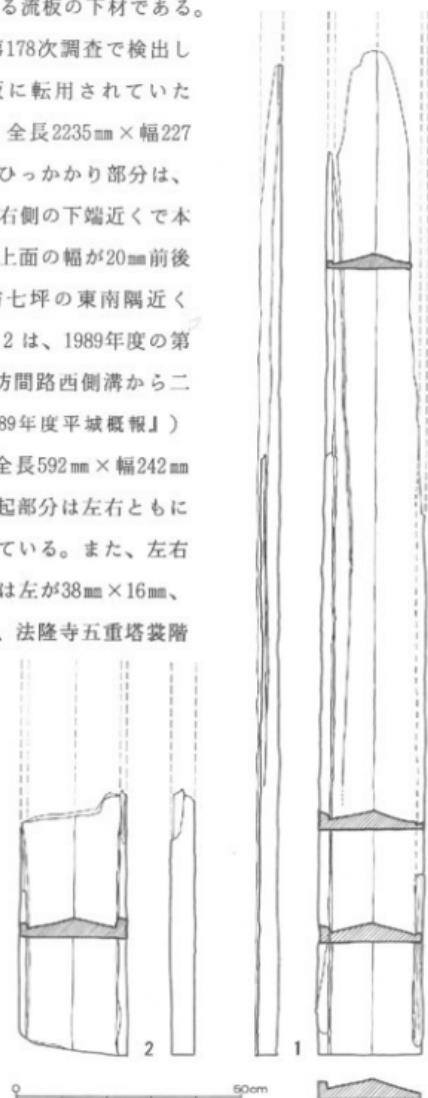


図85 大和葺下材実測図（2:25）

### III 出土試料の理化学的分析

#### 1 第216次調査におけるプラント・オパール分析結果について

1991年3月5日に採取した試料の分析結果を、図87、表17・18で示す。

資料の採取地点は調査区北壁の東端から約11mの位置にあたる。層序は、上から整備の置土、旧耕土（1層）、床土1（2層）、床土2（3層）、奈良時代の遺物包含層（4層）、奈良時代整地土（5層）、古墳・弥生時代の遺物包含層（6層）、弥生時代遺物包含層（7層）である（図86）。6層と7層の境界には幅10cm、高さ5cmほどの部分的な高まりがみられる。最初に、図87で示し

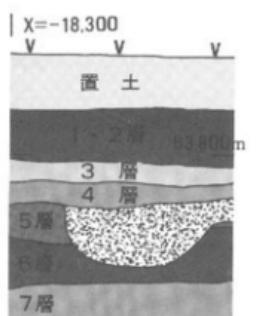


図86 試料採取地点上層図（1:20）

たグラフについて、簡単に説明しておく。

1) layers : 試料採取地点の土層模式図。グラフ中央部（ ）内の数字は土層番号。その左に示した小数字は、表層からの深さをcmで表わしたもの。

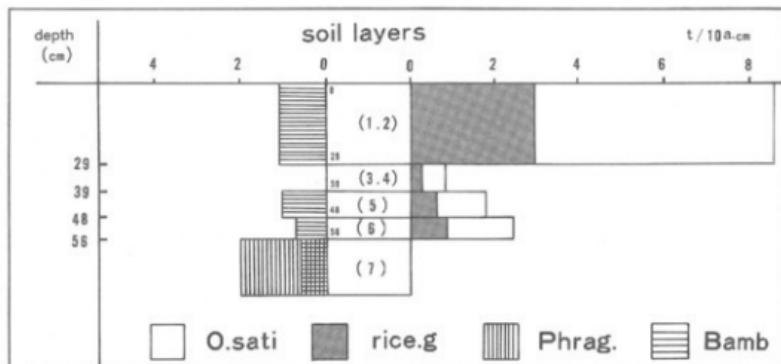


図87 プラント・オパール定量分析図

2) O. sati. : *Oryza sativa*. 栽培稻の地上部乾物重。

rice. g : *Oryza sativa* の穎果(穂)乾物重。

Phrag. : *Phragmites communis*. ヨシの地上部乾物重。

Bamb. : *Bambusaceae*. タケ亞科の地上部乾物重。

各植物体重は、それぞれの植物により異なる珪酸体密度係数と、土壤中から検出された各植物に由来するプラント・オバールをもとに算出されたものである。

3) 土柱模式図の右側に栽培植物、同左側に野・雑草を示している。単位 t / 10a · cm はその土層の厚さ 1 cm、面積 10a (1000 m<sup>2</sup>) に包含されるプラント

・オバールの数から推定した各植物の乾物重を t (トン) で表わしたものである。たとえば、その土壤が 10 cm の厚みであると、グラフで表わされた値に 10 を乗じた量の植物体が堆積期間中に生産されたことになる。生産量が年間生産量でないことに注意されたい。

4) 水田址が埋蔵されている土層では O. sati. の値がピークを形成する場合が多い。土層の堆積状況により一概にいえないが、水田址の層位はこのピークと一致するのが通例である。

5) Phrag. (ヨシ)、Bamb. (タケ) の乾物重変遷はその地点における土壤水分布状況の時代的変遷を知るうえに役立つ。ヨシは比較的水分の多い湿った環境に生育し、タケ (ササ) は比較的乾燥した環境下で繁茂する。両者の消長をみると、その地点の乾湿変化を推定できる。

表17 プラント・オバール定量分析結果

層名	植物體乾重 (t / 10a · cm)						
	イネ (O.sati.)	イネ穂 (rice.g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族穂実 (Pani.seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
1・2	8.582	3.007	43.529	19.766	0.000	1.090	1.609
3・4	0.836	0.293	3.470	1.576	0.000	0.000	0.353
5	1.814	0.636	15.056	6.837	0.000	1.037	1.148
6	2.492	0.873	2.585	1.174	0.000	0.712	1.575
7	0.000	0.000	0.000	0.000	1.984	0.550	0.000

このグラフと、今回行なった定量分析（表17）、ならびにそれに基づく生産量推定（表18）の結果、以下のコメントができる。

(1) 1・2層および6層にイネ (*Oryza sativa*) の生産総量のピークが認められる。1・2層は近年のイネ生産によるものであるが、6層のピークは先史時代の稻作によるものと考えられる。

先史時代水田の年間穀収量を100kg/10aと仮定すると、6層で生産された稲穀生産総量は約7t/10aと推定されることから、6層が生産面として利用された期間は約70年と推定される。ただし、この試算は当時の収穫が穗首刈であったことを前提にしている。

(2) 7層からヨシ (*Phragmites*) が検出され、7層堆積時の環境がやや湿潤だったことを示唆しているが、その後はイネの出現とともにタケ類が増え、乾燥化の様相を示している。このような傾向は他の遺跡でも一般的に認められる現象であり、水田稻作の開始により水管理が行なわれた結果と考えられる。

(3) 分析結果からみるかぎり、5層でも比較的短時間ではあるが、稻作が行なわれた可能性が高いと判断される。

（宮崎大学農学部 藤原宏志）

表18 プラント・オーマル分析による生産量推定結果

層名	厚さ (cm)	覆土厚 (cm)	GB数/g	植物化 PO/GB	PO数/g	倒伏率	PO数/c c	地上部収量 (t/10a·cm)		種実量 (t/10a)	確定生産量 (t/10a)
								種実量 (t/10a·cm)	確実生産量 (t/10a)		
1・2	0	20	299491	イネ 9/129	20895	1.397	29192	8.582	3.007	87.197	
				キビ 11	25338		35679	11.000	19.766		573.223
				ヨシ 0	0		0	0.000			
				タケ 7	16251		22705	1.690			
3・4				ススキ 4	9287		12974	1.699			
	29	10	299431	イネ 1/178	1682	1.691	2844	0.856	0.203	2.929	
				キビ 1	1682		2844	1.000	1.576		15.755
				ヨシ 0	0		0	0.000			
5				タケ 0	0		0	0.000			
				ススキ 1	1682		2844	0.953			
	39	9	303982	イネ 2/129	4713	1.309	6171	1.814	0.636	5.720	
				キビ 4	9428		12341	4.000	6.837		61.553
6				ヨシ 0	0		0	0.000			
				タケ 7	16495		21567	1.037			
				ススキ 3	7099		9256	1.148			
7	48	8	299583	イネ 4/226	5285	1.604	8476	2.492	0.373	6.984	
				キビ 1	1321		2119	1.000	1.174		9.391
				ヨシ 0	0		0	0.000			
				タケ 7	9248		14832	0.712			
				ススキ 6	7927		12713	1.676			
	56	-----	354354	イネ 0/174	0	1.406	0	0.000	0.000		
				キビ 0	0		0	0.000	0.000		
				ヨシ 1	2037		2953	1.984			
				タケ 4	8146		11453	0.550			
				ススキ 0	0		0	0.000			

## 2 西隆寺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、長期間地中に埋蔵されると圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子<sup>(1)</sup>、約5千年前のハーゼルナット種子<sup>(2)</sup>に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した。<sup>(3)</sup>

脂質とは、有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質、および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量とともに肪質中では最も多い。脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持ち、さらに動植物の種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、また、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って出土遺物の脂質の種類、およびそれらを構成している脂肪酸とステロールの組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能である。

この「残存脂肪分析法」を腐朽分解の進んだ、考古学的実証の困難な遺跡の解明に適用し、出土遺物に残存する脂肪を分析することによって、西隆寺跡から出土した土器の性格を解明しようとした。

## 1 土壤試料（図88）

西隆寺は奈良時代に造営されたもので、その寺院の回廊の北東の隅から壺が出土した。壺内底部からは銭5点が底にはば接した状態で見つかっており（本書108頁図62・63）、この壺は胞衣壺と推定されている。遺構内での土壤試料採取地点を図88に示す。壺の外側の土で壺の底に接した部分のものを試料No.1、同じく壺の外側の土で壺の側面に接した部分のものを試料No.2、壺の外側の土で試料No.2から少し離れた部分のものを試料No.3、壺の内部の土で底からやや離れた部分のものを試料No.4とNo.5、壺の内部の土で銭に接した底の部分のものを試料No.6とした。

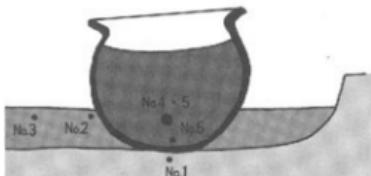


図88 土壤試料採取地点

## 2 残存脂肪の抽出（表19）

土壤試料15～415gに3倍量のクロロホルム-メタノール(2:1)混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1%塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表19に示す。抽出率は0.0007～0.0786%、平均0.0230%であった。この値は出土土器を胞衣壺と判定した平城京左京（外京）五条五坊十坪<sup>(5)</sup>から出土した胞衣壺内土壤試料の平均抽出率0.0199%とほぼ同率で、古墳時代の

表19 土壤試料の残存脂肪抽出量

試料No	試 料 名	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
1	壺の外側の土(下の土)	415.5	2.9	0.0007
2	壺の外側の土(接した土)	229.6	2.1	0.0009
3	壺の外側の土(離れた土)	326.5	4.9	0.0015
4	壺の内部の土(底からやや遠い土)	124.1	14.7	0.0118
5	No.4と同じ	43.2	19.2	0.0445
6	壺の内部の土(底の土)	14.5	11.4	0.0786

胞衣壺と判定した平城京右京三条三坊一坪から出土した土師器試料の0.0039%、<sup>(6)</sup>  
出土土器を胞衣壺と判定した岡山県津寺遺跡から出土した土器および土壤試料の  
0.0028%、<sup>(7)</sup>出土上器を胞衣壺もしくは骨壺と判定した宮城県郷柵遺跡から出土し  
た土器試料の0.0013%、<sup>(8)</sup>土器内土壤試料の0.0062%よりは高いものであった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂肪から構成され、遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪の結合したトリグリセリド、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

### 3 残存脂肪の脂肪酸組成（図89）

分離した残存脂肪に5%メタノール性塩酸を加え、125°C封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルをクロロホルムで分離し、ヘキサン-エチルエーテル酢酸（80:30:1）またはヘキサン-エーテル（85:15）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した。<sup>(9)</sup>

残存脂肪の脂肪酸組成を図89に示す。残存脂肪から11種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸（C16:0）、パルミトレイン酸（C16:1）、ステアリン酸（C18:0）、オレイン酸（C18:1）、リノール酸（C18:2）、アラキジン酸（C20:0）、エイコサモノエン酸（C20:1）、ベヘン酸（C22:0）、エルシン酸（C22:1）、リグノセリン酸（C24:0）の10種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー-質量分析により同定した。

6試料中、甕外試料である試料No.1～No.3と甕内試料である試料No.4～No.6は明らかな相違を示した。

試料No.1からNo.3はほぼ同じで、中級脂肪酸のパルミチン酸が約52～59%と最も多く、次いでパルミトレイン酸、ステアリン酸、オレイン酸の順に分布していた。これは植物腐植に多く含まれる脂肪酸組成パターンを示している。一般に考古遺物にはパルミチン酸の分布割合が高い。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が酸化されてパルミチン酸を生成するた

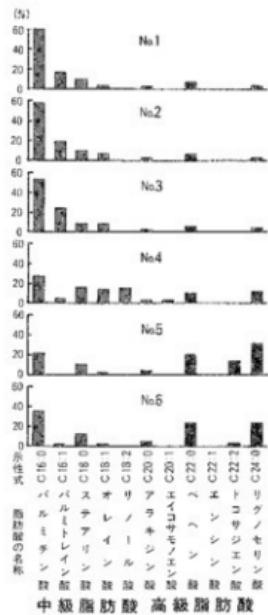


図89 残存脂肪の脂肪酸組成

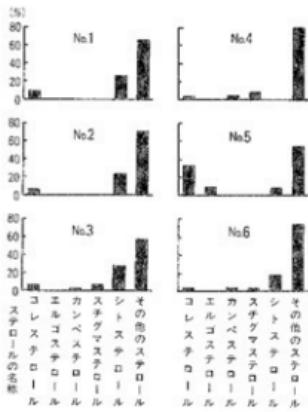


図90 残存脂肪のステロール組成

めで、主として植物遺体の土壤化に伴う腐植物から来ていると推定される。また高等動物、特に臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられるベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸は試料No.1～No.3で約8～10%と比較的少なかった。

試料No.4からNo.6は動物性脂肪が残存していることを示唆する脂肪酸組成パターンであった。

試料No.4は他の試料No.5、No.6とは多少異なる脂肪酸組成パターンを示した。最も多く分布していたのはパルミチン酸で約27%、次いでステアリン酸、オレイン酸、リノール酸がほぼ同程度分布していた。ステアリン酸、オレイン酸、リノール酸の分布割合は植物脂質にはない脂肪酸パターンで、血液成分に近いと考えられる。

高級脂肪酸であるベヘン酸、リグノセリン酸は各々10%前後分布していた。試料No.5とNo.6はほぼ同じで、典型的な動物性脂肪が残存する谷状の脂肪酸組成パターンを示した。特にベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸の含量は両者の合計で約45～50%という高いものであった。

しかしNo.5とNo.6では高級脂肪酸に少し違いがあり、No.5はドコサジエン酸を多く含んでいた。

以上のことから壺内の土壤試料には動物性遺体が残存していた可能性が高い。

#### 4 残存脂肪のステロール組成(図90・表20)

残存脂肪のステロールをヘキサンーエチルエ

ーテル-酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ビリジン-無水酢酸(1:1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を図90に示す。残存脂肪から5~26種類のステロールを検出した。このうちコレステロール、エルゴステロール、カンペスチロール、スチグマステロール、シトステロールなど7種類のステロールをガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

各試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは試料No.1~No.4とNo.6の試料で約2~8%分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは4~8%含まれている。試料No.5ではコレステロールは約32%という高率で分布していた。植物由来のシトステロールは試料No.1からNo.3では約24~28%分布し、試料No.5で約7%、No.6で約17%分布していた。しかし、試料No.4では全く検出されず、コレステロール以外のその他のステロールが約90%近くを占めていた。その他のステロールの大部分は動物性ステロールと推定される。現在更に検討を加えているところである。

土壤試料のコレステロール(動物質)とシトステロール(植物質)の分布比を表20に示す。一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壤で0.6以上、土器・石器・石製品で0.8~23.5をとる。試料No.1からNo.3ではその値が0.2~0.3で動物遺体の存在を示唆するものではなかった。試料No.5はその値が38.5という非常に高いものであった。試料No.6は壺内底部上壤であるにもかかわらず分布比が0.2と低く、動物性脂肪の存在を示す脂肪酸の結果とは一致しなかった。これは試料No.6が錢のあった底の部分の土壤で、その上面の試料No.4、

表20 試料に分布するコレステロールとシトステロールの割合

	試料 No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
No.5との間に粘土層があるので、	1	8.05	26.08	0.31
その影響がある	2	5.51	23.99	0.23
のかもしれない。	3	6.30	28.32	0.22
	4	2.10	—	—
	5	31.59	6.91	38.50
	6	3.35	16.99	0.20

## 5 脂肪酸組成の数理解析（図91）

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行なって各試料間の類似度を調べた。同時に平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土した胞衣壺試料、平城京右京三条三坊一坪から出土した土師器試料および人間の胎盤試料に残存する脂肪酸の類似度とも比較した。

各試料間の脂肪酸組成の類似度をパターン間距離にして表した樹状構造図を図91に示す。試料No.1、No.2、

No.3と平城京右京三条三坊一坪から出土した土師器壺試料は相関行列距離が0.2以内でA群を形成した。試料No.4は人間の胎盤試料、平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土した胞衣壺および胞衣壺内底部土壤試料とともに相関行列距離0.2以内でB群を形成した。試料No.5とNo.6は同じく相関行列距離0.2以内でC群を形成した。このことから試料No.4採取位置に胎盤様のものが存在していた可能性がある。従って、出土土器試料は胎盤を埋納していた胞衣壺である可能性が強い。

## 6 脂肪酸組成による種特異性相関（図92）

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のバルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分によれば、第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離

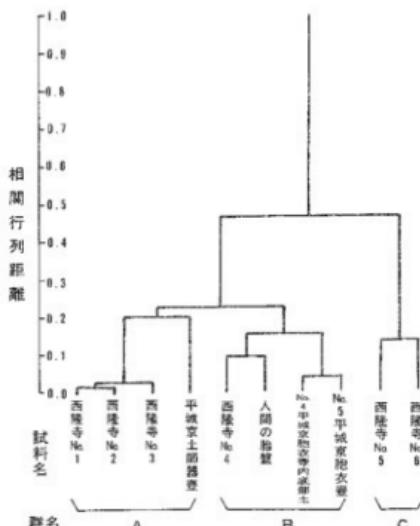


図91 残存脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限に移る原点から離れた位置に海産動物が分布する。

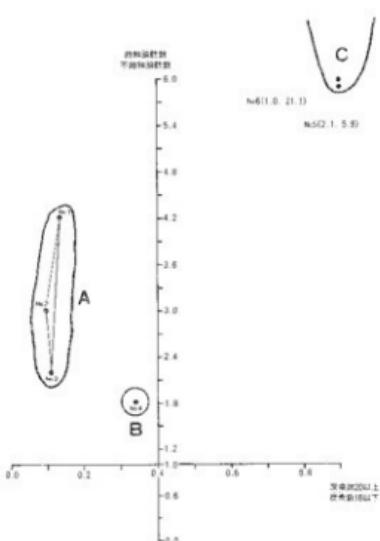


図92 残存脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

土壤試料の残存脂肪から求めた相関図を図92に示す。試料No.1、No.2、No.3はA群を形成し、第2象限の原点から離れた位置に分布した。この群は動物性脂肪の存在を示唆する位置に分布していることになり、植物腐植を示す位置とは一致しなかった。これは土壤の特性と関係するのかもしれない。試料No.4は単独でB群を形成し、第2象限の原点から少し離れた動物性脂肪の位置に分布した。試料No.5とNo.6はC群を形成し、第1象限の原点から遠く離れた位置に分布した。従っていずれの試料も第1、第2象限内に分布し、試料中には動物性脂肪が含まれていたことがわかる。

## 7 総 括

以上、西隆寺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析を行なった。残存する脂肪酸の分析および数理解析の結果、試料No.4、No.5、No.6には動物性脂肪が残存している可能性が強い。特に試料No.4には胎盤様のものが残存していた。またステロールの分析と数理解析の結果試料No.4とNo.5の位置には動物性脂肪が多量に残存していた可能性が強い。これらの成績からこの出土土器には胎盤に類する動物性遺体が埋納されていたと判定した。

現在、更に免疫試験により胎盤の確認を行なっている。

(株)ズコーチャ 中野寛子、明瀬雅子、長田正宏 帯広畜産大学 中野益男、福島道広)

## 参考文献

- (1) R. C. A. Rottländer and H. Schlichtherle. "Food identification of samples from archaeological sites", *Archaeo. Physika.*, №10, 1979, P.260.
- (2) D. A. Priestley, W. C. Galinat and A. C. Leopold. "Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maizeseed", *Nature*, №292, 1981, P.146.
- (3) R. C. A. Rottländer and H. Schlichtherle. "Analyse frühgeschichtlicher Gefässinhalte", *Naturwissenschaften*, №70, P.33.
- (4) 中野益男「残存脂肪分析の現状」『歴史公論』第10巻6号, 1984, P.124.
- (5) 中野益男, 中岡利泰, 福島道広, 中野寛子, 長田正宏「平城京左京(外京)五条五坊1坪から出土した陶衣壺の残存脂質について」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書—昭和63年度』1989, P.5.
- (6) 中野益男, 長田正宏, 中野寛子, 福島道広「平城京右京三条三坊1坪から出土した古墳時代前期の土師器に残存する脂質について」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書—平成元年度』1990, P.79.
- (7) 中野寛子, 明瀬雅子, 長田正宏, 中野益男, 福島道広「津寺遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」(未発表, 岡山県古代言語文化財センターより刊行予定)
- (8) 中野益男, 福島道広, 中野寛子, 長田正宏「郷楽遺跡から出土した埋設土器に残存する脂肪の分析」(未発表, 宮城県教育委員会より刊行予定)
- (9) M. Nakano and W. Fischer. "The Glycolipids of *Lactobacillus casei* DSM 20021", *Hoppe-Seyler's Z. Physiol. Chem.*, №358, 1977, P.1439.
- (10) 中野益男, 伊賀 啓, 根岸 孝, 安木教傳, 畑 宏明, 矢吹俊男, 佐原 眞, 田中 琢「古代遺跡に残存する脂質の分析」『脂質生化学研究』第26巻, 1984, P.40.
- (11) 中野益男「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」『貞脇遺跡—農村基盤総合設備事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団, 1986, P.401.
- (12) 中野益男, 根岸 孝, 長田正宏, 福島道広, 中野寛子「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」『ヘロカルウス遺跡』北海道文化財研究所調査報告書第3集, 1987, P.191.



写真1 第214次 挖立柱建物SB14100・14105（東南から）

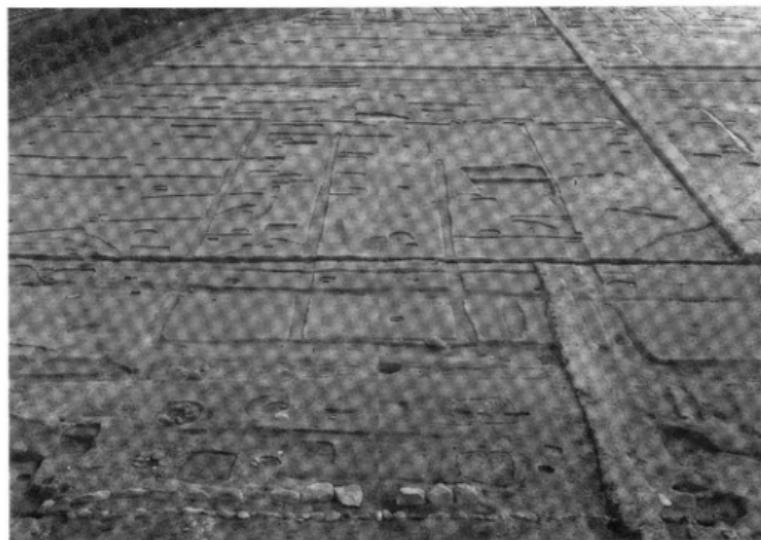


写真2 兵部省東門SB13730、宮内道路SF14350・14360・14370（西から）

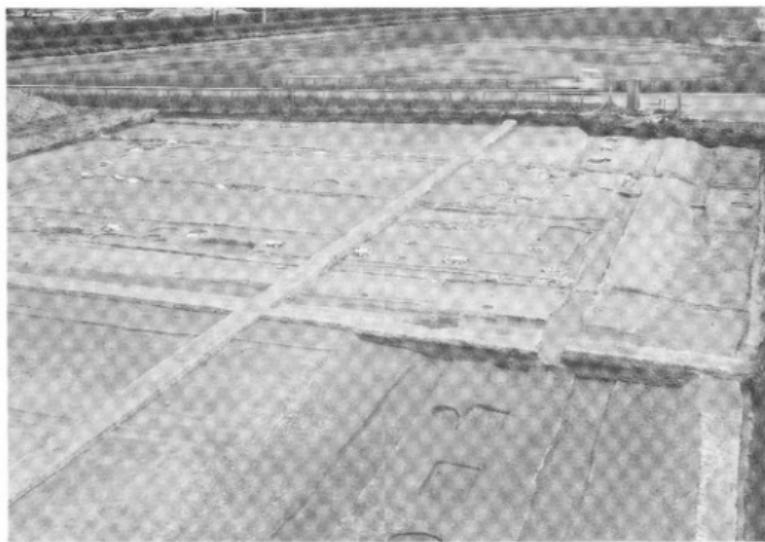


写真3 兵部省西南部の道構とSA1765（西南から）

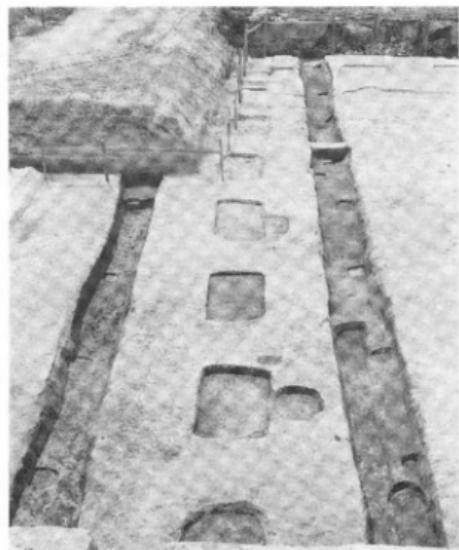
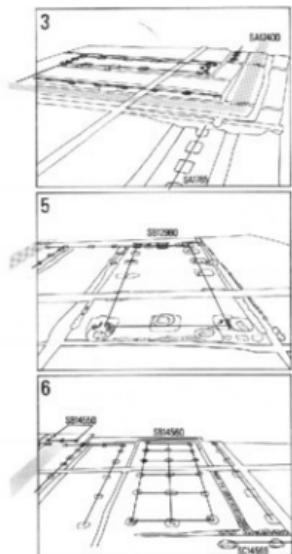


写真4 下層構SA1765と雨落溝、足場穴（東から）



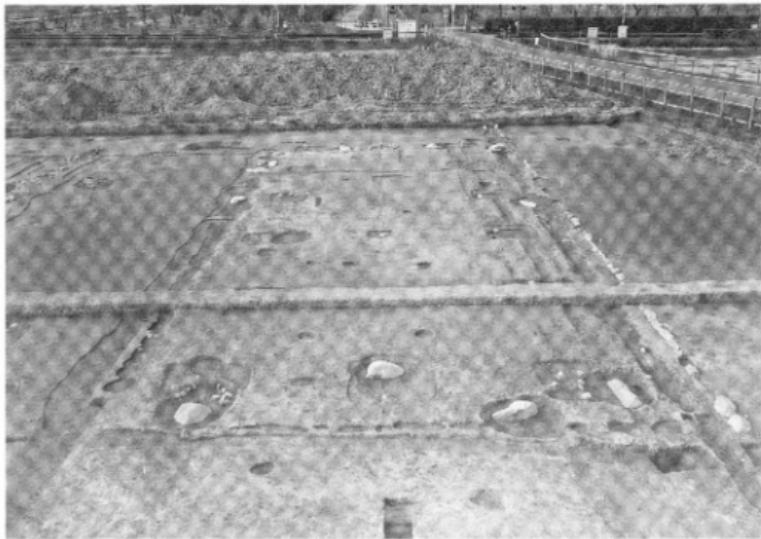


写真5 兵部省西第二堂と周辺の遺構（南から）

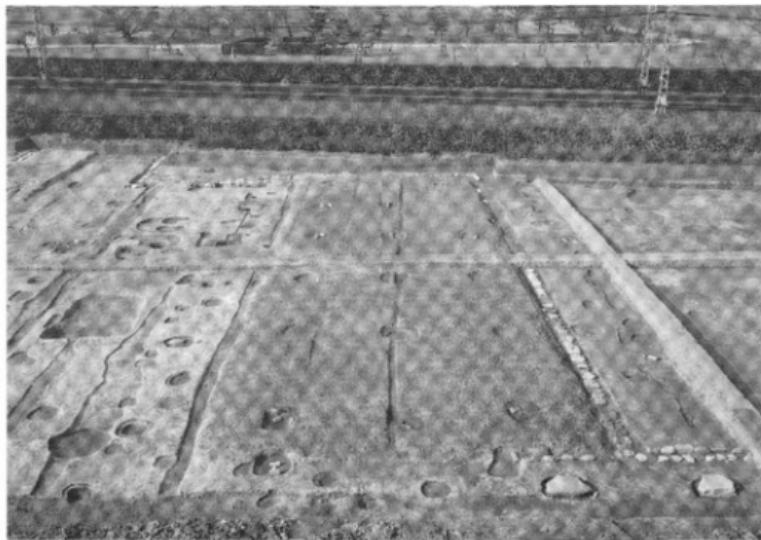


写真6 式部省西第二堂と周辺の遺構（南から）

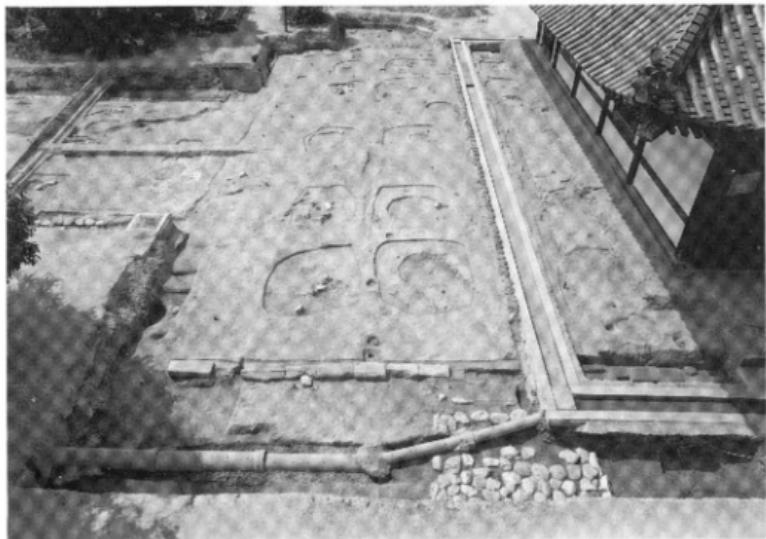


写真7 薬師寺講堂・北面回廊と講堂北石敷（北から）



写真8 第219次 西隆寺井戸SE08（西北から）

表21 その他の発掘調査一覧

調査次数	調査地区	検出遺構	出土遺物
215-2	右京一条二坊四坪	秋篠川氾濫原	丸瓦 0.70 kg、平瓦 5.80 kg 土器少量
215-9	平城宮北方遺跡	柱穴 2 個、東西溝	なし
215-10	平城宮北方遺跡	近世溝	近世瓦片
215-11	平城宮北方遺跡	奈良整地土、古墳時代窪み	埴輪片
215-12	右京一条二坊二坪	近世溝	近世瓦・土器片
215-14	右京一条二坊二坪	中世溝	丸瓦 2.68 kg、平瓦 9.38 kg 中世土器・木器
215-17	平城宮北方遺跡	地山確認	なし
215-18	法華寺旧境内	近代土蔵	丸瓦 0.15 kg、平瓦 2.80 kg
215-19	西一坊大路	地山確認	丸瓦 0.45 kg、平瓦 2.12 kg
215-20	左京一条二坊十坪	柱穴	丸瓦 0.50 kg、平瓦 2.85 kg

## 表紙カット

第122次・165次調査出土墨書き土器

平城宮では、官衙名を記した墨書き土器が出土することがある。「兵部」は、二条大路北側溝SD1250、「式曹」は南面大垣北の宮内道路南側溝SD4160から出土したもの。いづれも須恵器に墨書きをしたもので、壬生門内で東西に向き合う官衙をそれぞれ兵部省、式部省と比定する際の決め手の一つとなった。



1990年度  
平城宮跡発掘調査部発掘調査概報

1991.6

奈良国立文化財研究所